

3) 中世

a 館跡

A区で確認された堀で囲まれた館跡である。館に伴うと考えられる堀は第1号堀(S-135)と第2号堀(S-257)で、第1号堀は約50m南北に延びた後、東方に直角に折れる。一方第2号堀は、第1号堀が折れ曲がる場所で終わる。つまり、館の西側は二重の堀となっていた。内部からは、館に伴うと考えられる掘立柱建物7棟、大型土坑(廃棄土坑)1基、井戸1基などが検出された。館の内部南側約10m幅は土質が還元状態を示す明るい灰褐色を呈しており、遺構が見えなくなったのか、あるいは当初から無かったのか判断できないところであるが、いずれにしても低湿地状になっており、館内部の調査区東端も同様であることを考えれば、館存続当時から南から東側にかけたの周辺部は水田に利用されるような低湿地が取り巻いていたと考えられる。

第1号堀(S-135) (第35図)

略南北方向から、東方にほぼ直角に折れ、調査区外に伸びる。略南北方向に伸びる堀の方向はN-15°-Wであり、これは犬丸川にほぼ直交する角度である。北端は調査区外に伸び、現状ではあと数mで犬丸川であるが、1990年頃に行われた河川改修によって川幅が拡幅されており、当時の川幅は現状よりかなり狭かったことが想定できる(旧字図参照)。そうすれば、十数mほど北に延び、犬丸川に直接繋がっていたと考えられる。一方、東側に折れた堀がどのようになるのかは、旧字図から想定するしかないが、二つの可能性が考えられる。第4図を見ると、約20mほど伸びた後で北に直角に折れ、犬丸川に繋がる区画が認められるので、ほぼ半町規模で方形(一辺は犬丸川であるが)に囲むもの(第4図細赤点線)と、調査区内で直角に折れたあと、約100mほど直線的に東に延び、張り出し部を作るように一度南側に折れた後、再び東に折れ、緩やかに北に向かって犬丸川に直交する形で繋がるもの(第4図太赤点線)である。後者は、細長い水田区画が連なるもので、実際調査区内ではこの水田区画で堀が見つまっていることからすれば、後者の蓋然性が高いと考えられる。

堀の規模は、幅5m、深さは概ね0.6~0.7m、断面形は堀底が平坦で、箱堀に近い形状となる。南北方向に伸びる部分では、東側(館内側)の堀斜面に人頭大の川原石が堆積していた。東西方向に伸びる部分では全く確認できなかった。これは、西面する部分のみ堀の内側に石を貼った土塁が存在したことを示すものであろう。

また、南北方向の堀は、第35図の土層断面図に示すように、平面図の濃い灰色に塗った部分長さ13.7mに耕作を示す土壌の堆積が認められた。これは、一度堀が完全に埋まった後に、礫が堆積していた東側を除いた幅3~4mほどを掘り返し、耕作地としたものである。土壌からみてこれは水田ではなく畑地であると考えられる。

また、この耕作地以外の部分(図の薄い灰色で示した部分)では、土器の廃棄土坑が15回以上掘られ、大量の土器、瓦器が廃棄されていた。この部分の拡大図(第37図)を見ると、確認されただけで14基の土坑が切り合っている。

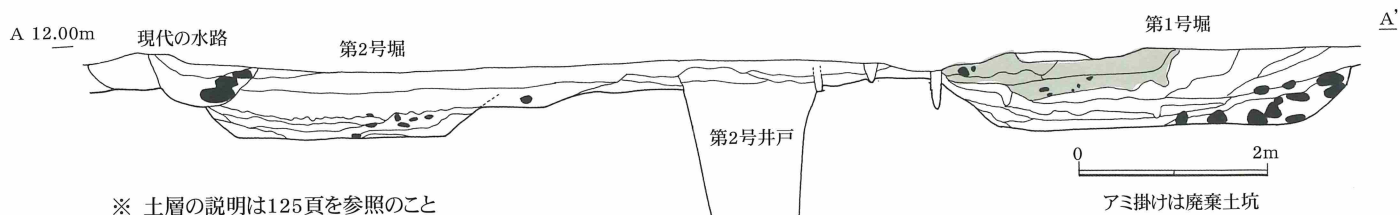
これらは、S-369、S-301、S-323、S-109が古く、S-101、S-134などが新しい。この廃棄土坑については後述する。

(遺物)

S-135は館を囲む内堀で、廃棄土坑以外の部分で出土したものであるが、峻別できずに一部廃棄土坑のものが含まれている可能性もある。出土位置は、多くは東西に伸びる一辺の床面に近い部分であるが、一部は南北に伸びる部分の北側、すなわち畑として利用される以前に埋没した土壌に含まれていたものもある。

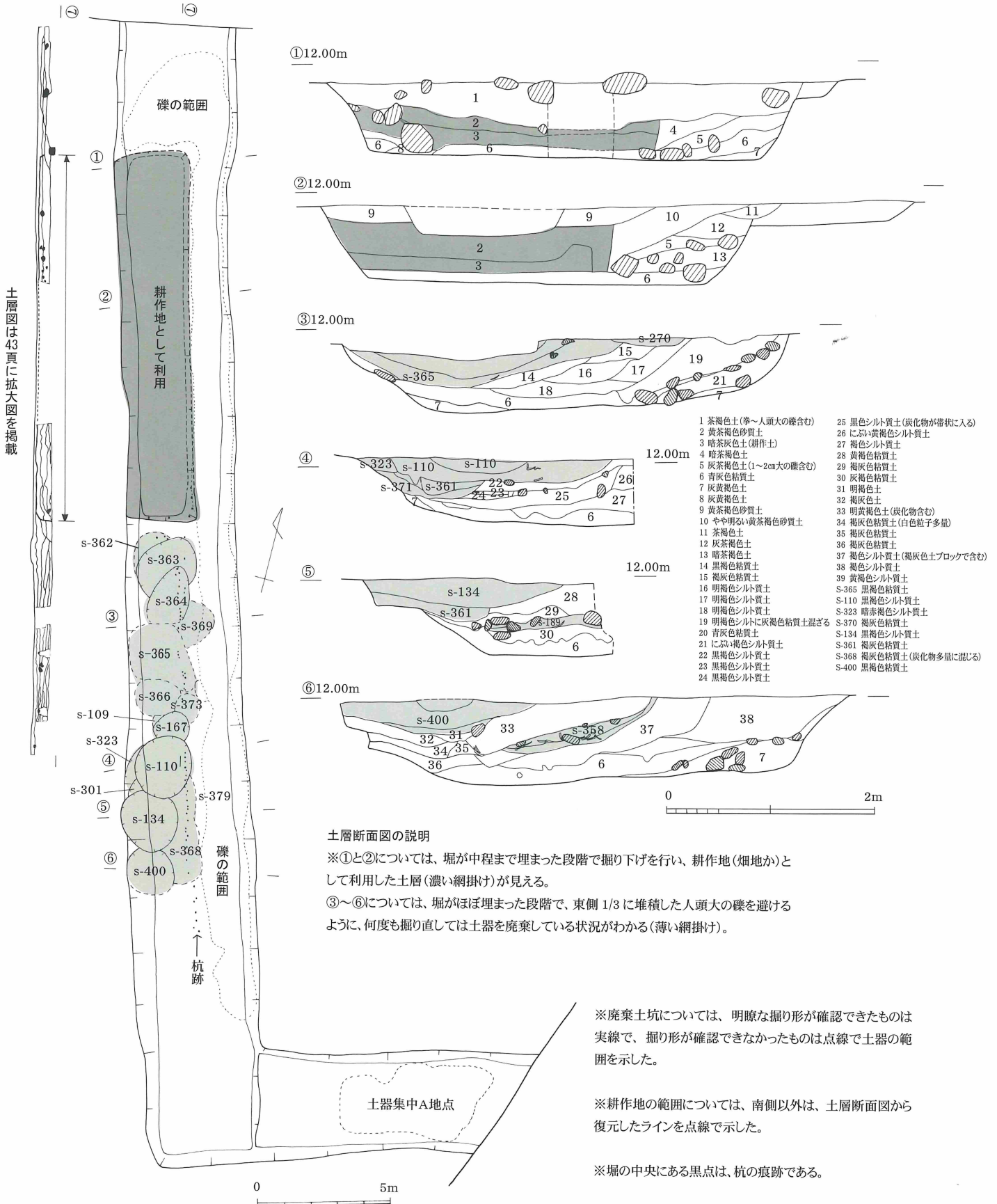
128から387が出土遺物である。128は唯一の磁器で、白磁の皿である。底部外面まで施釉されている。129から272は土師器坏で、217までがB形式(45頁参照)、218以降がA形式である。273から351は土師器小皿で、口径は5.8から7.6cmである。352から378は瓦器碗で、すべて外面下半に指頭圧痕を残し、外面には磨きは見られない。高台は低く、痕跡程度のものもある。352から354には外面に同じ「文字」の墨書が認められる。文字は「二郎」と見られるが、確定はできない。355は、内面に墨を漆で溶いた黒漆が付着しており、漆の容器として用いたことがわかる。外面には墨痕が認められる(漆は放射性年代測定を行っているので164頁参照)。380は土師器の小壺。口縁部は直線的に内傾する。379は備前焼のこね鉢、381と383は瓦質の鉢で片口が付く。382は瓦質の鍋で、口縁部は細く上方につまみ上げられ、その結果外面に段が生じている。外面には煤が付着する(煤は放射性年代

測定を行っている。)386は火鉢?の脚部。柱状に作る。387は土錘。



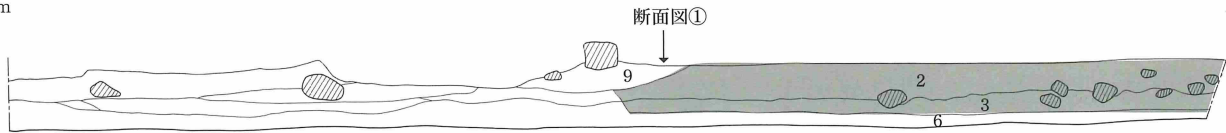
※ 土層の説明は125頁を参照のこと

第34図 A区館部分遺構配置図(古代を除く) (1/250)

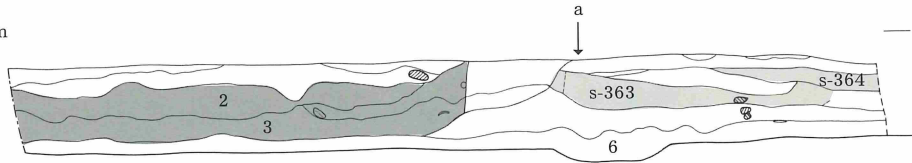


第35図 A区第1号堀実測図 (1/200)

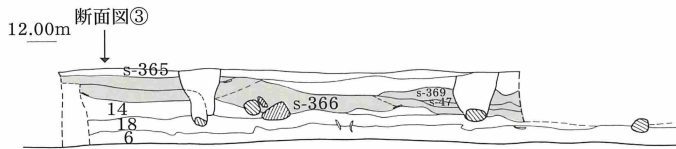
⑦12.00m



12.00m



12.00m

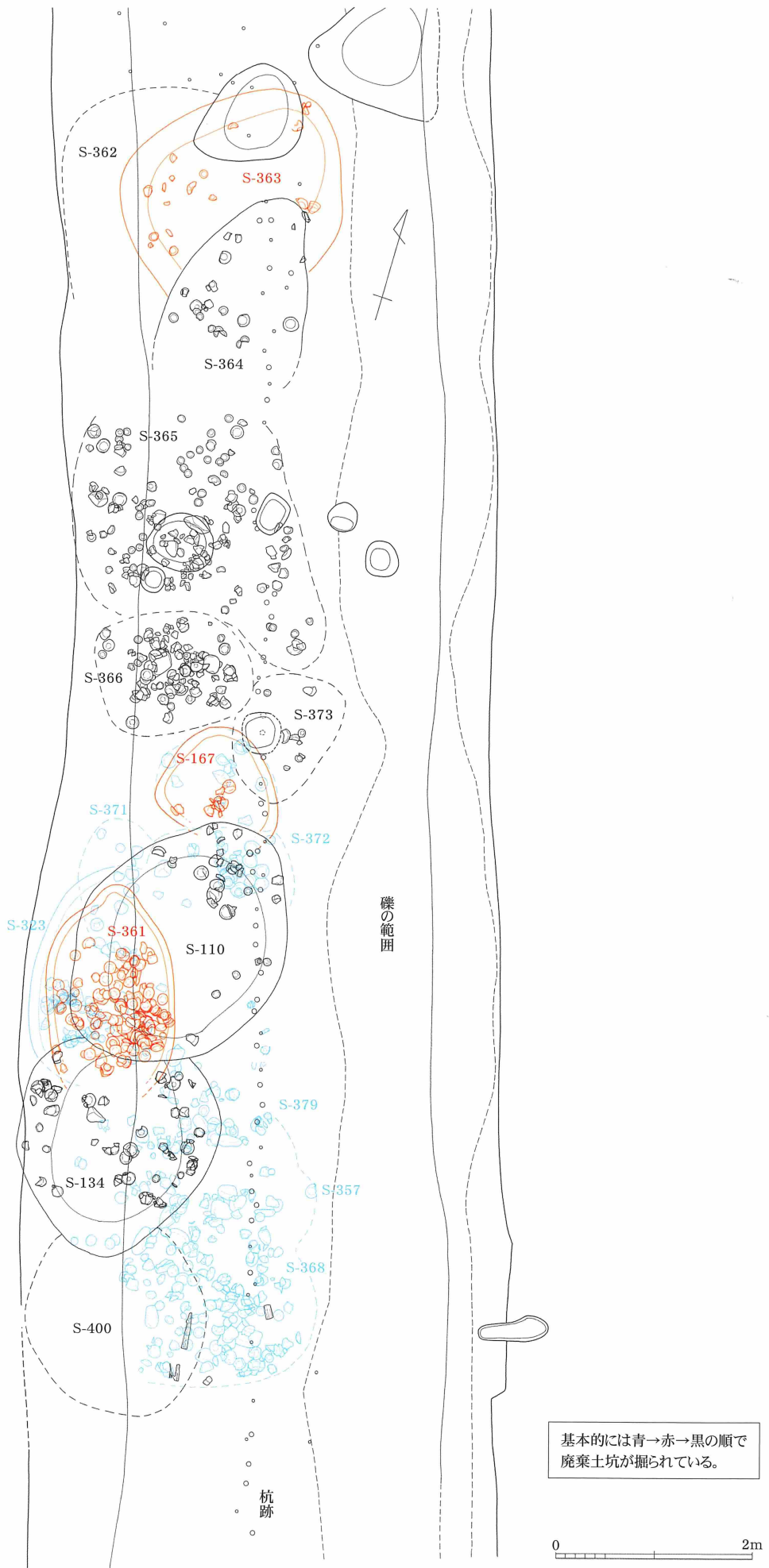


0 2m

第36図 A区第1号堀縦断面土層断面図 (1/50)

※土層断面図の説明

第36図は第35図の堀縦断面図の拡大図である。土層の番号は第35図の土層番号に対応する。上段と中段の濃い網掛け部分が耕作土である。南北とも土層の立ち上りは明瞭である。また、南側の立ち上りの外側には、S-363を切る土層が確認できる(aのポイント)。この立ち上りが、耕作地の掘り込みであるならば、少なくともS-363の廃棄土坑より新しいことになる。しかし、耕作土とした土層から出土した遺物に、廃棄土坑や館内の遺構から出土した遺物より新しい要素を持つものはなく、耕作地として機能していた時期は、館が廃絶する以前であると考えられる。



第37図 A区第1号堀廃棄土坑拡大図 (1/60)

廃棄土坑

第1号堀の埋没後に掘られた廃棄土坑は、1号堀の南北に伸びた部分のほぼ中央の、さらにその西側半分に集中する。ここに集中するのは、北側には畑地として利用された部分があり、堀の東側すなわち館側は、転落した人頭大の礫で埋まっていたためと考えられる。土器の廃棄はこの部分で確認できただけで13回であった。堀形が不明瞭なものも多く、土器のまとまりで一括性を確認できたものもあり、実態はさらに多くの回数廃棄が繰り返されていた可能性が高い。堀形の形状では分類できないが、廃棄された土器の様相から次のような分類が可能である。

1類：小皿が大部分を占め、坏が少ない(365)

2類：小皿と坏が拮抗する(110, 323, 357, 366, 372, 379)

3類：小皿が少なく、坏が大部分を占める(134, 257)

2類が多いことから、本来は坏と小皿が同数で使われていたと推測できる。そうすれば1類や3類の状態は、やや特殊な事態を反映したものであった可能性がある。

また、本来はこの時期広く流通していた青磁碗が廃棄土坑中からは1点しか出土しなかったこと、第1号堀でも廃棄土坑以外の部分からは一定量出土している瓦器碗や鍋、釜などの雑器もほとんど出土しないことは、宴会等で使用した食器類の中でも、清浄性の失われたと認識された「かわらけ」類が選択的に廃棄されたことが窺える。

次に、廃棄土坑の切り合い関係や土層図から、廃棄の先後関係を押さえておこう。平面的な切り合いから、S323→S110・S134, S167→S110, S134→S110, S362→S363→S364がわかり、土層断面では第35図③からS365→、第35図③からS364・S365→S270、第35図④からS361→S110, S323→S110, S371→S361、第35図⑤からS361→S134, S189→S361(いずれも古→新)がわかる。

(遺物)

いずれの廃棄土坑も基本的には坏、小皿の土器類と僅かな瓦器碗が主で、僅かにS366から白磁片が、S167から青磁片が出土しているだけで、雑器類は含まない。このことについては前記した。ここでは、遺物の個別の説明は省き、土師器坏に焦点を当てて型式差・形式差について触れておきたい。

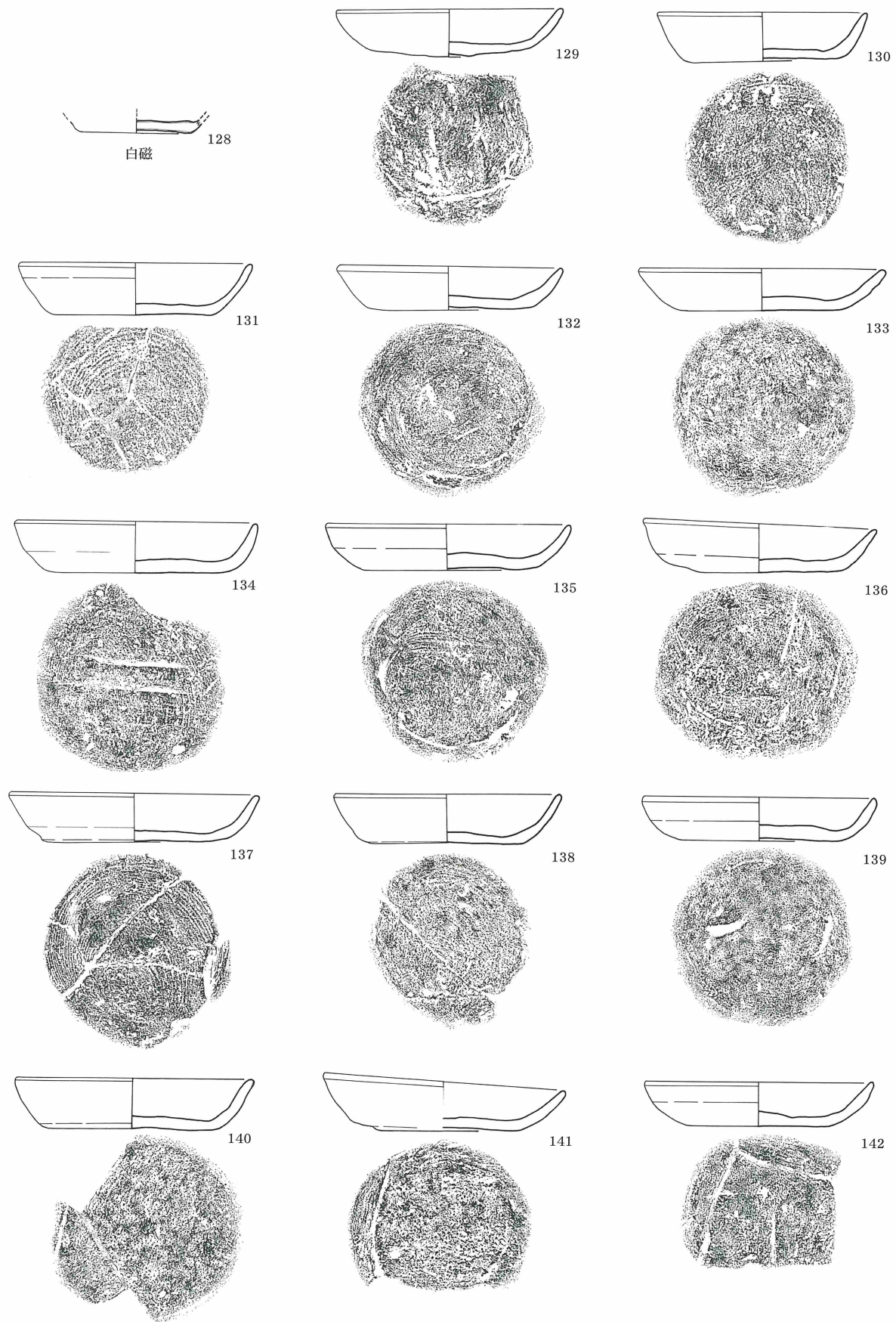
坏には2形式ある。底径が小さく深いタイプ(以下「坏A形式」)と口径が大きく浅いタイプ(以下「坏B形式」)である。個々の廃棄土坑における坏A形式とB形式の割合を示したのが第9表である。坏A形式がほぼ4割以上占める土坑は、前記した切り合い関係で見ると、S361を除いていずれも切り合いでは古く位置づけられるものである。逆に坏A形式が2割以下の場合、切り合い関係では新しく位置づけられるものがほとんどである。このことは、坏A形式と坏B形式の使用された時期の差を示していると考えられる。すなわち、廃棄土坑が作られた

時期は、坏A形式が主体であった時期から、徐々に坏B形式が主体となっていく、その過渡期にあたりと考えられるのである。坏B形式は、豊前南部の宇佐郡を中心とした地域に流通した形式であり、坏A形式は豊前でも宇佐から離れた地域に流通した形式である。このことを考えると、伊藤田田中遺跡の館の居住者に主体があったのか、あるいは流通機構の変化に主体があったのかわからないが^{*1}、いずれにしてもこの地にもたらされた土器の産地に変化が生じたとすることができよう。

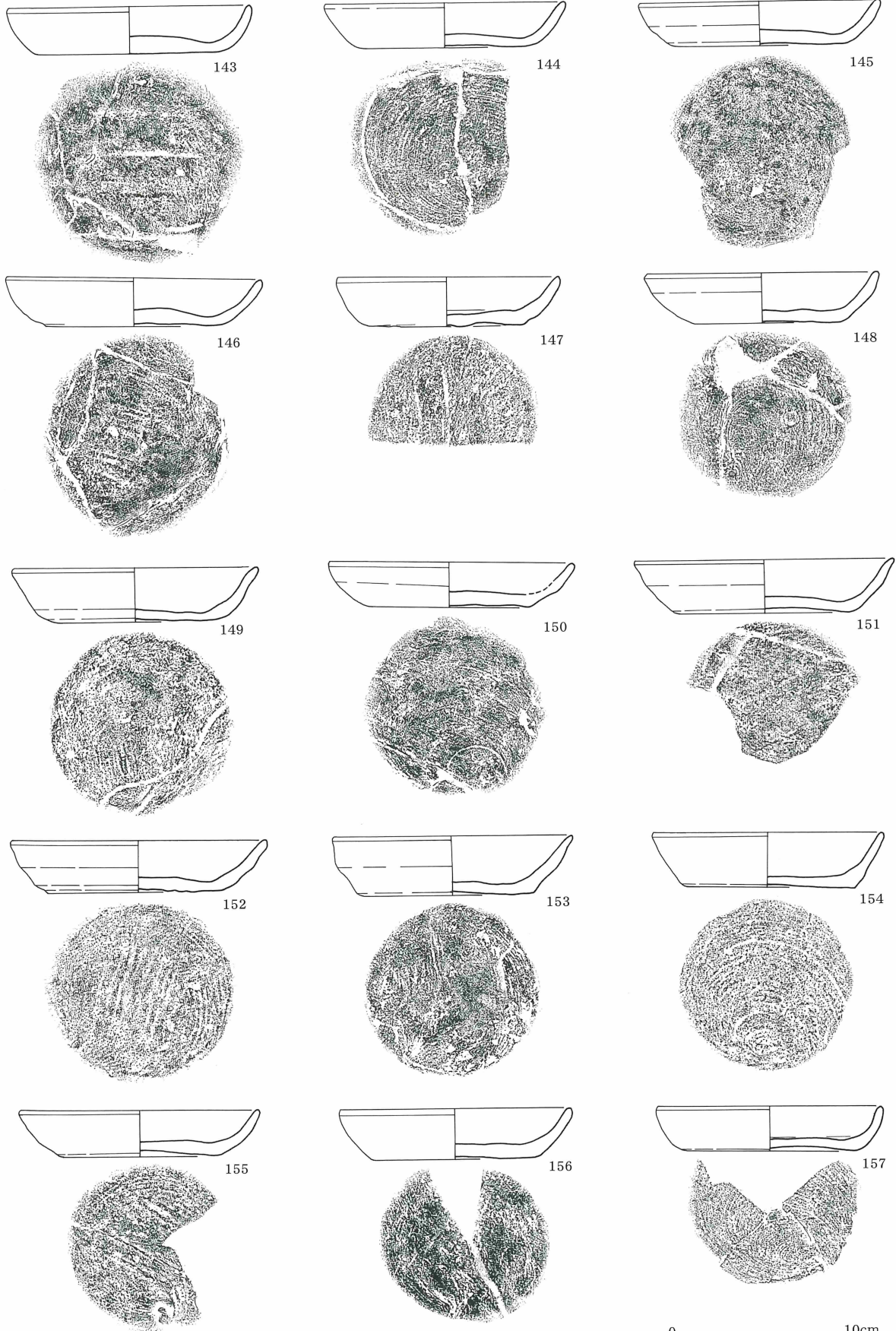
第7表 坏A形式と坏B形式の割合

遺構 (S番号)	割合		個数		合計	備考
	坏A	坏B	坏A	坏B		
356	100.0%	0.0%	2	0	2	
367	66.7%	33.3%	2	1	3	耕作土
366	64.0%	36.0%	16	9	25	白磁含む
323	50.0%	50.0%	4	4	8	
361	39.4%	60.6%	28	43	71	
363	33.3%	66.7%	1	2	3	
368	25.0%	75.0%	13	39	52	
391	25.0%	75.0%	1	3	4	
357	23.5%	76.5%	4	13	17	
364	20.0%	80.0%	1	4	5	
372	20.0%	80.0%	3	12	15	
110	16.7%	83.3%	1	5	6	
373	16.7%	83.3%	1	5	6	
379	15.4%	84.6%	2	11	13	
365	14.3%	85.7%	1	6	7	
134	12.8%	87.2%	5	34	39	
257	0.0%	100.0%	0	23	23	第2号堀
362	0.0%	100.0%	0	2	2	
371	0.0%	100.0%	0	4	4	
SK1	0.0%	100.0%	0	7	7	第1号土坑
SK2	0.0%	100.0%	0	3	3	
SD4	0.0%	100.0%	0	2	2	

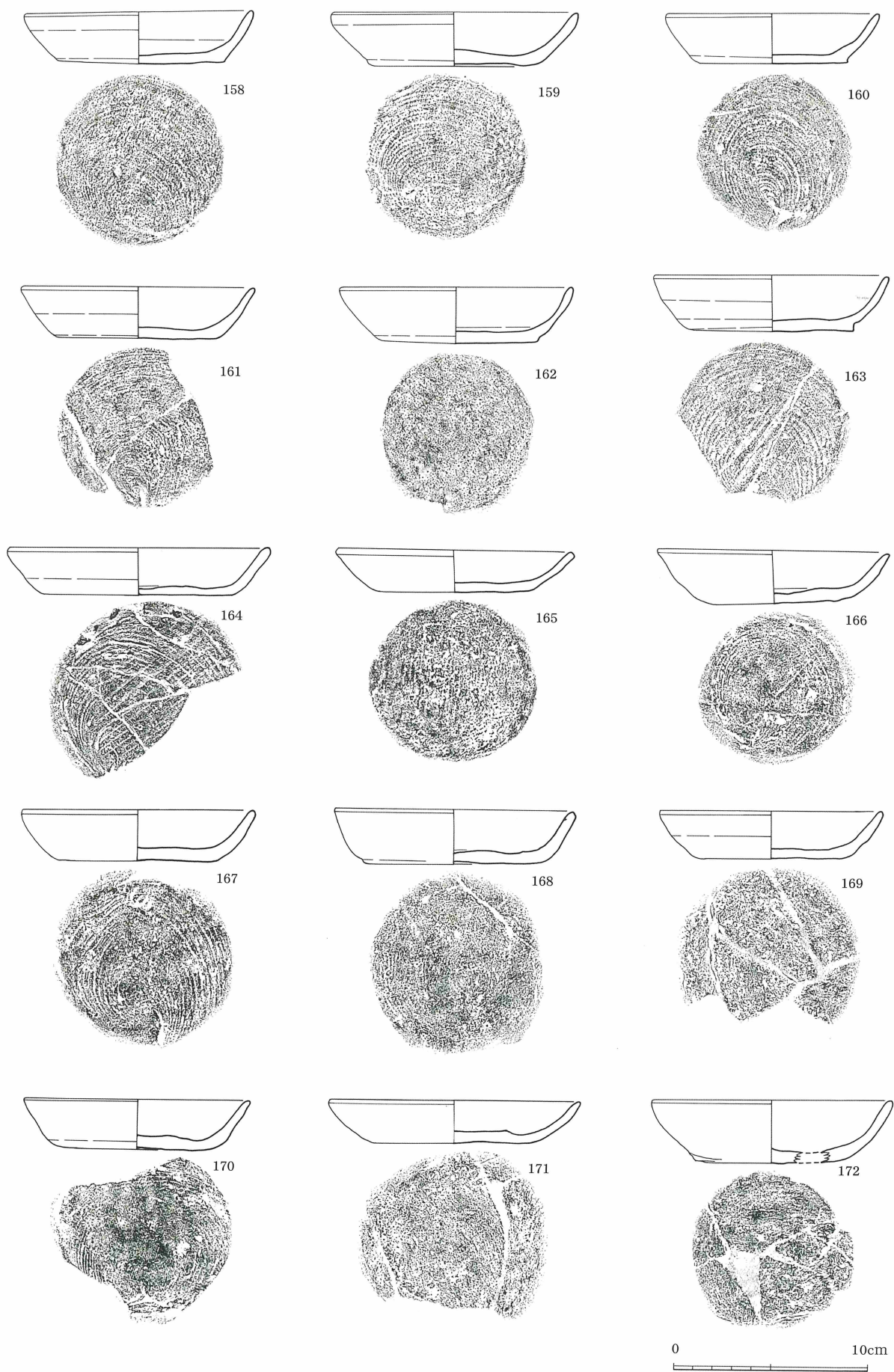
*1 中津平野から山国川を遡った中津市耶馬溪町にある古庄屋遺跡でも同様の傾向があることからすれば、流通機構あるいは産地の盛衰が関係しているのかもしれない。『古庄屋遺跡』2002 大分県教育庁埋蔵文化財センター)



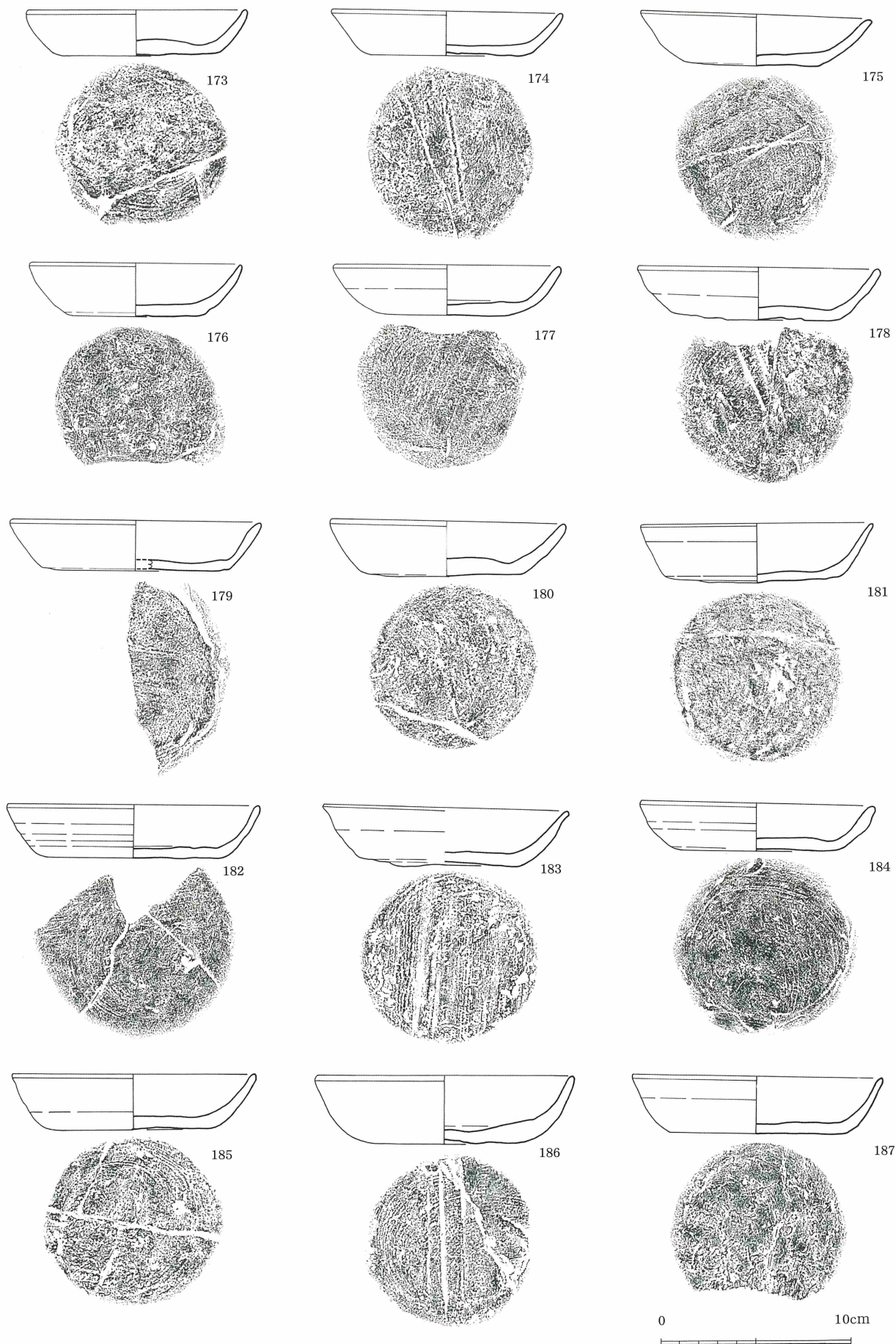
第38図 A区第1号掘出土遺物 (1) (1/3)



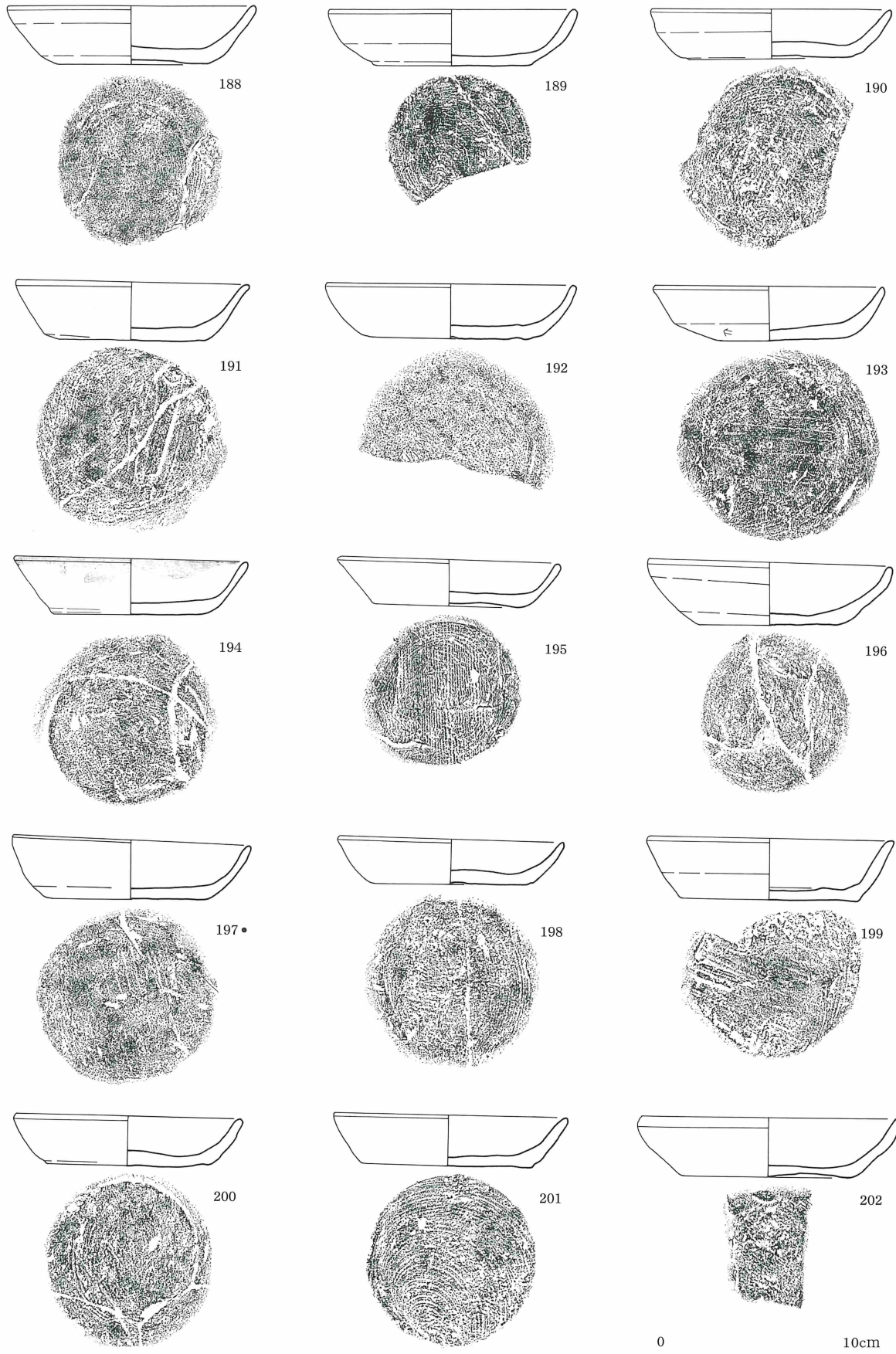
第39図 A区第1号掘出土遺物 (2) (1/3)



第40図 A区第1号掘出土遺物 (3) (1/3)

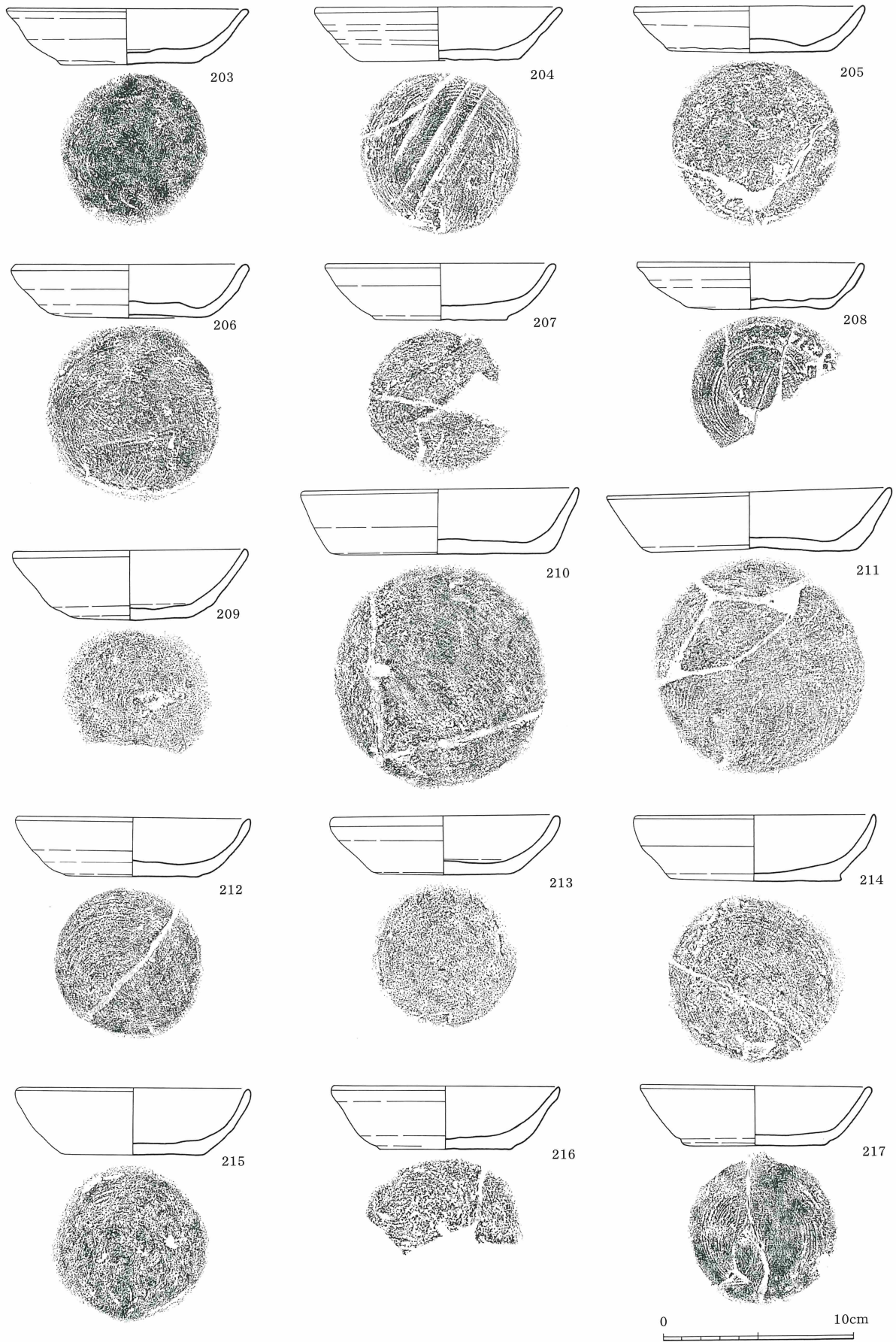


第41図 A区第1号堀出土遺物(4) (1/3)

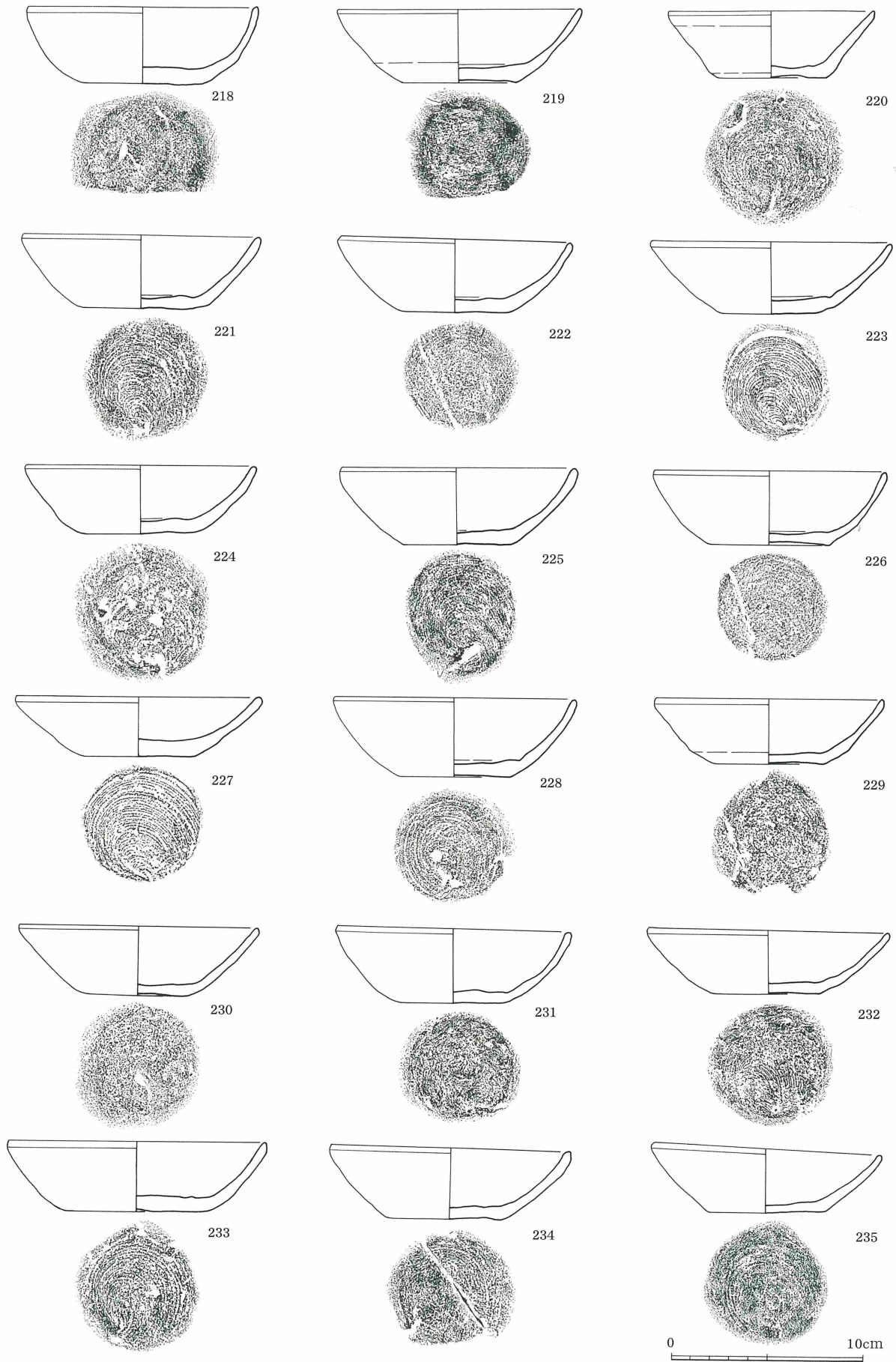


※番号の後に•のあるものは、
付着炭化物の年代測定を行った
資料である。(以下同じ)

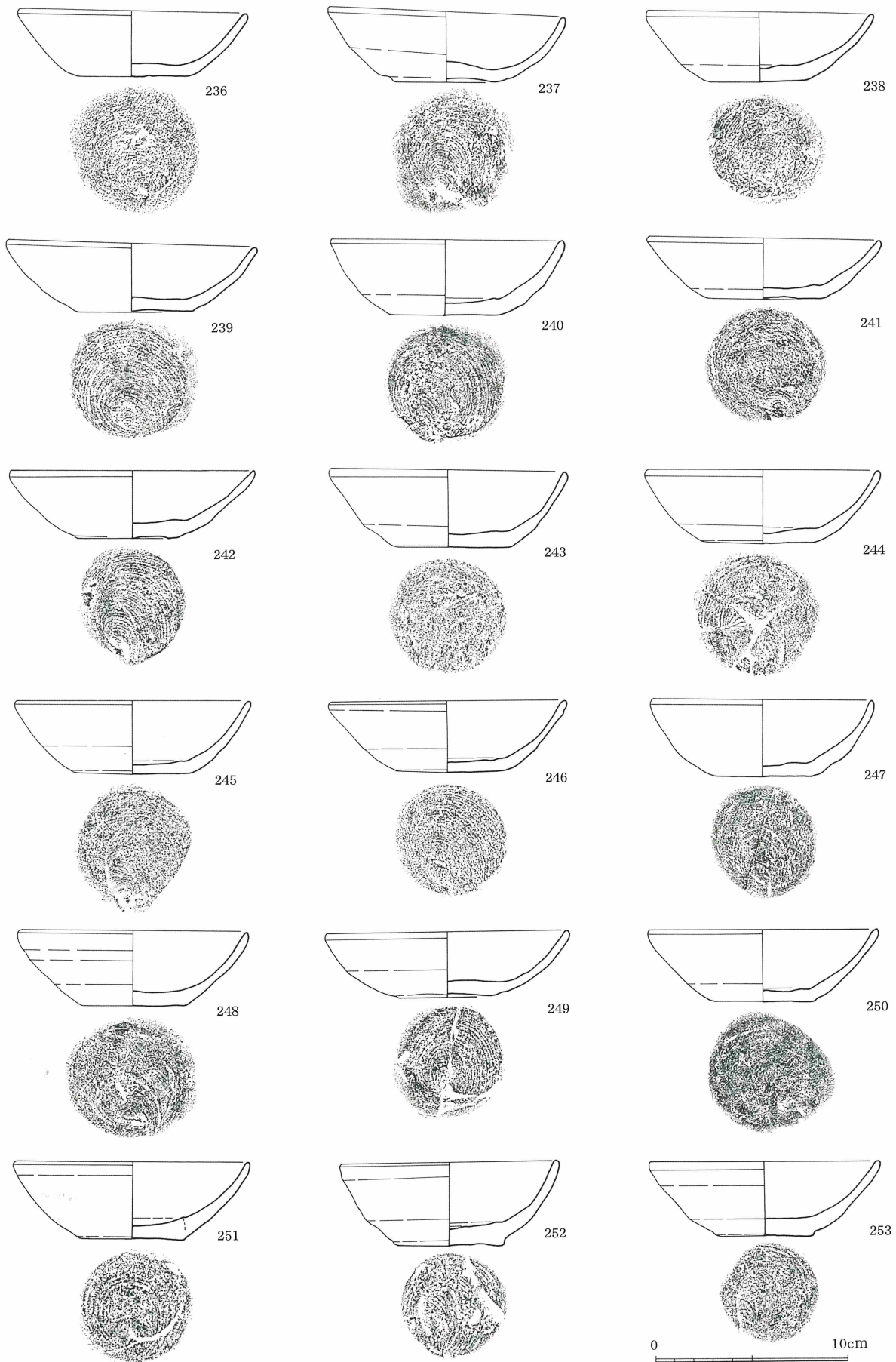
第42図 A区第1号掘出土遺物 (5) (1/3)



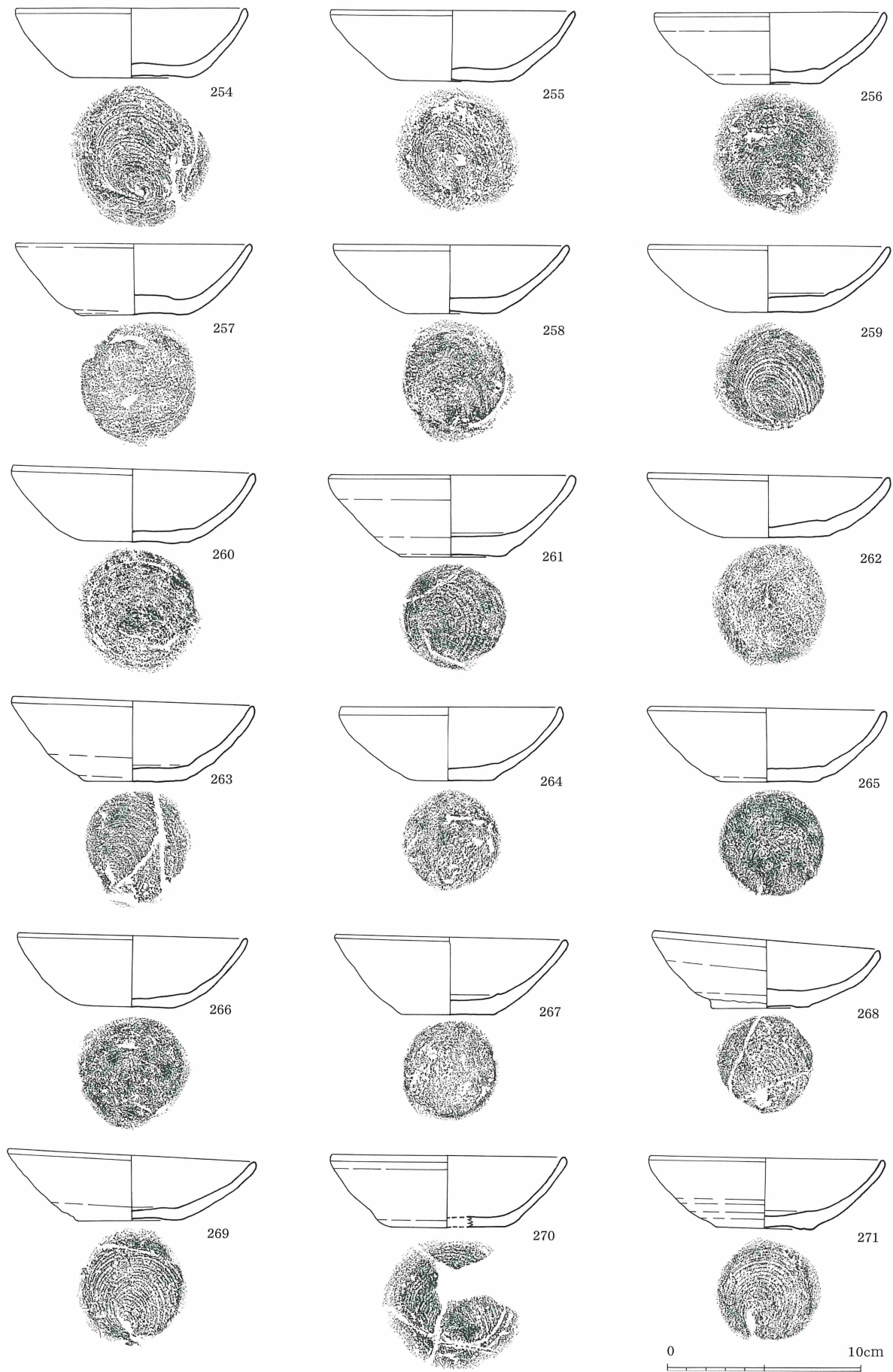
第43図 A区第1号掘出土遺物(6) (1/3)



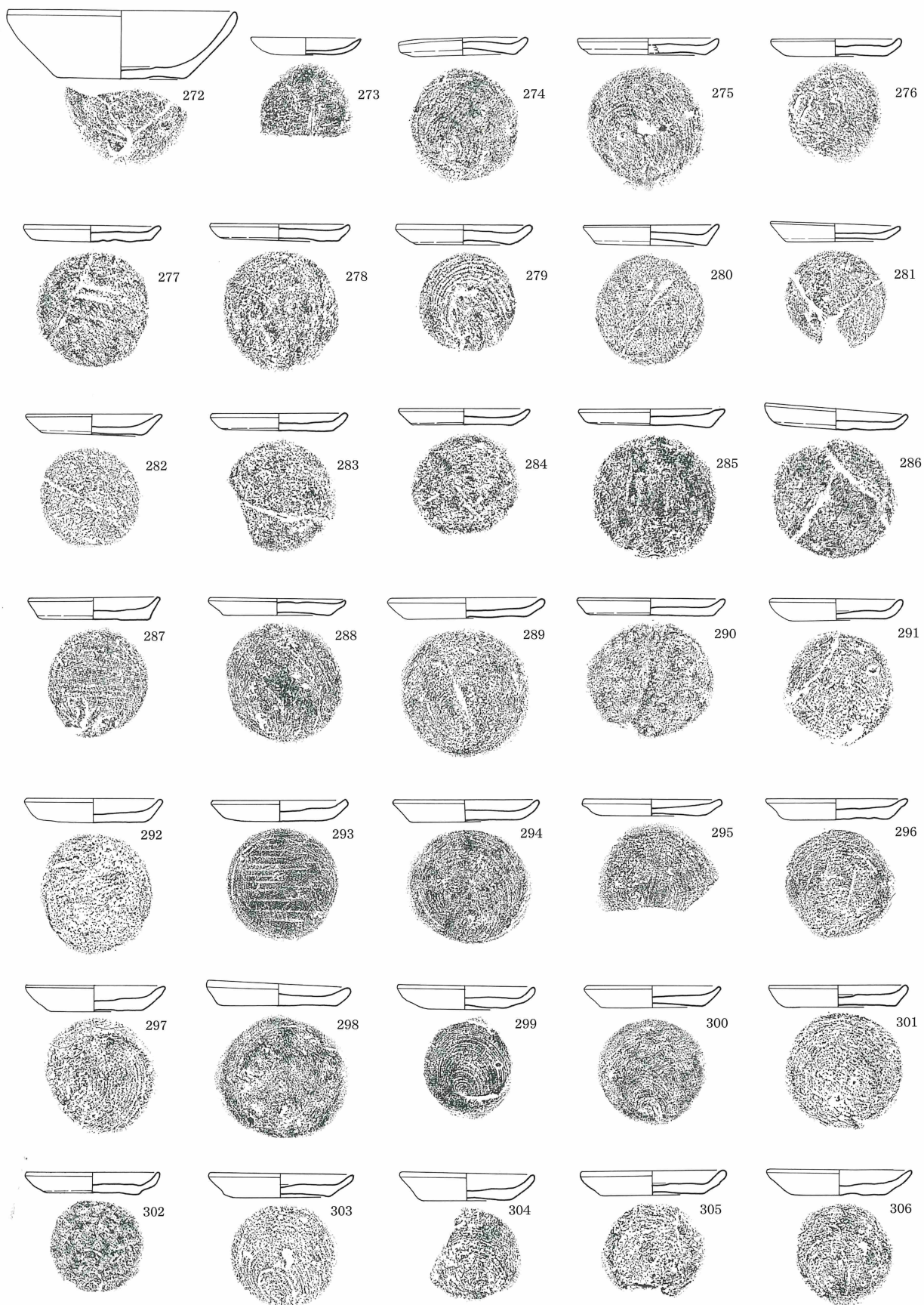
第44図 A区第1号堀出土遺物 (7) (1/3)



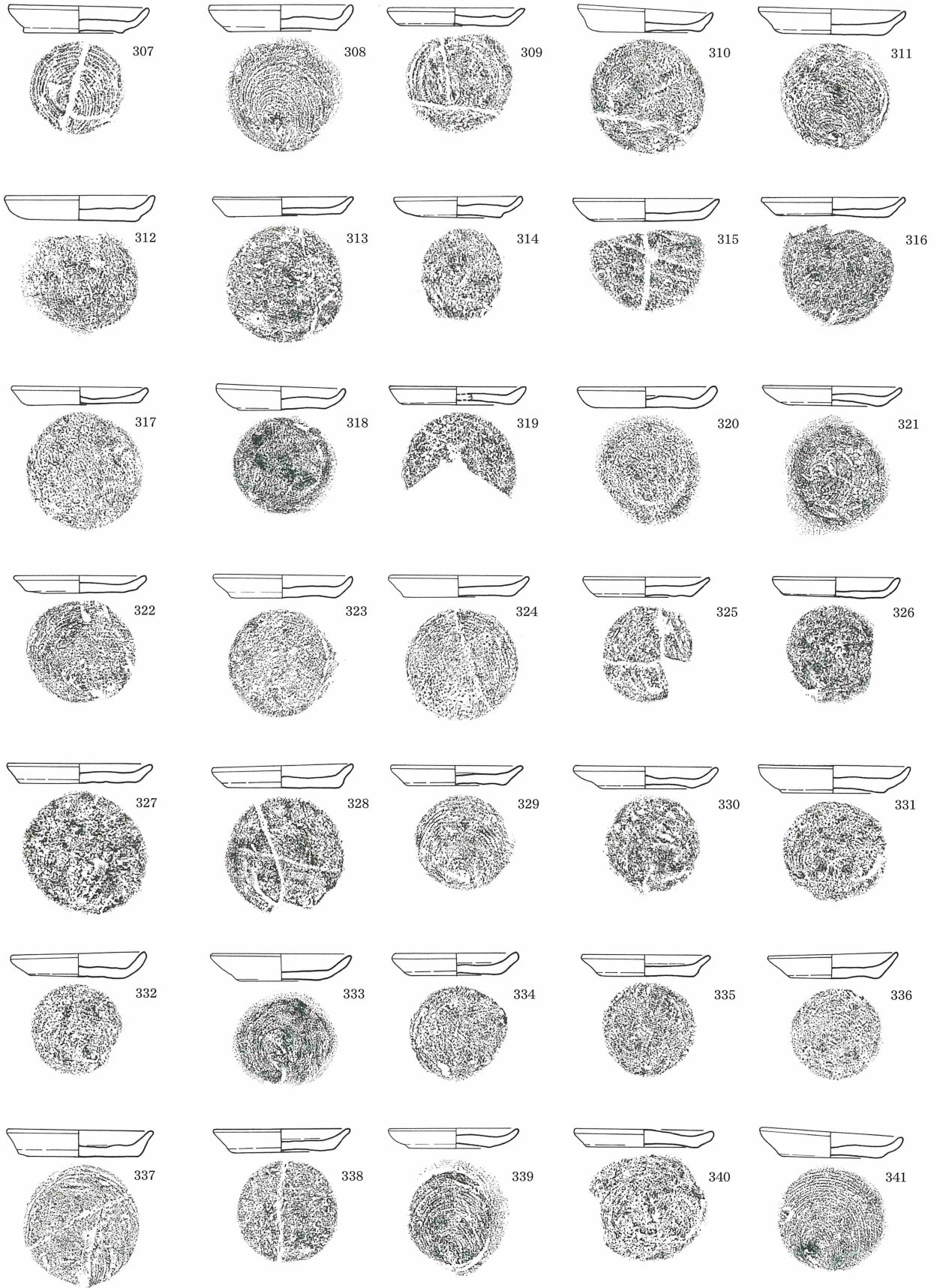
第45图 A区第1号掘出土遺物 (8) (1/3)



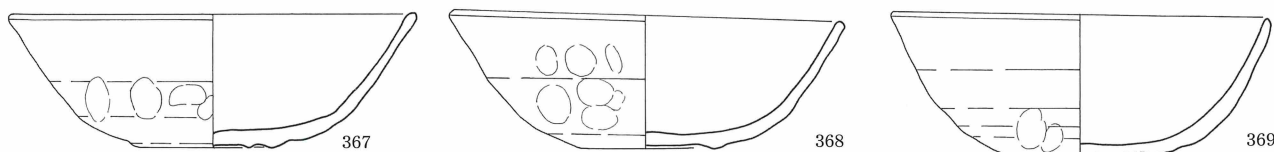
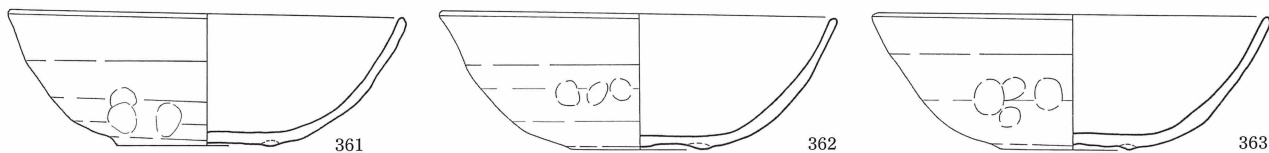
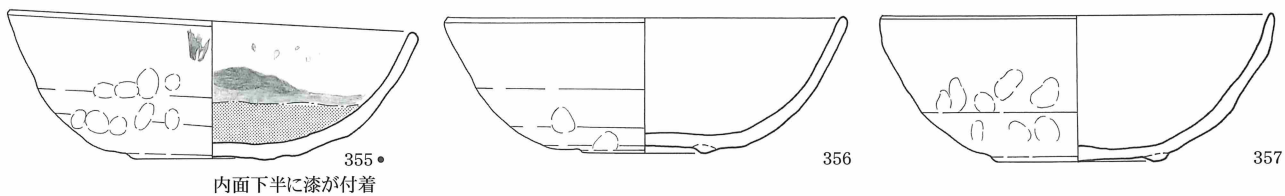
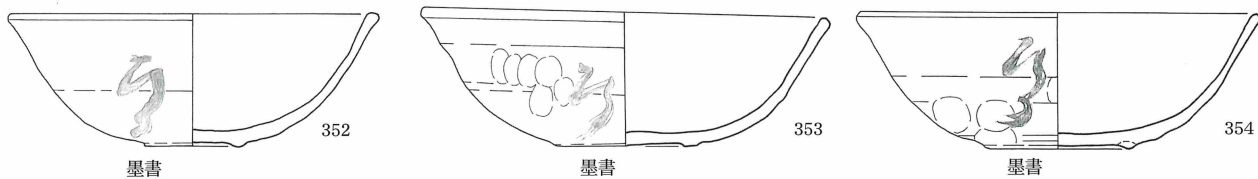
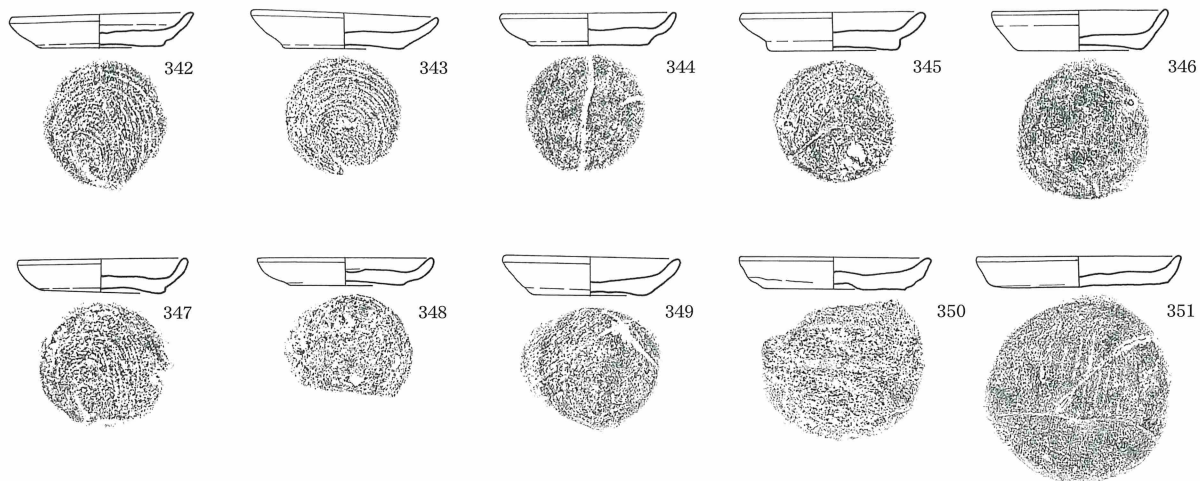
第46図 A区第1号掘出土遺物 (9) (1/3)



第47図 A区第1号掘出土遺物 (10) (1/3)

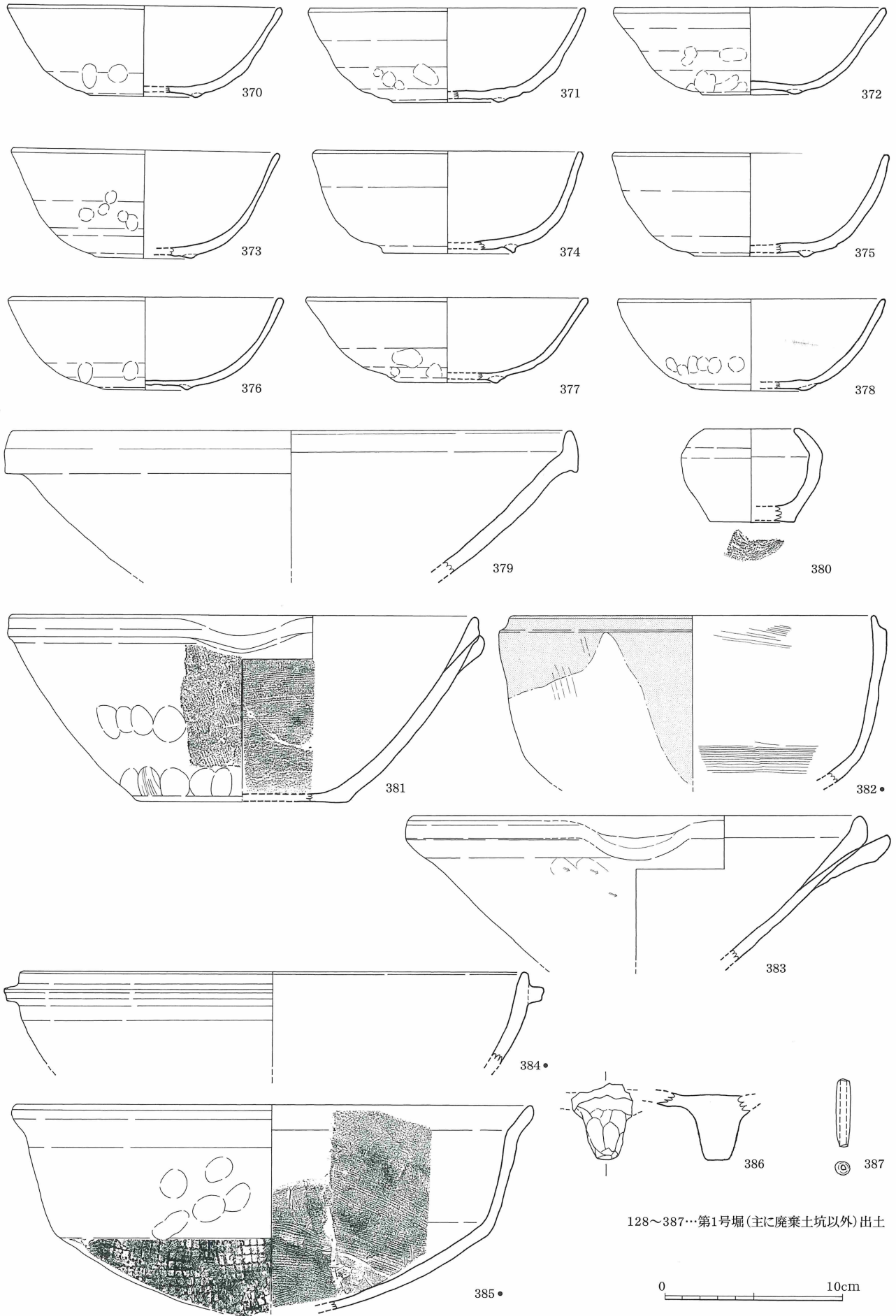


第48図 A区第1号堀出土遺物 (11) (1/3)

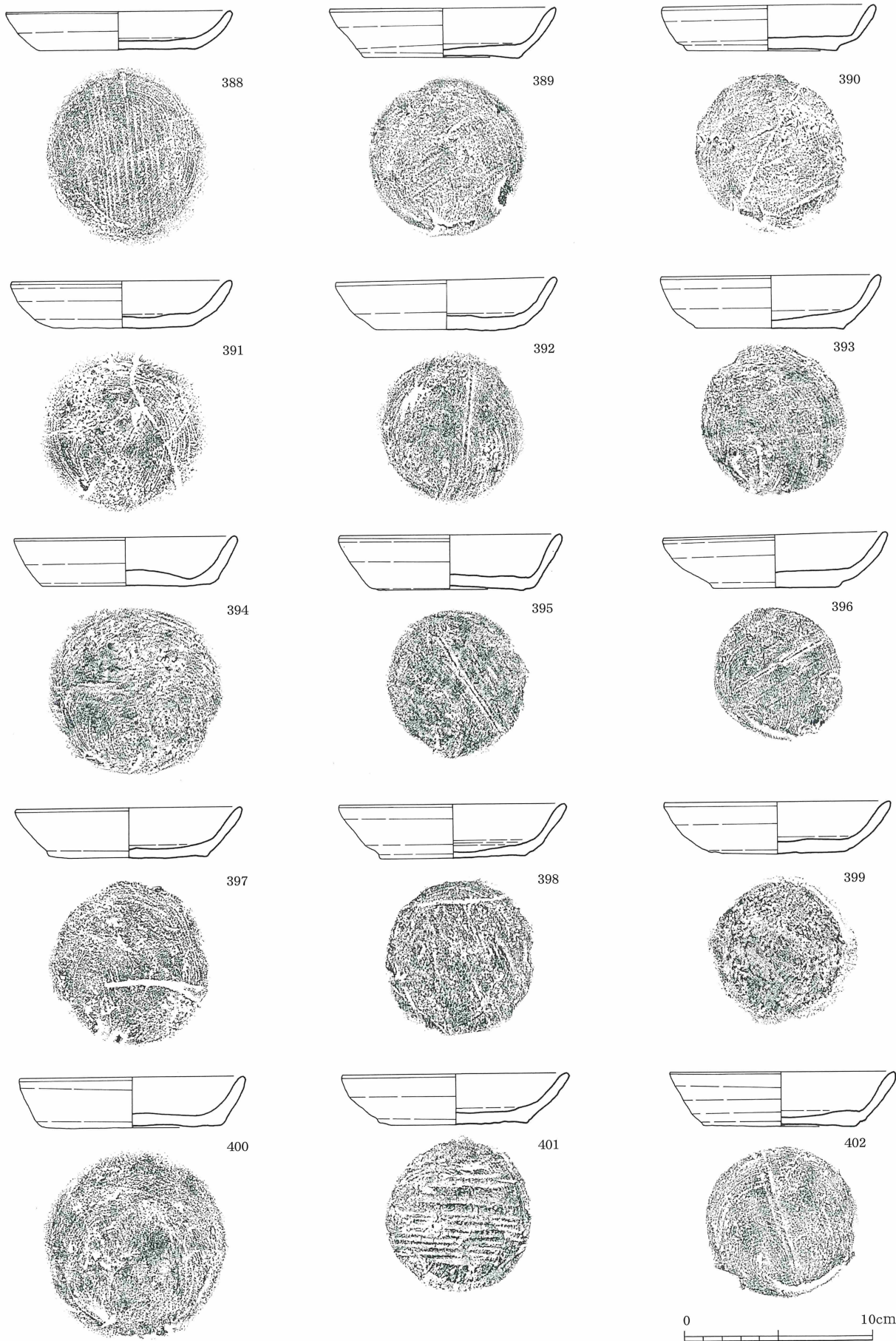


第49図 A区第1号堀出土遺物 (12) (1/3)

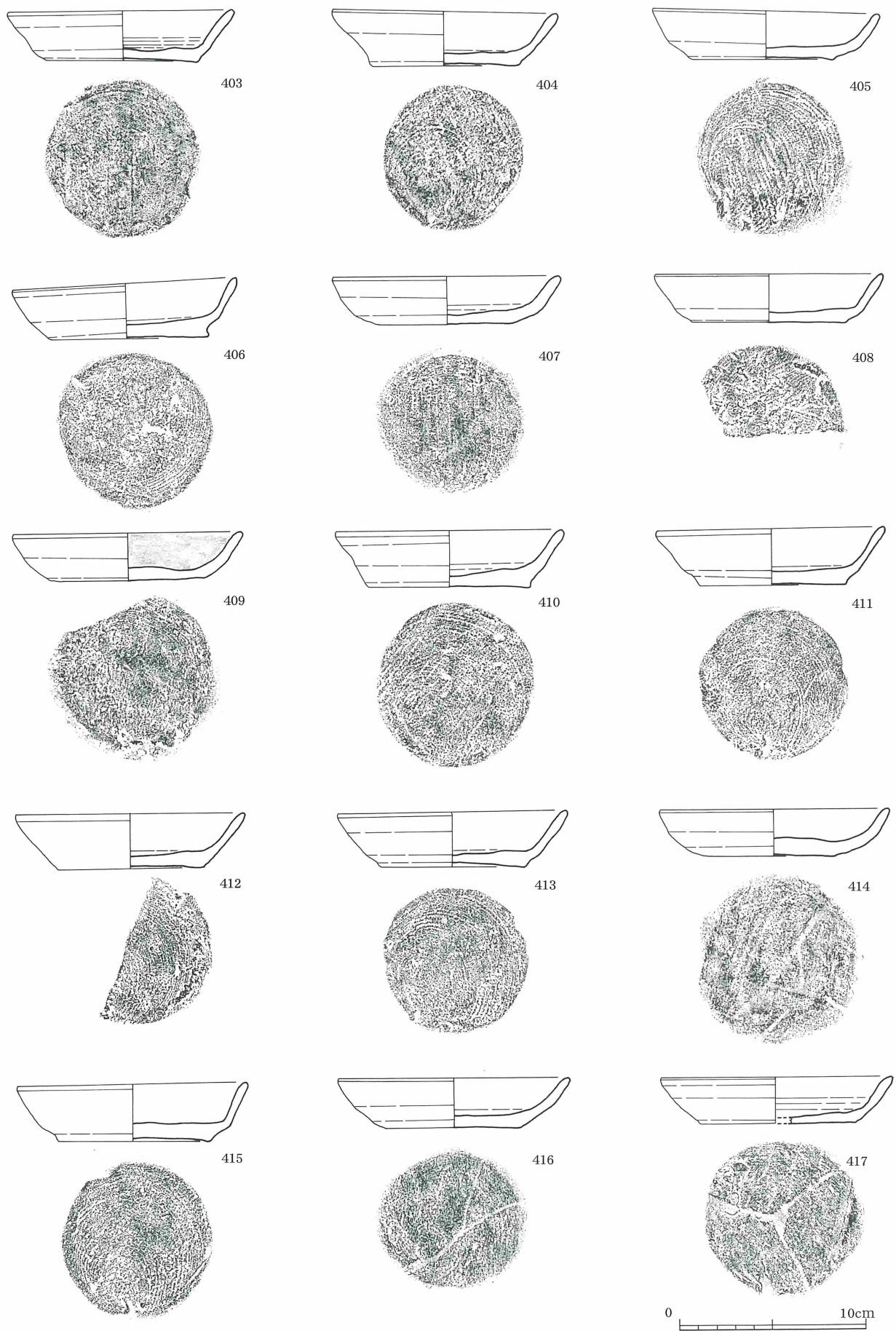




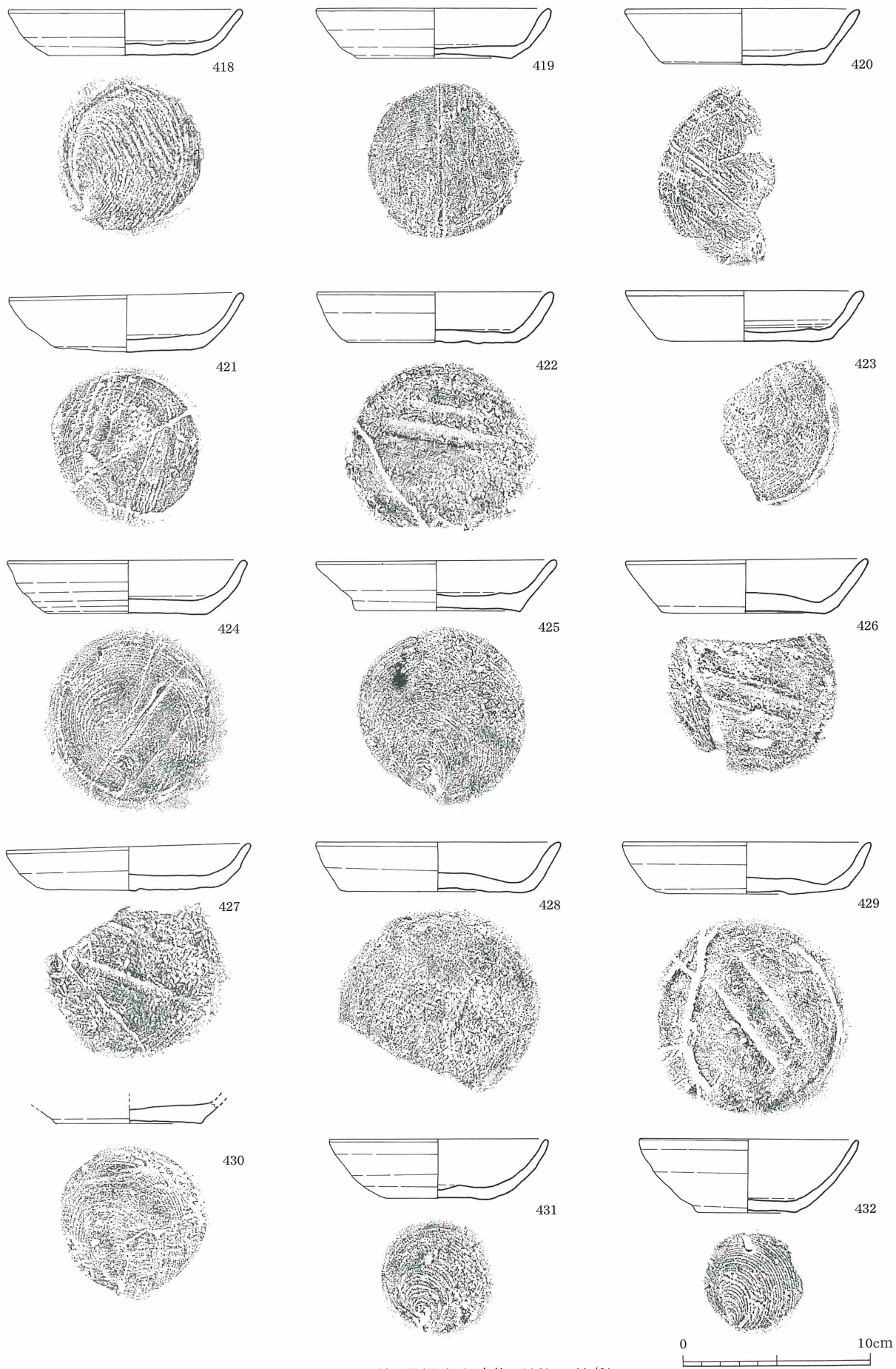
第50図 A区第1号堀出土遺物 (13) (1/3)



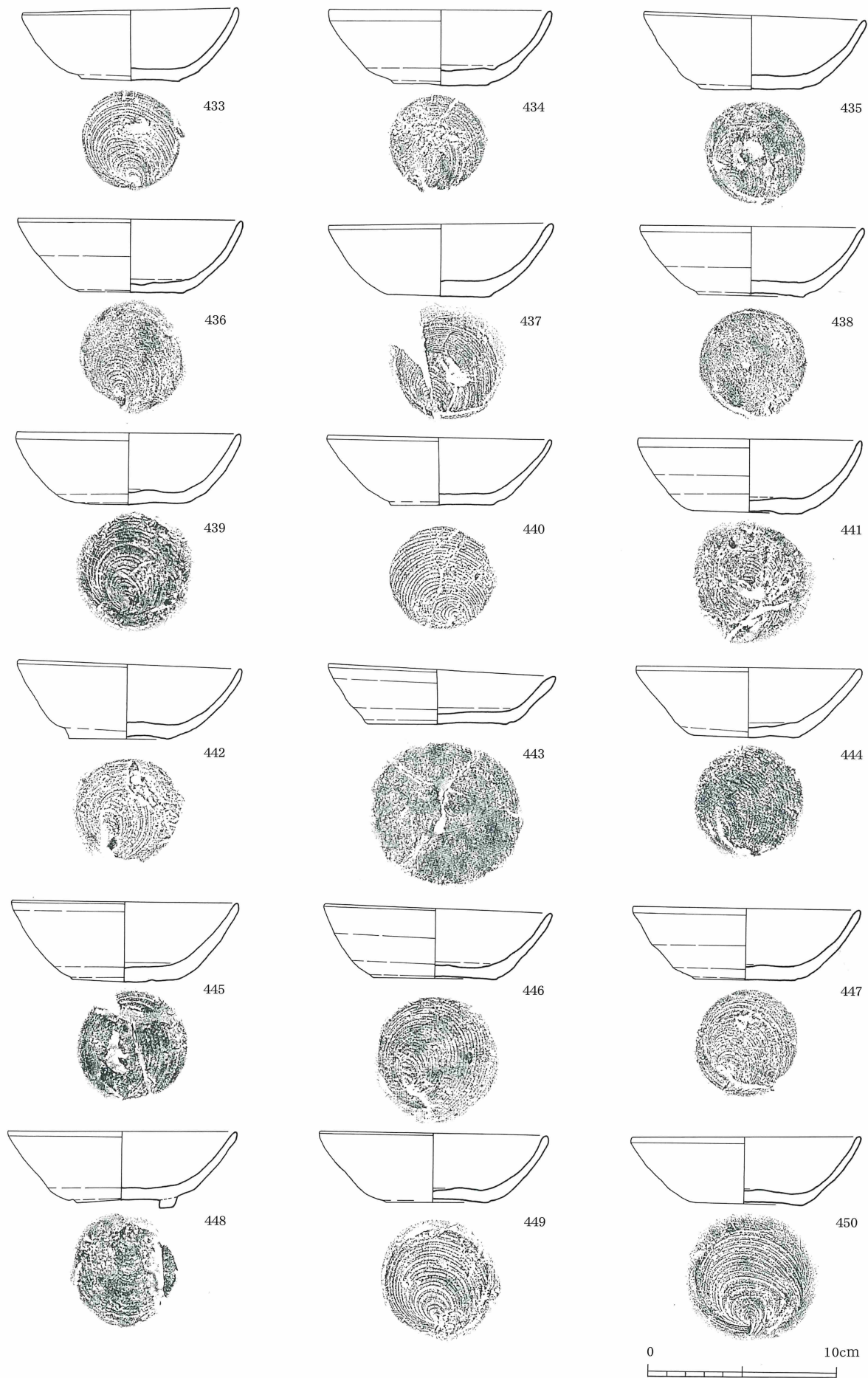
第51図 A区第1号堀出土遺物 (14) (1/3)



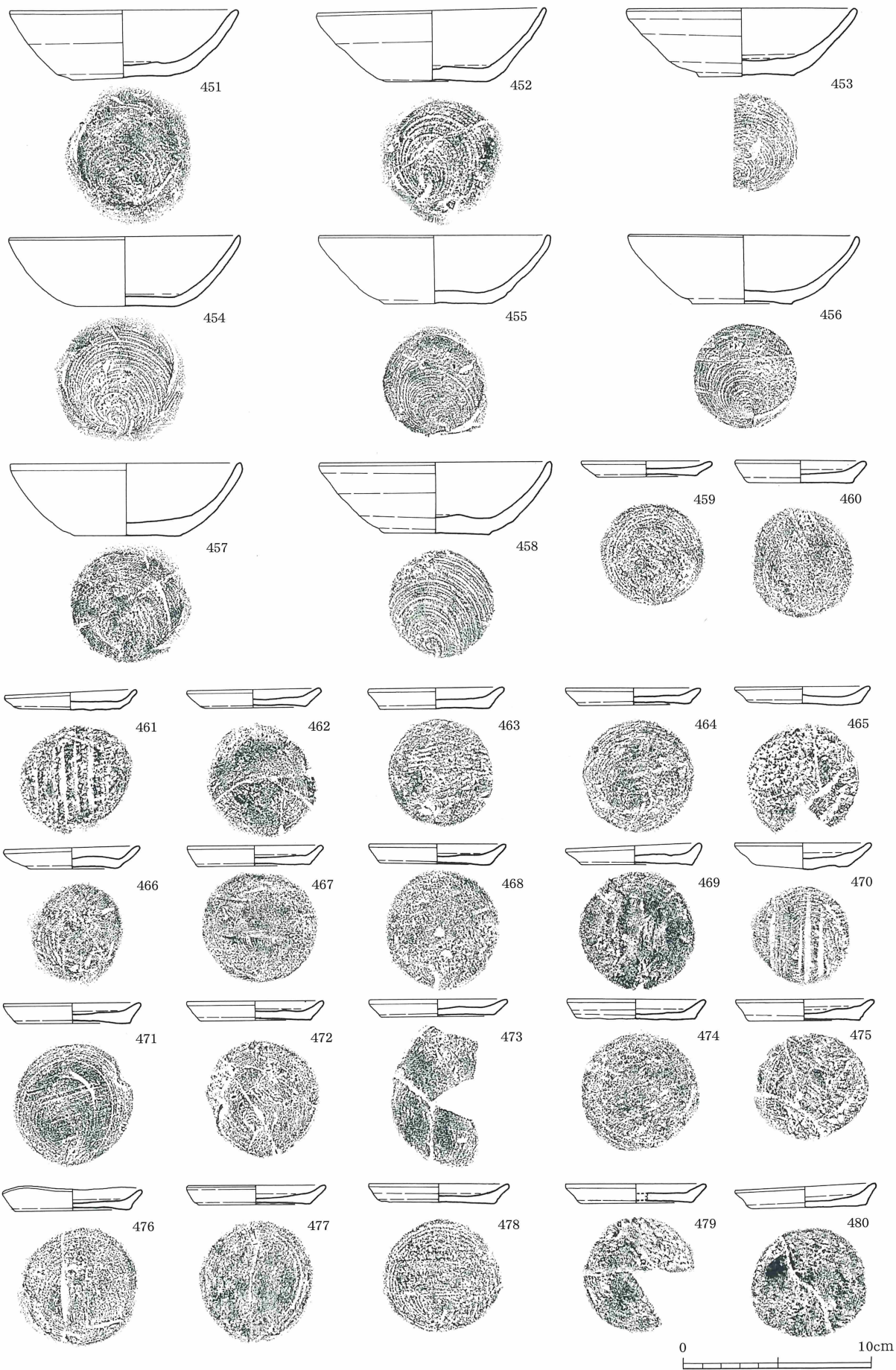
第52図 A区第1号掘出土遺物 (15) (1/3)



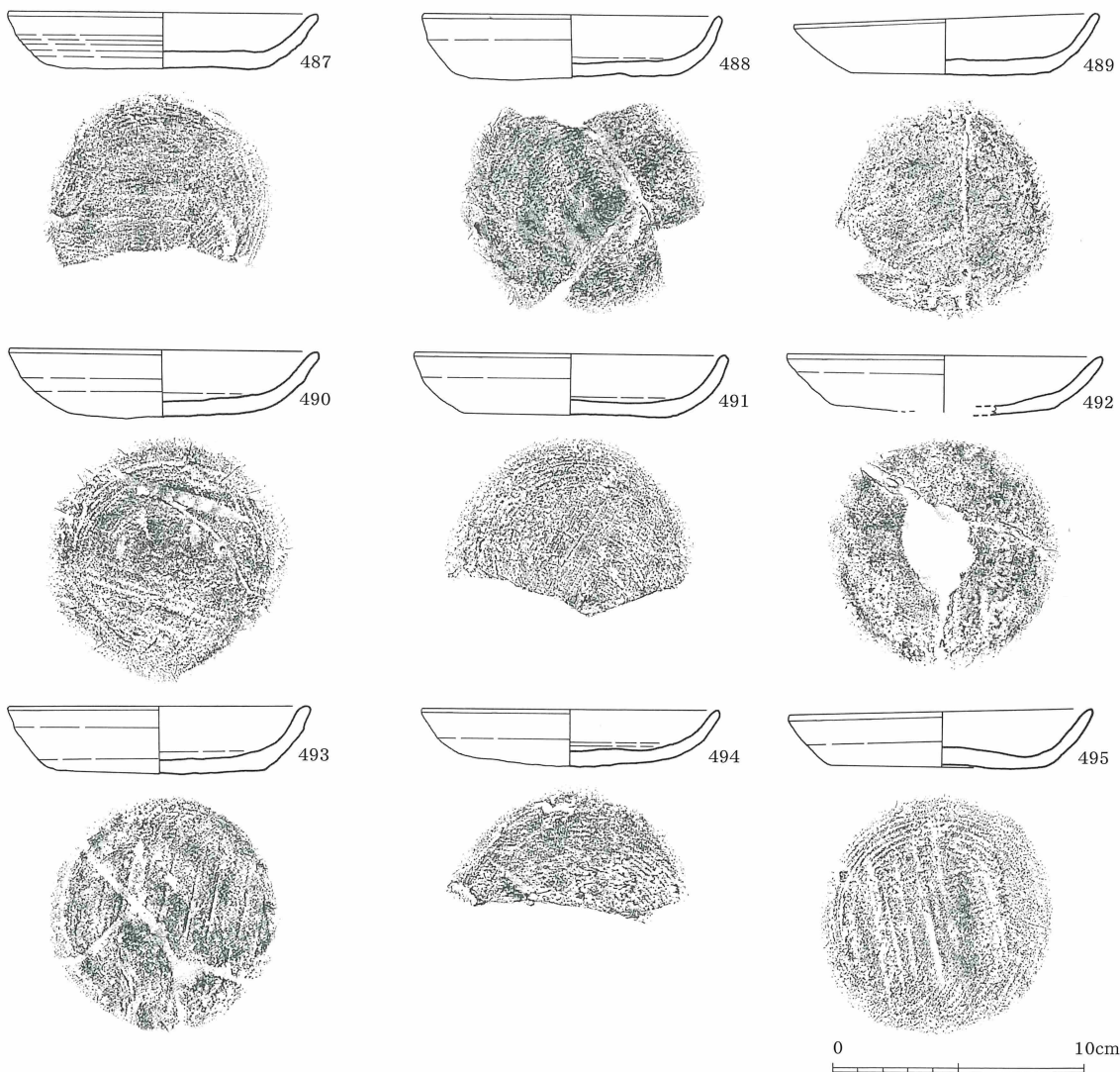
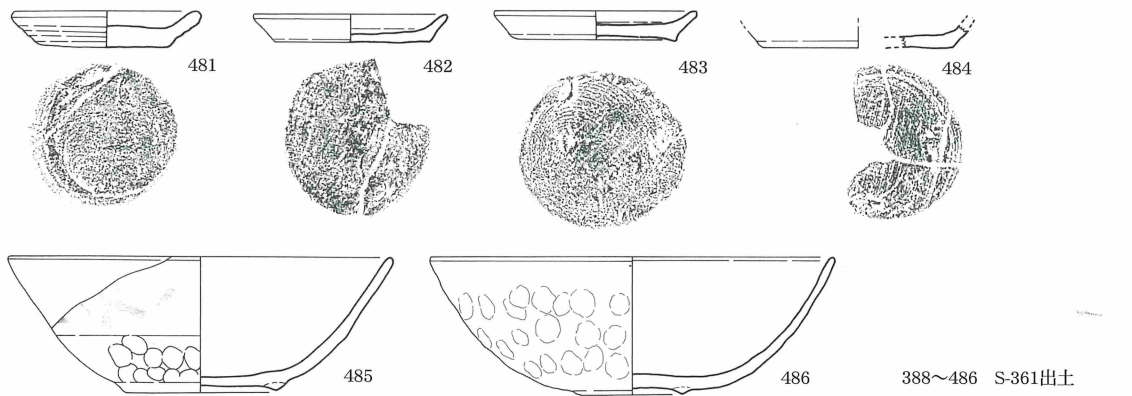
第53図 A区第1号堀出土遺物 (16) (1/3)



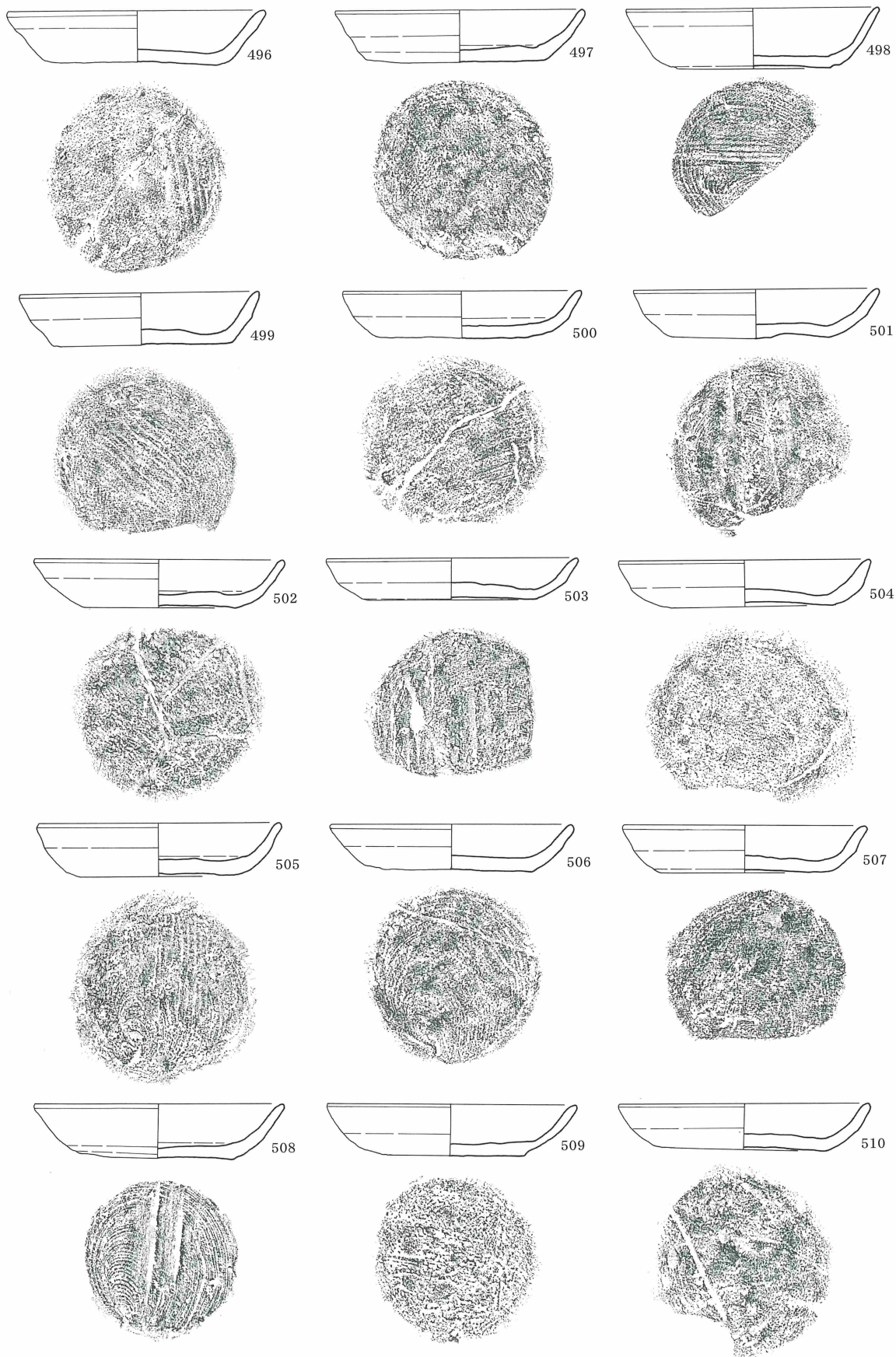
第54図 A区第1号堀出土遺物 (17) (1/3)



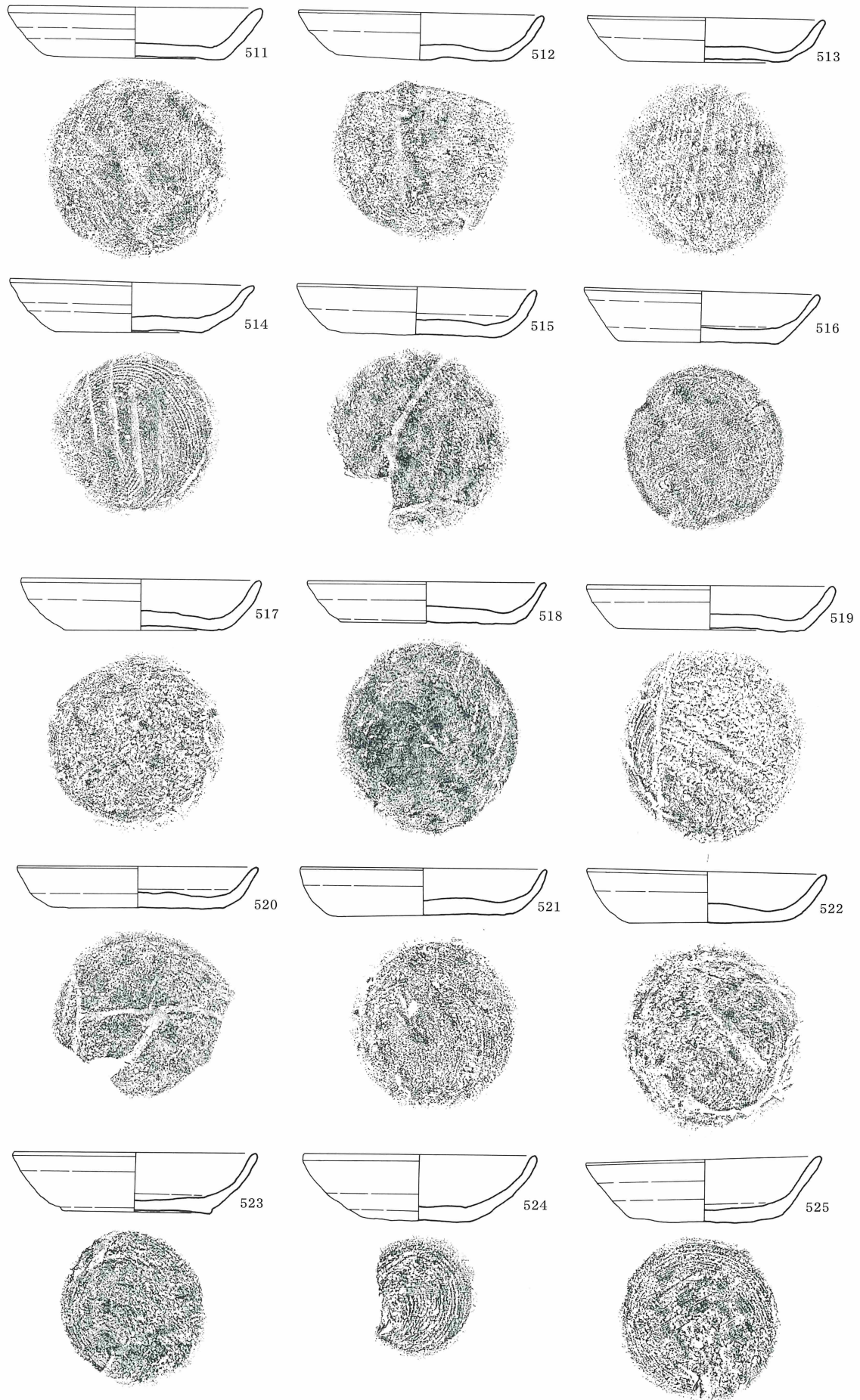
第55図 A区第1号堀出土遺物 (18) (1/3)



第56図 A区第1号掘出土遺物 (19) (1/3)

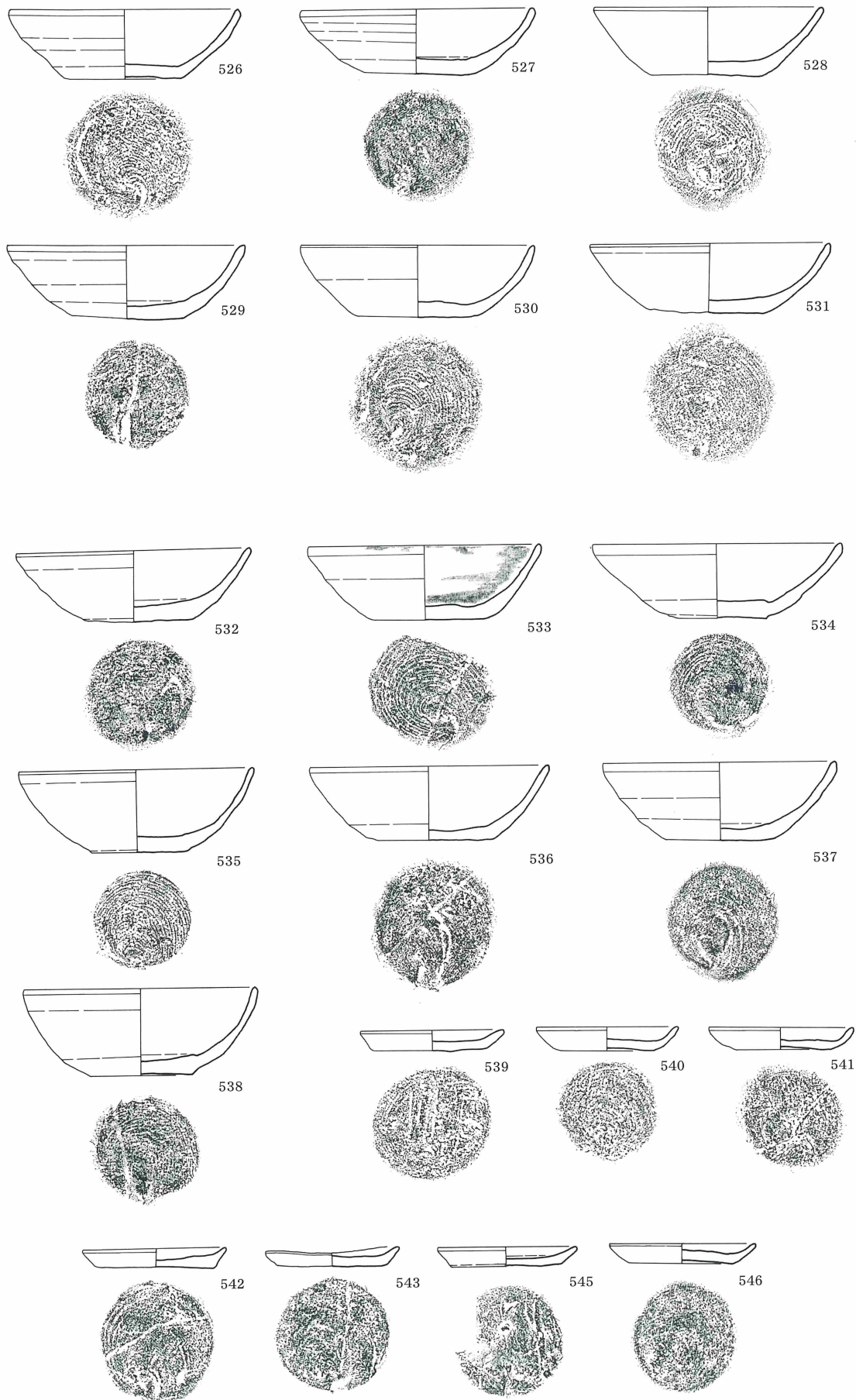


第57図 A区第1号堀出土遺物 (20) (1/3) 0 10cm

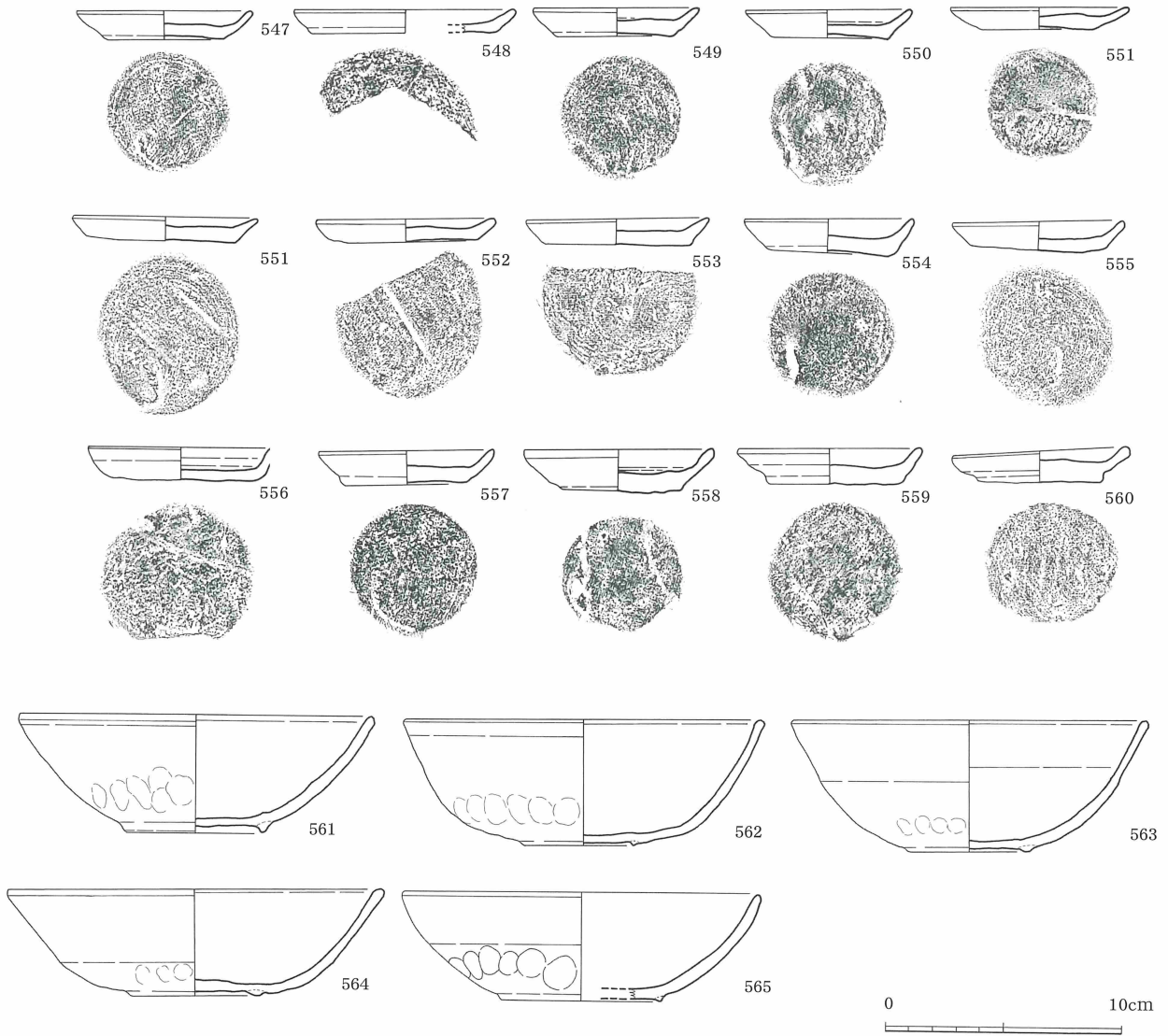


第58図 A区第1号掘出土遺物 (21) (1/3)

0 10cm

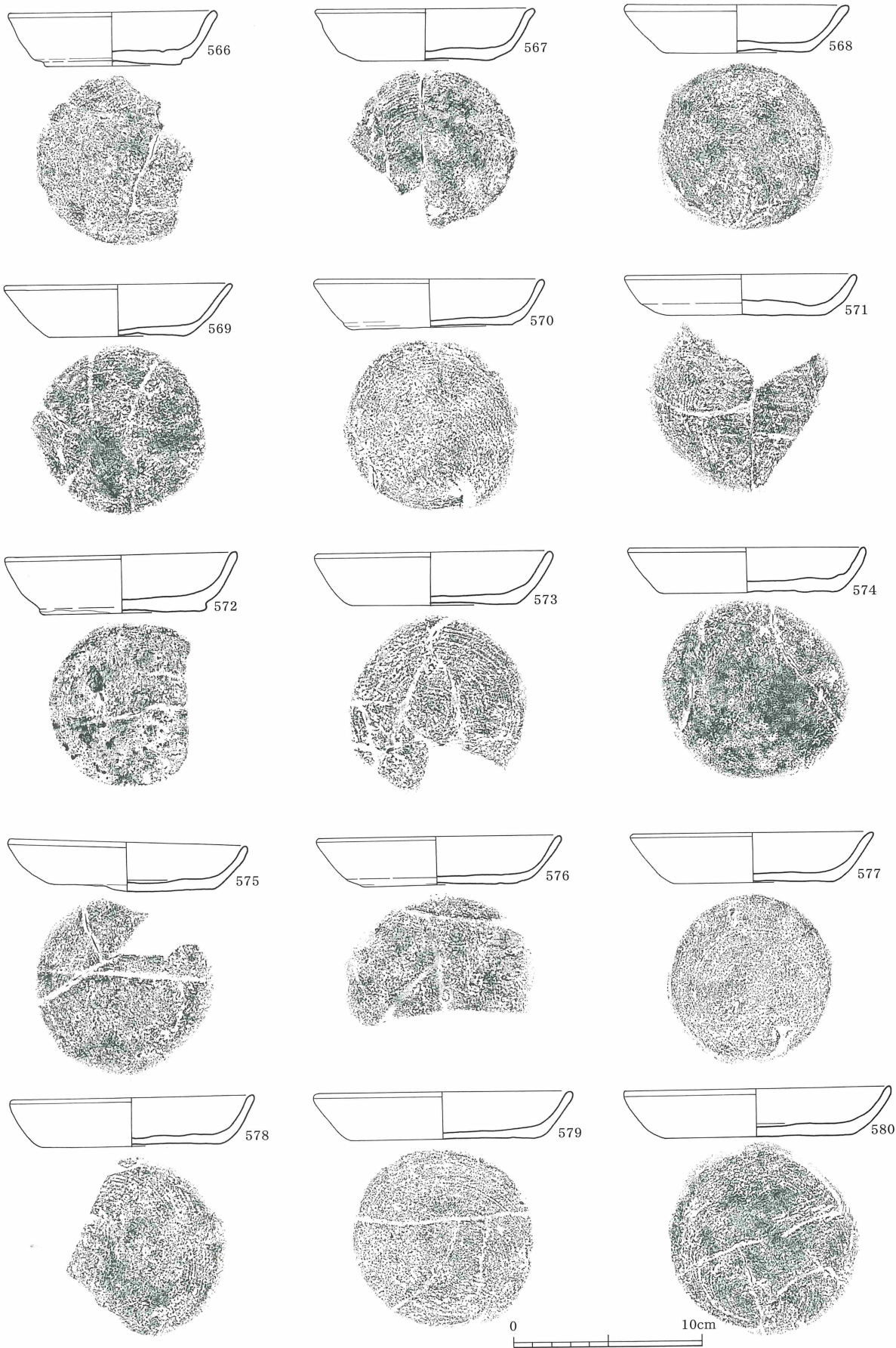


第59図 A区第1号堀出土遺物 (22) (1/3)

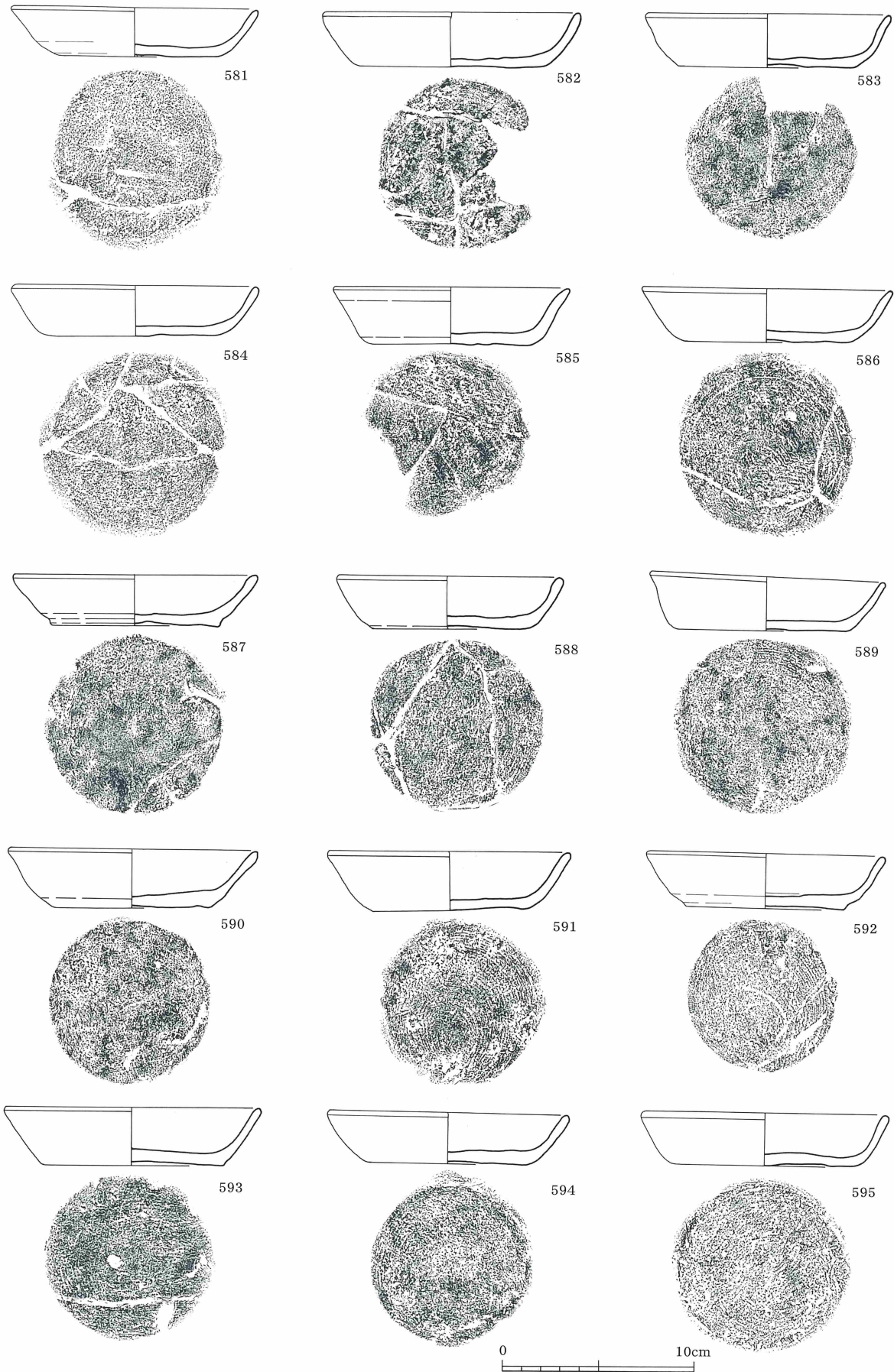


487~565 S-368出土

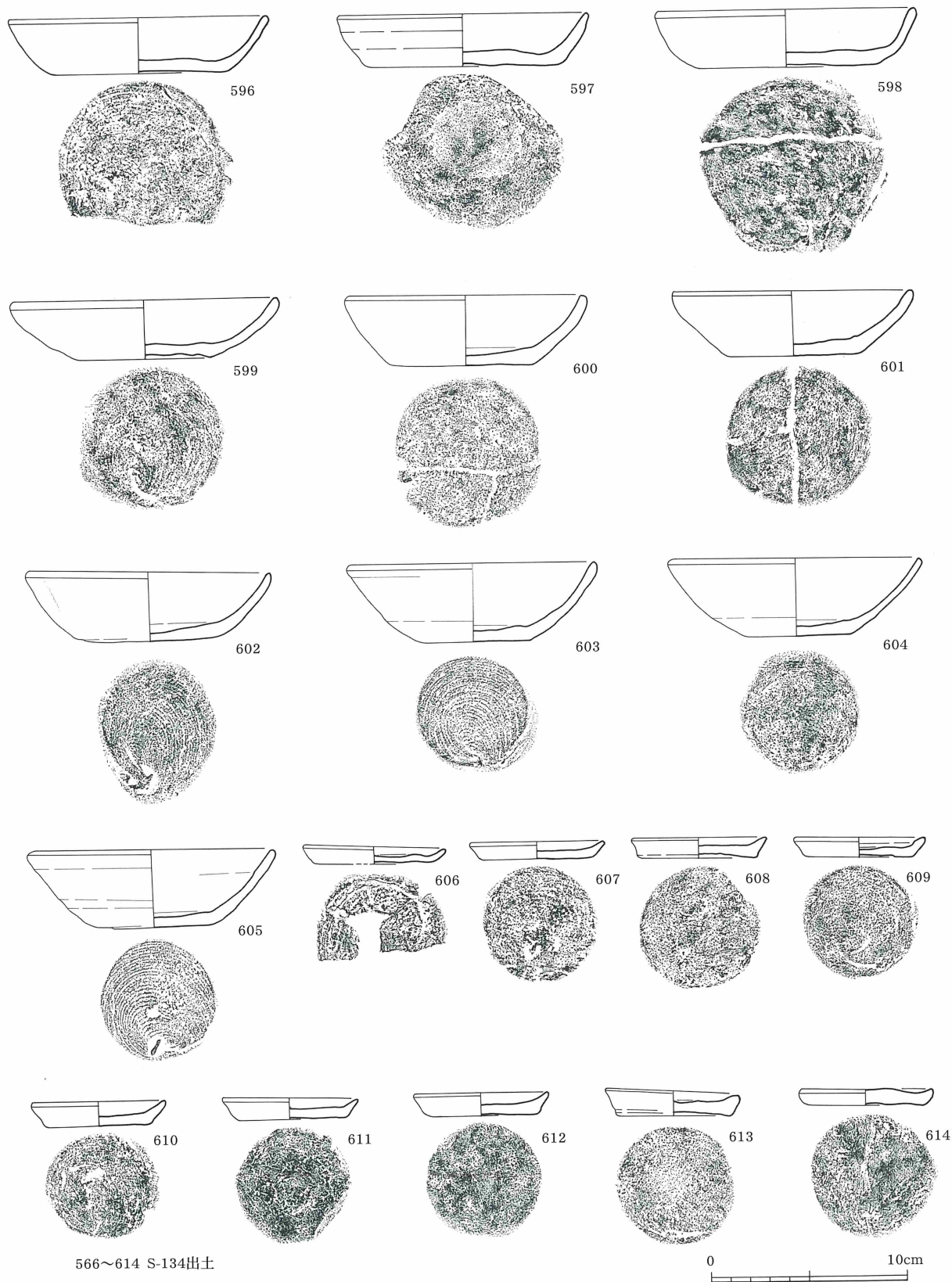
第60図 A区第1号堀出土遺物(23) (1/3)



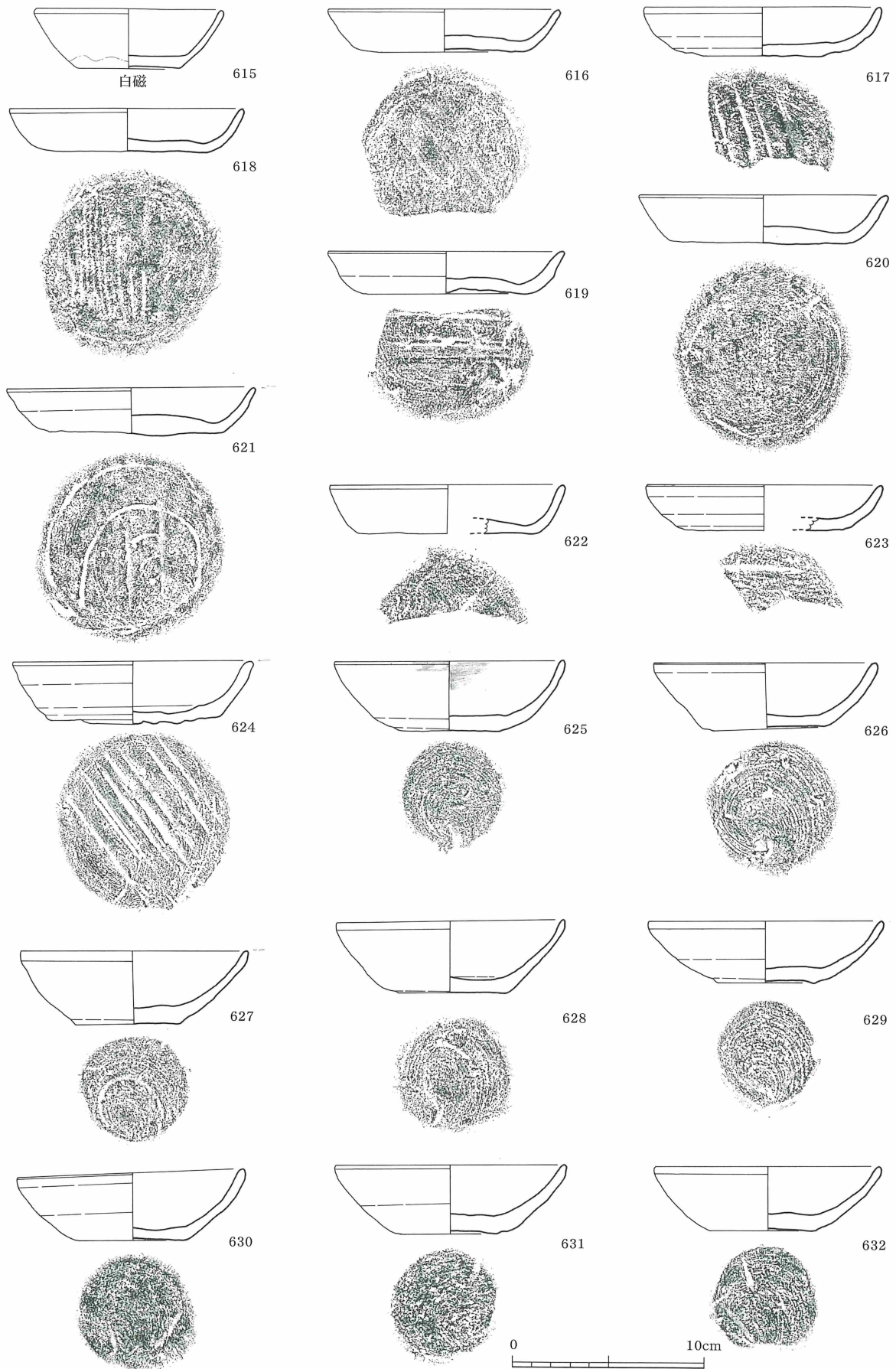
第61図 A区第1号掘出土遺物 (24) (1/3)



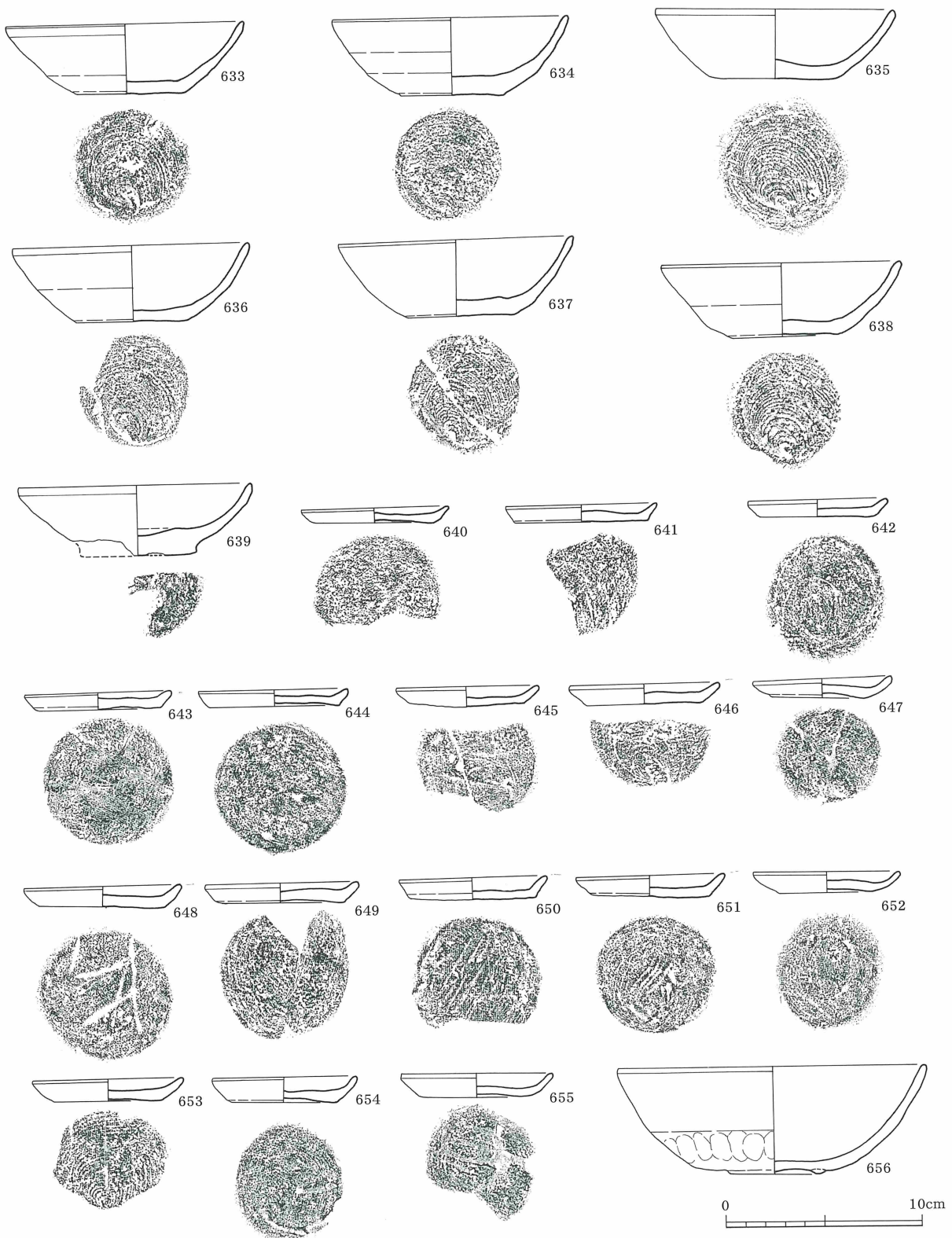
第62図 A区第1号掘出土遺物 (25) (1/3)



第63図 A区第1号堀出土遺物 (26) (1/3)

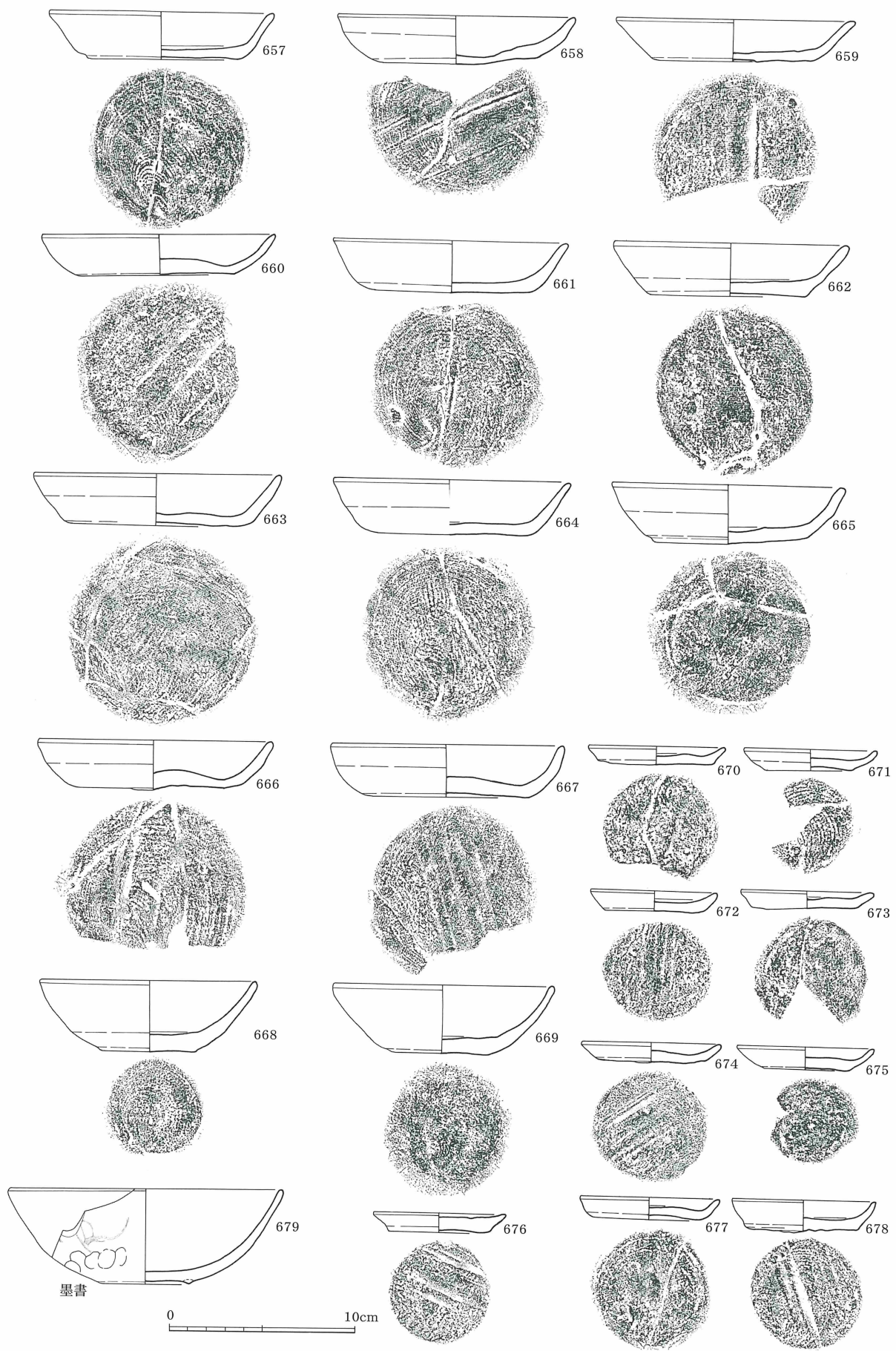


第64図 A区第1号掘出土遺物 (27) (1/3)



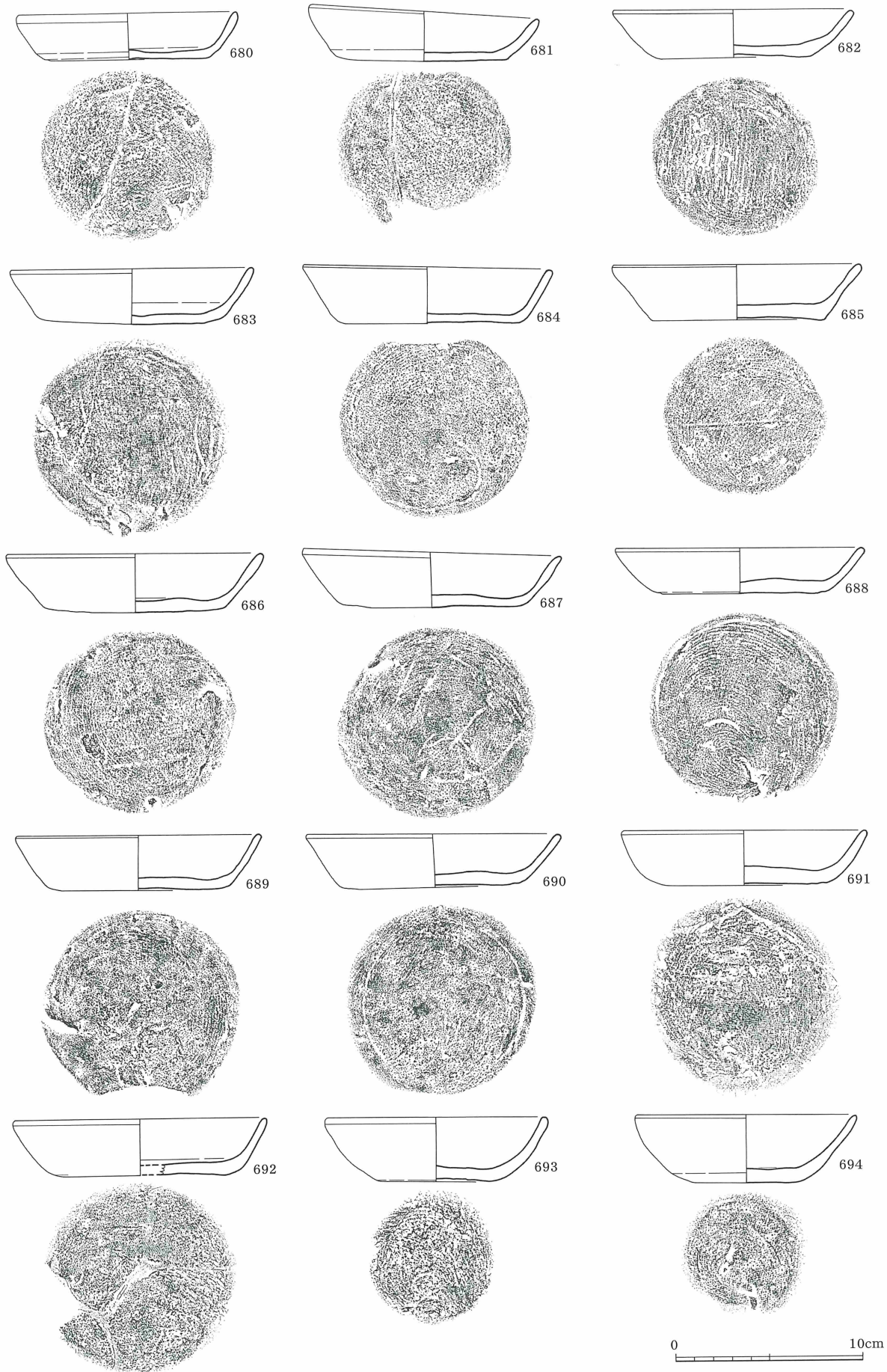
615~656 S-366出土

第65図 A区第1号堀出土遺物 (28) (1/3)

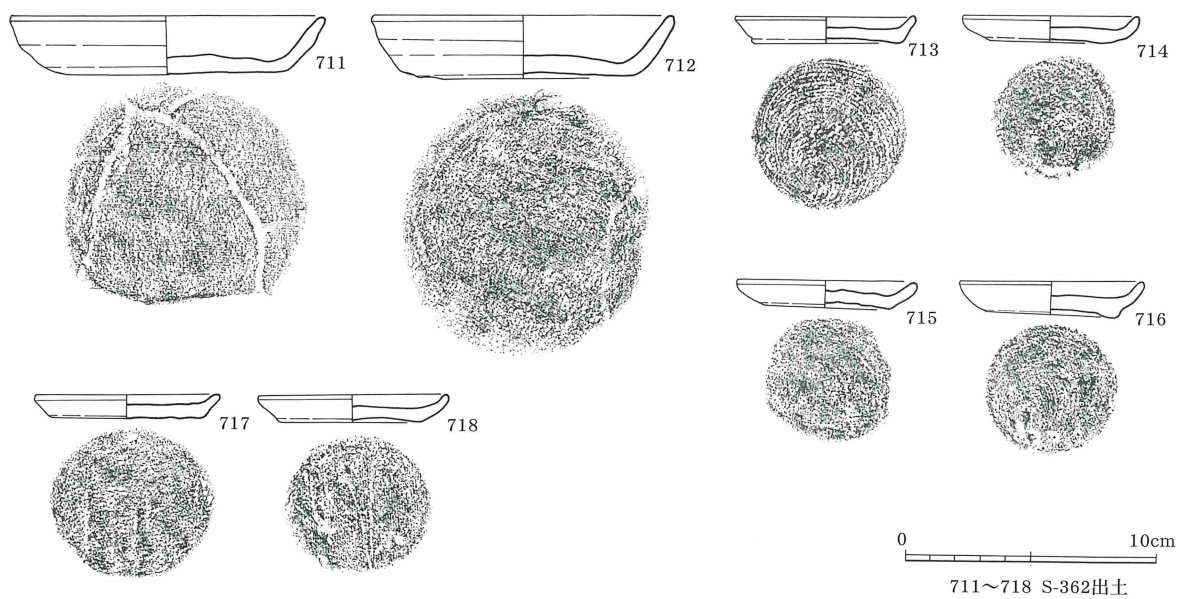
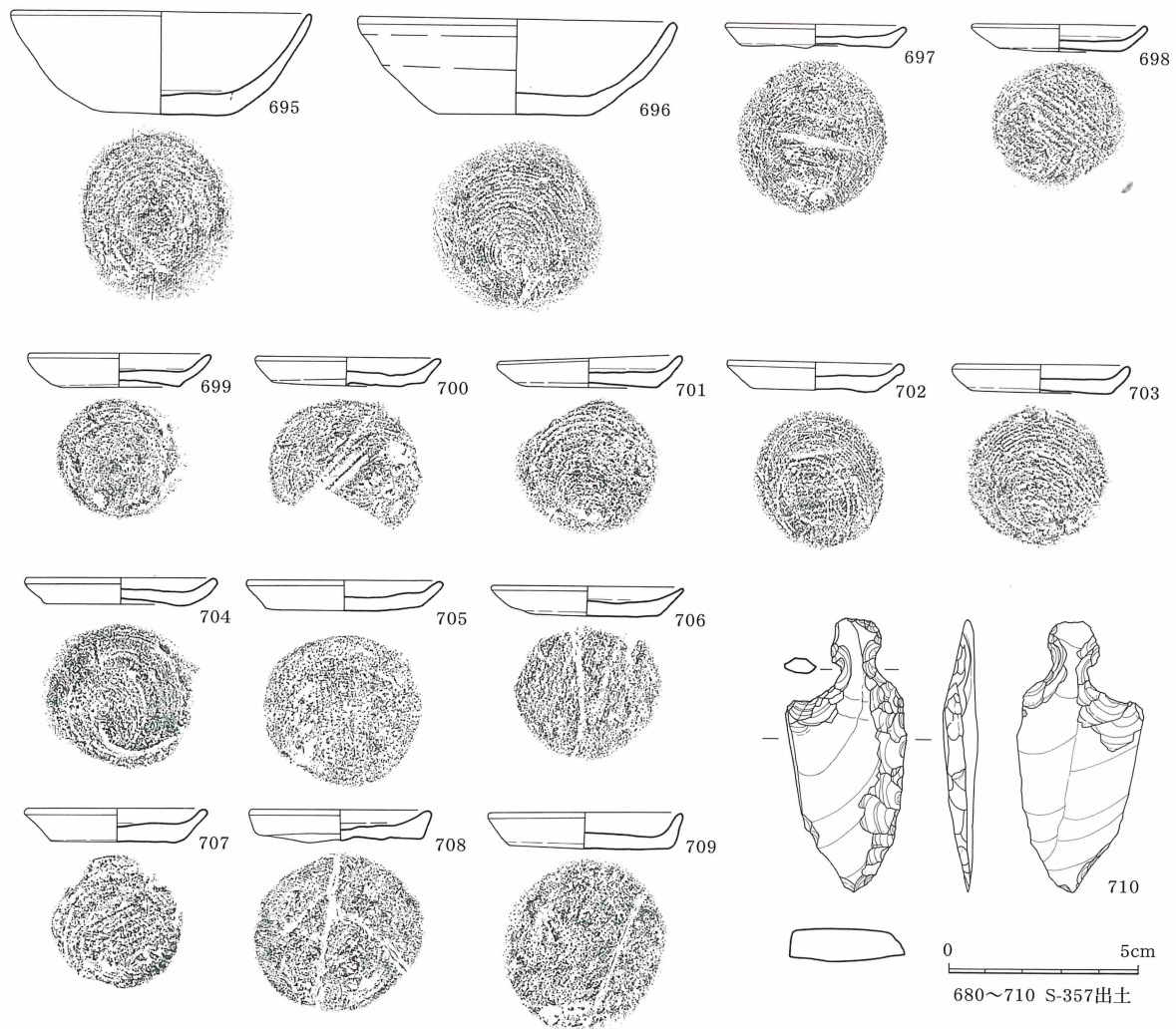


第66図 A区第1号掘出土遺物 (29) (1/3)

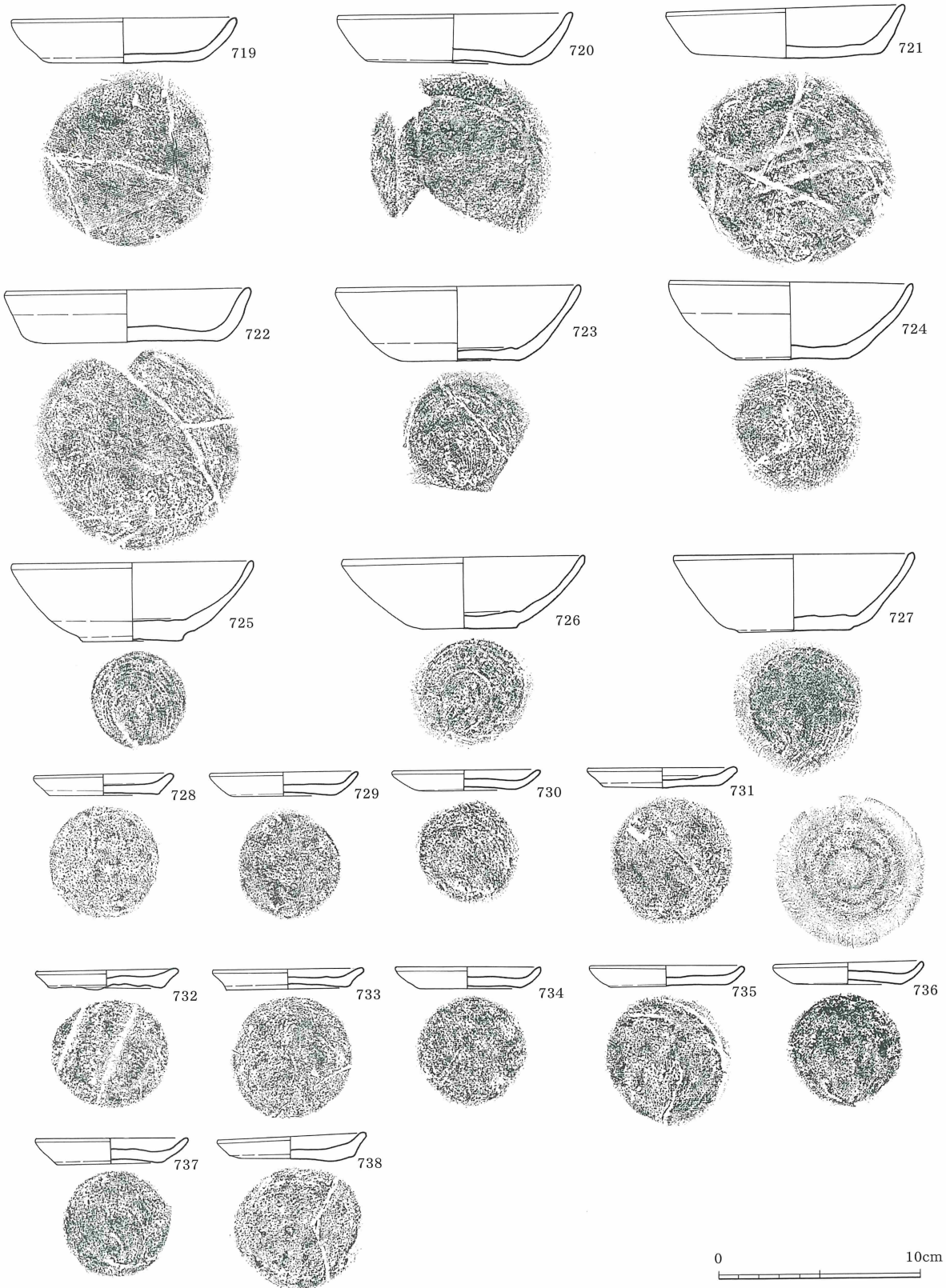
657~679 S-379出土



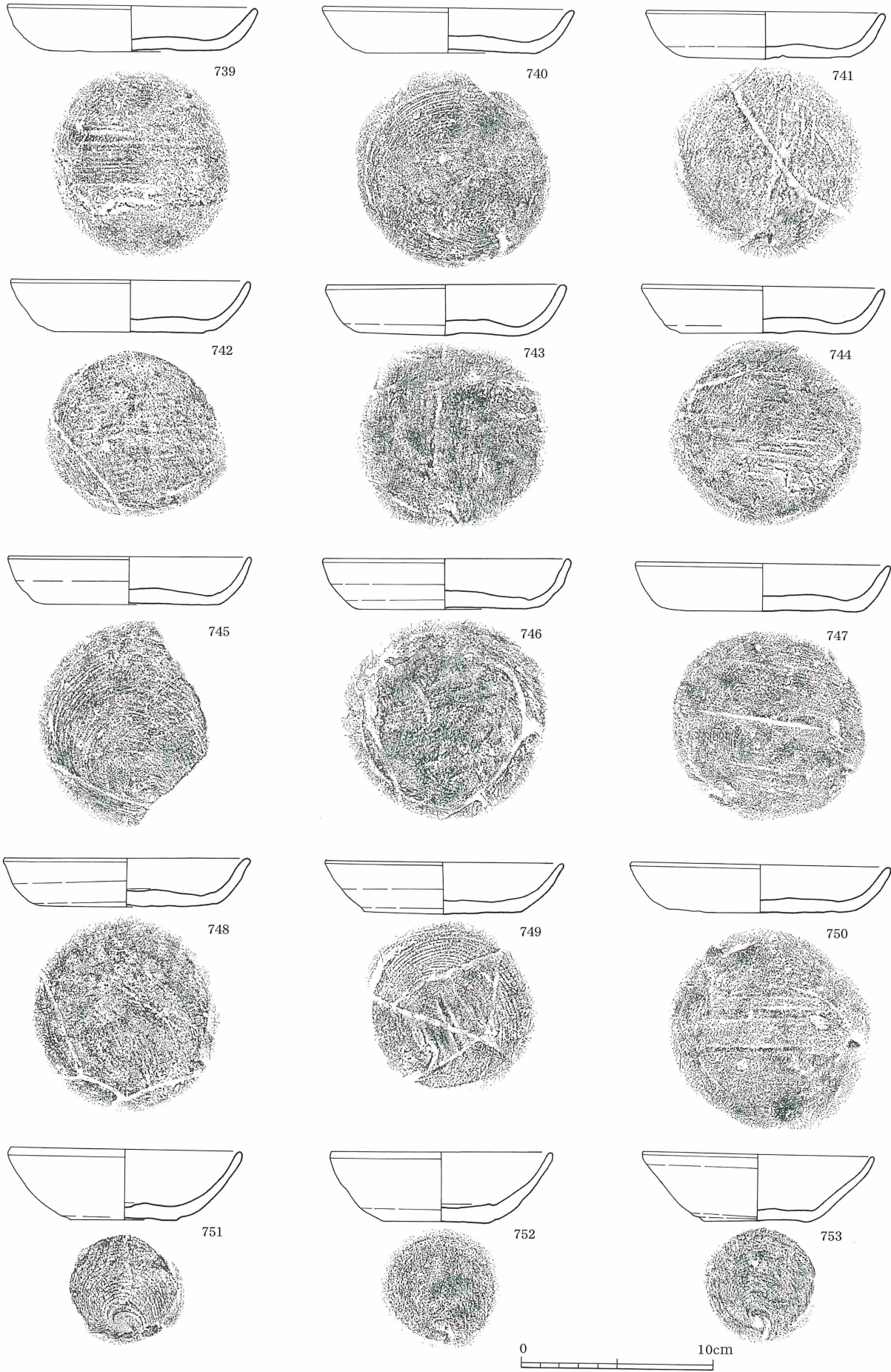
第67図 A区第1号堀出土遺物 (30) (1/3)



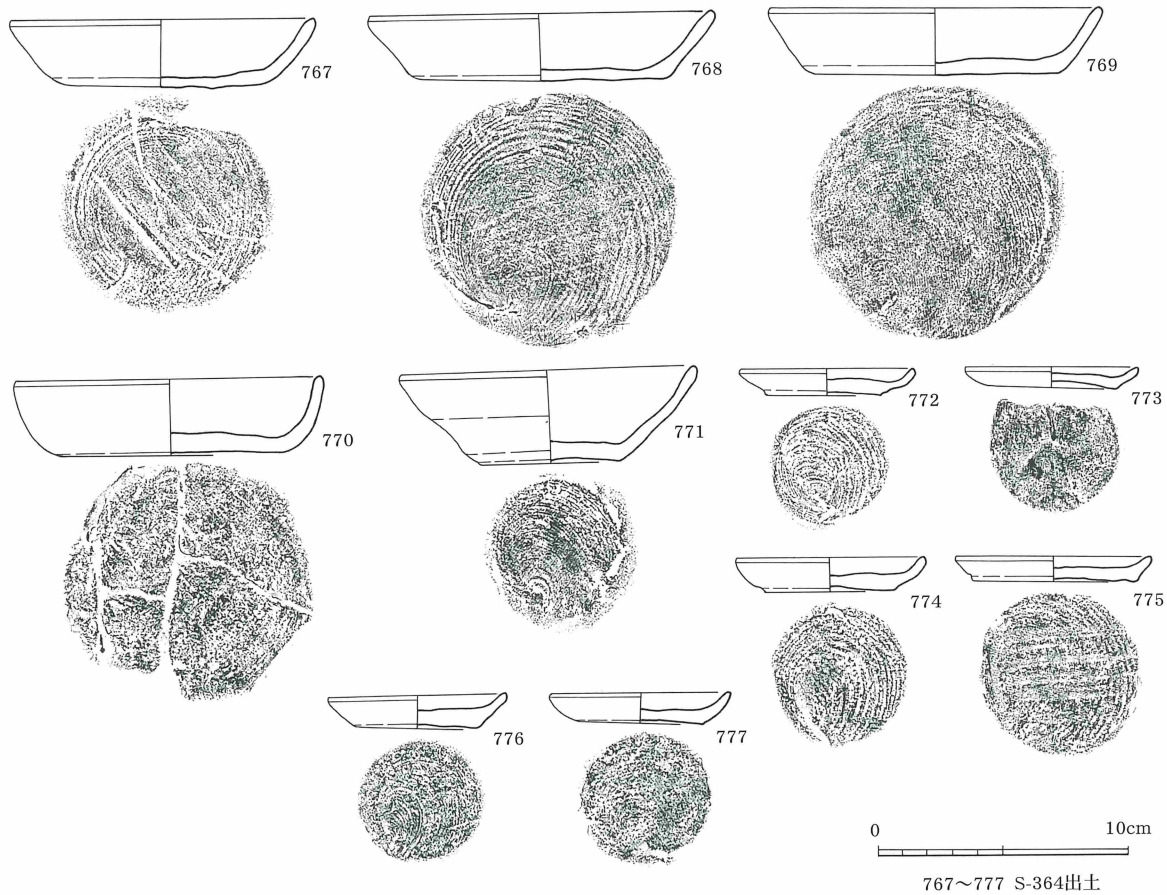
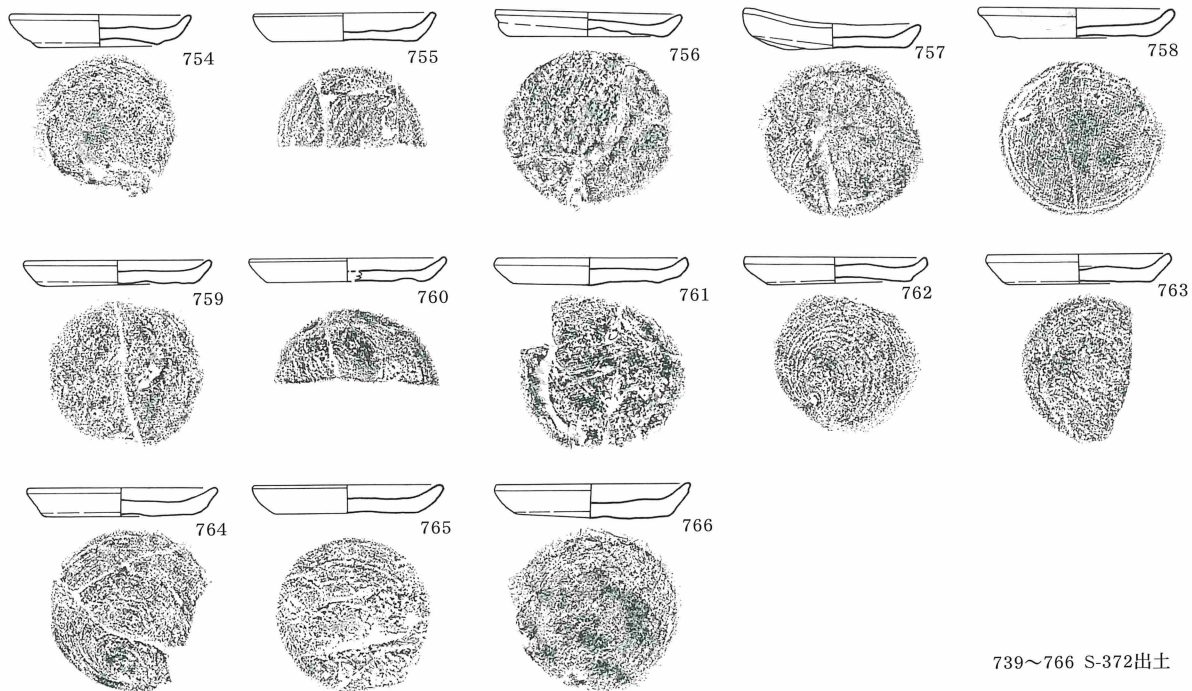
第68図 A区第1号堀出土遺物 (31) (1/2 1/3)



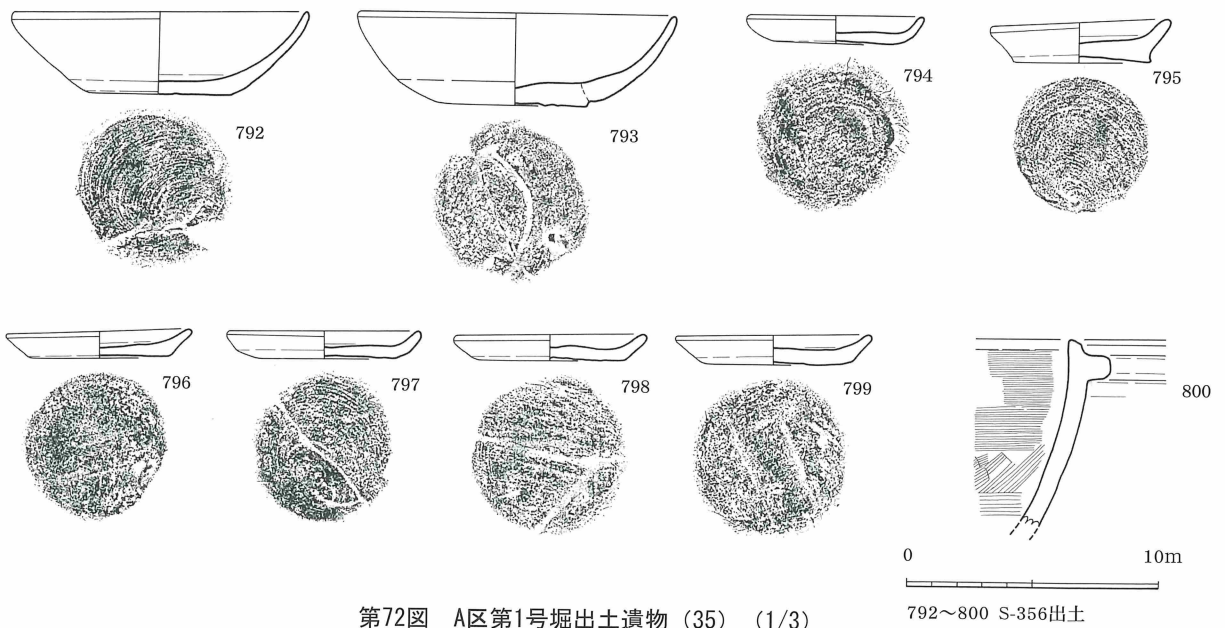
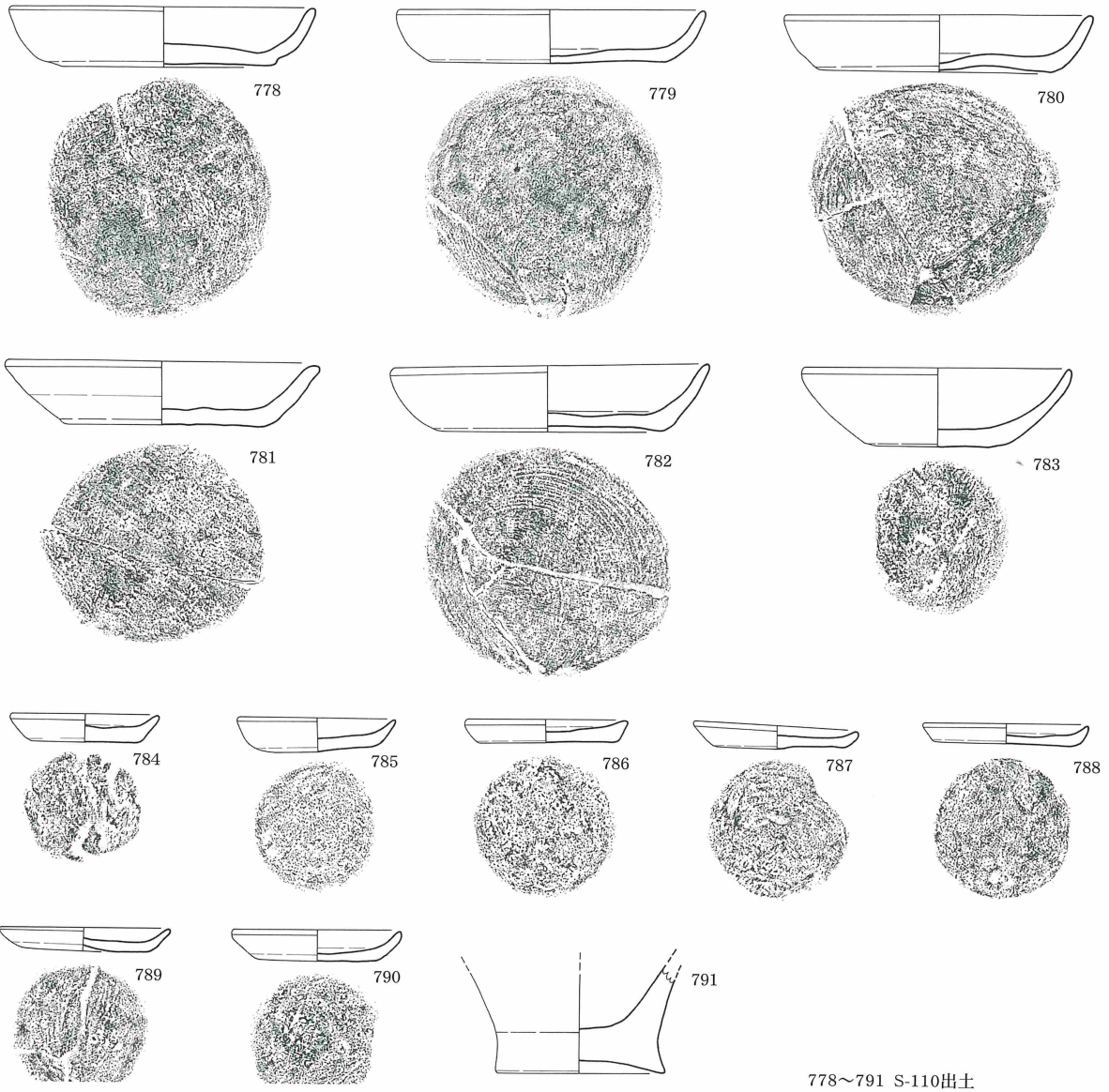
第69図 A区第1号掘出土遺物 (32) (1/3)



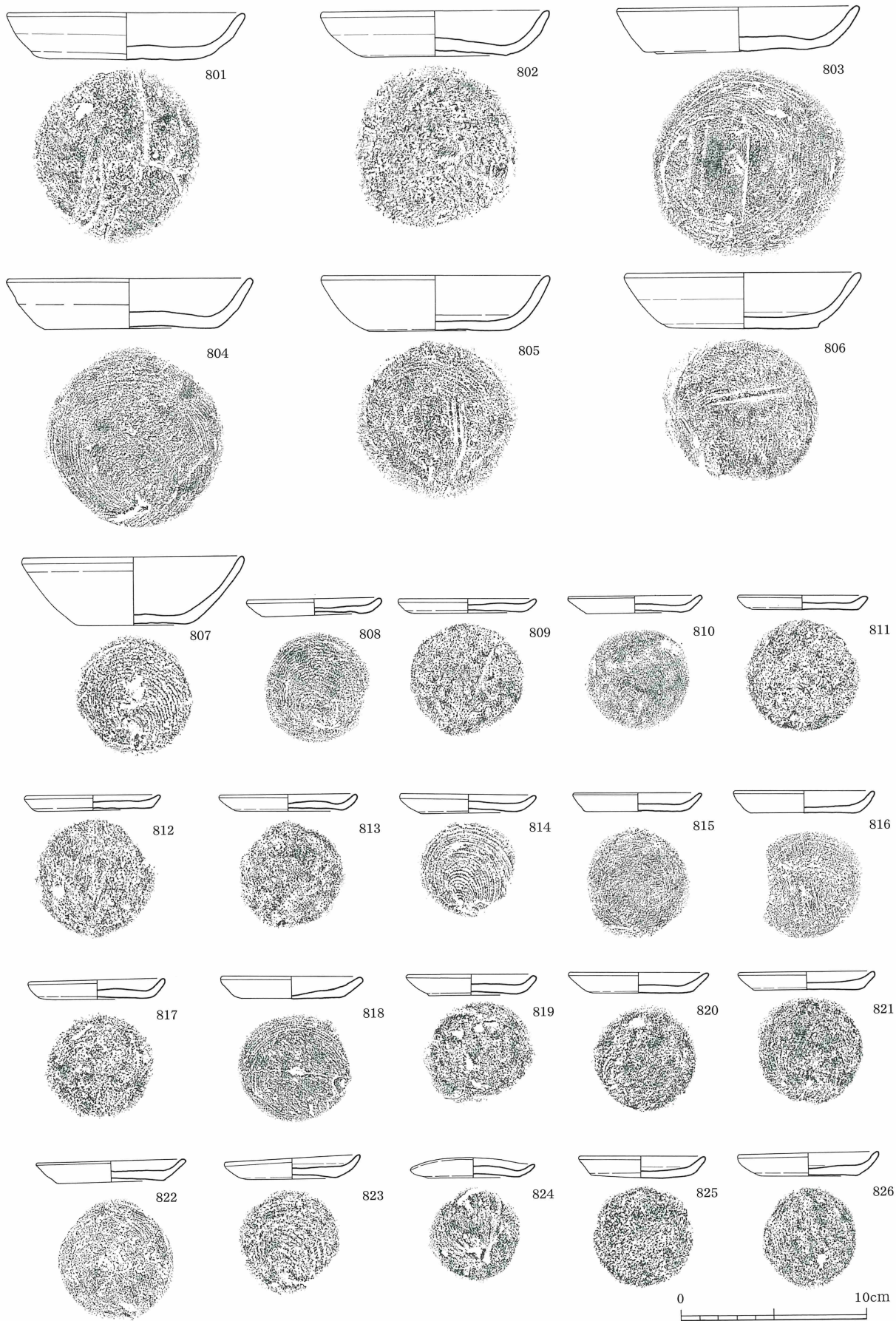
第70図 A区第1号堀出土遺物 (33) (1/3)



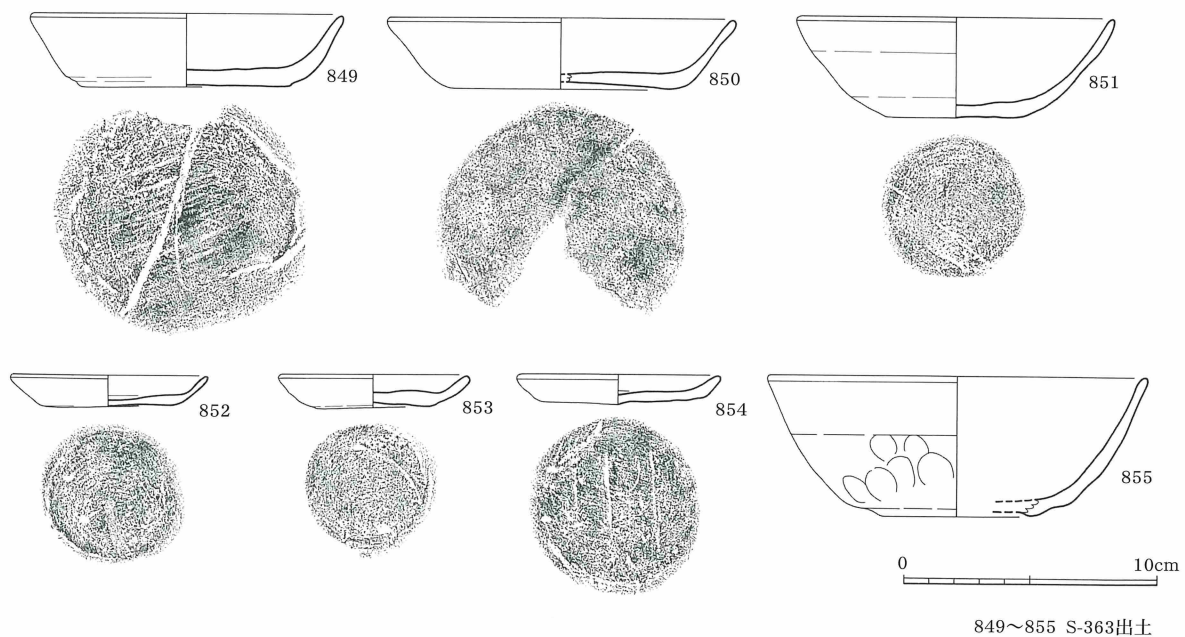
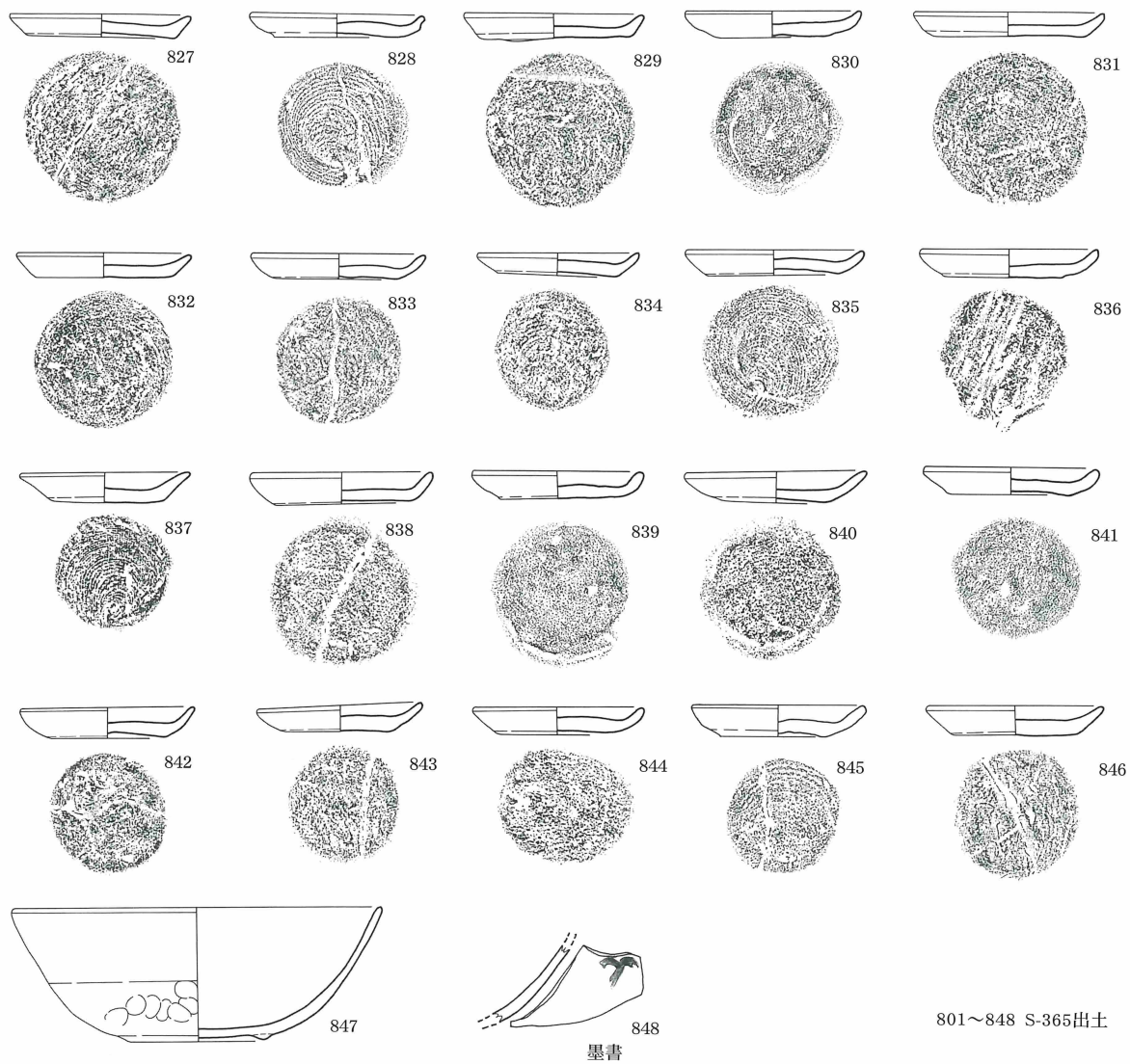
第71図 A区第1号掘出土遺物 (34) (1/3)



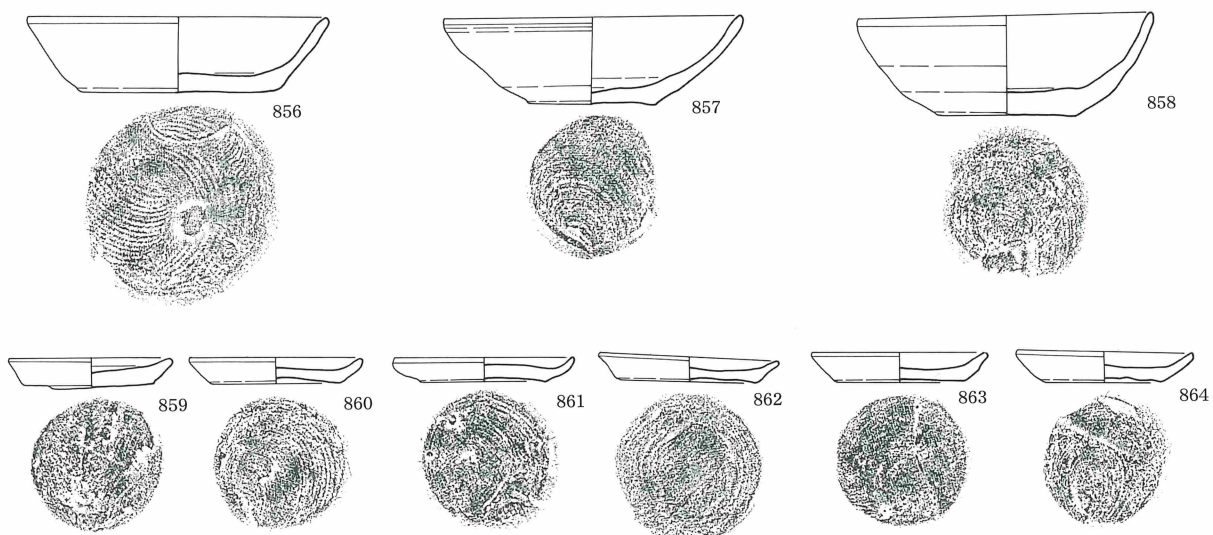
第72図 A区第1号掘出土遺物 (35) (1/3)



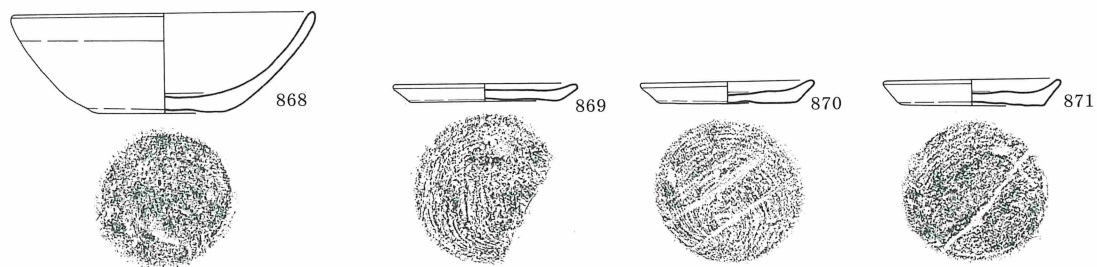
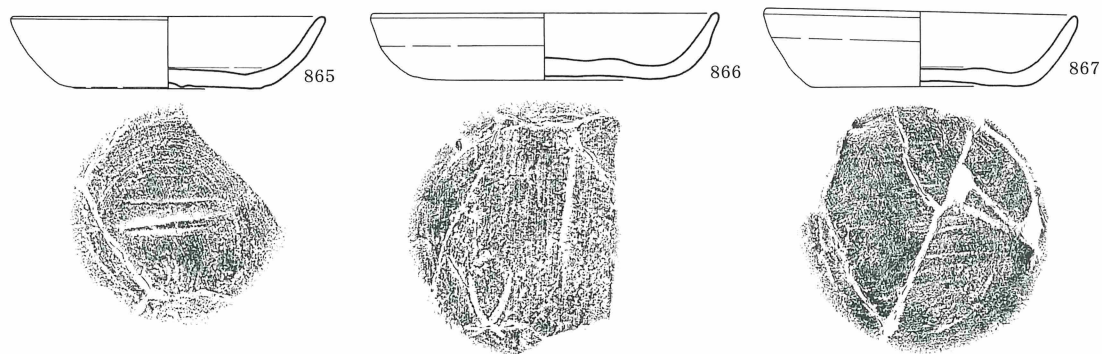
第73図 A区第1号掘出土遺物 (36) (1/3)



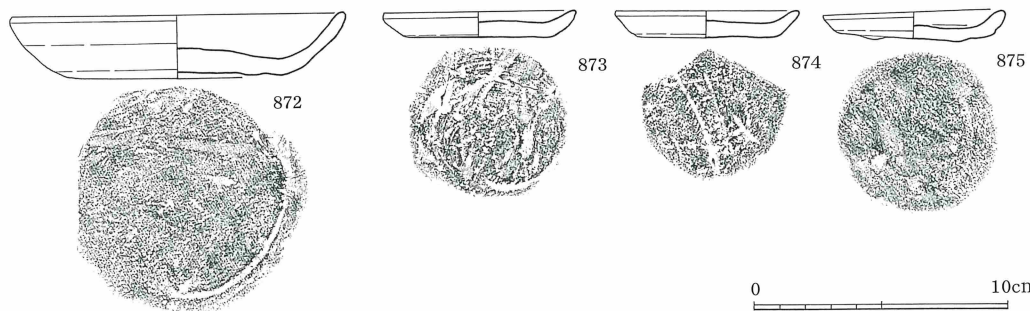
第74図 A区第1号堀出土遺物 (37) (1/3)



856~864 S-367出土

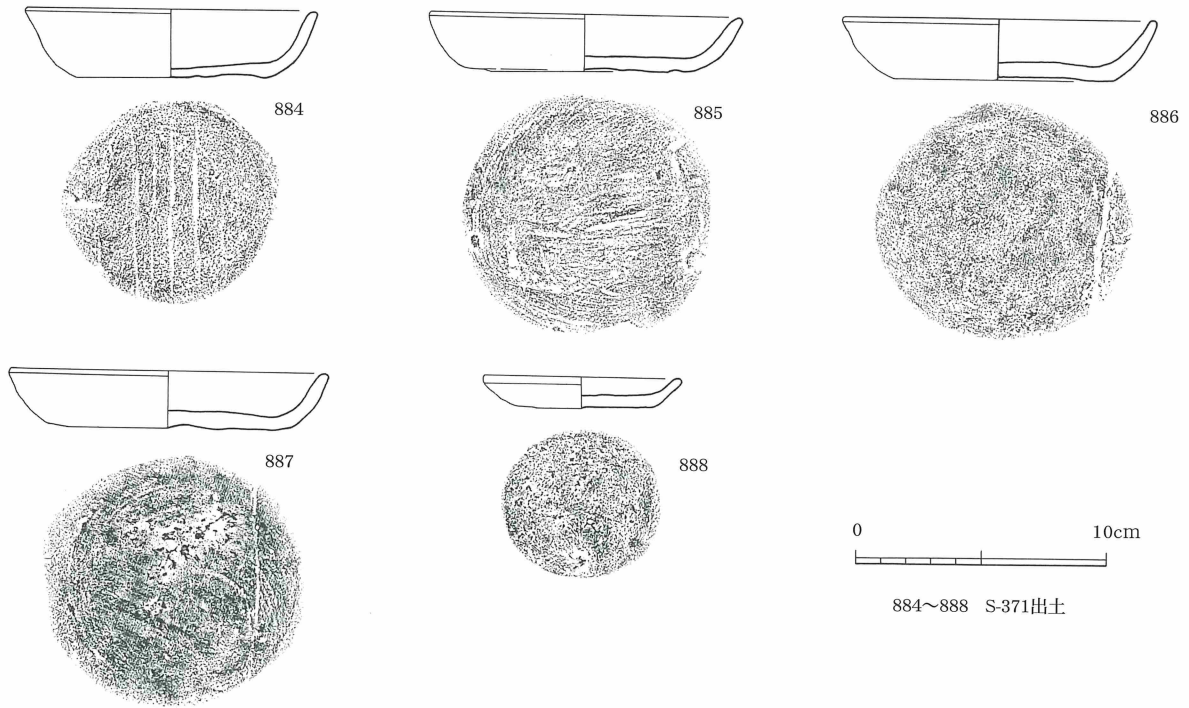
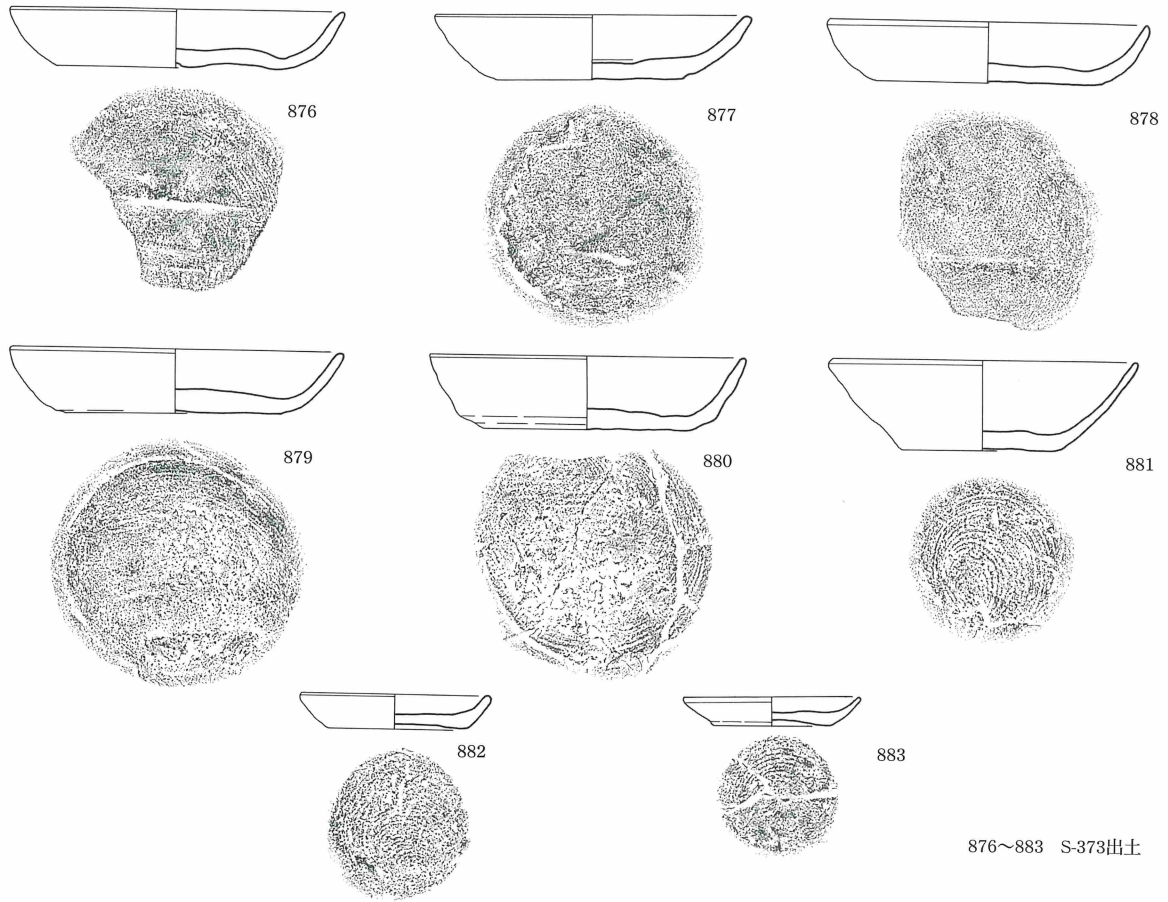


865~871 S-391出土

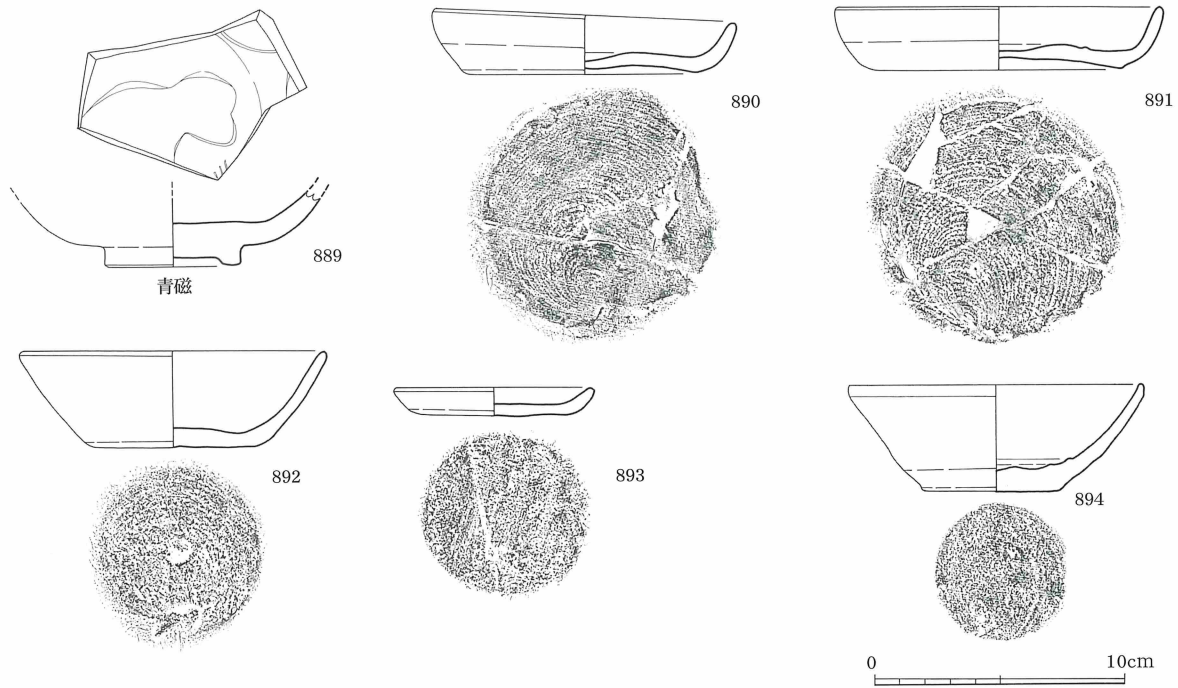


第75図 A区第1号掘出土遺物 (38) (1/3)

872~875 S-369出土



第76図 A区第1号掘出土遺物 (39) (1/3)



第77図 A区第1号堀出土遺物 (40) (1/3)

889~893 S-167出土
894 S-370出土

※追記 第1号堀出土とした128から387の内、出土地点を205頁以下の表の中で「A区S-135東西ベルト4」としたものは、廃棄土坑であるS-400出土の可能性が高い。また、出土地点にNo.があるものは、第35図に示す東西方向に延びる部分にある土器の集中出土地点から出土したものである。更に出土遺構が「SD6」となっているものは、第1次調査時出土のもので、これは主に耕作地とした範囲から出土した遺物である。

第2号堀 (S-257, SD-5)

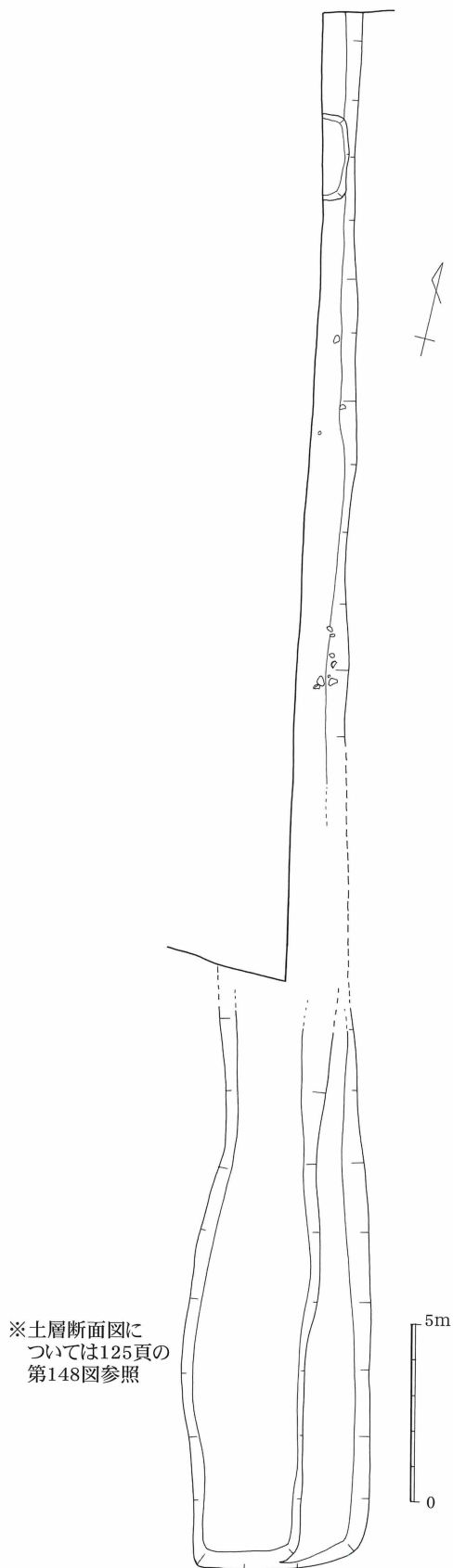
第1号堀に平行するように略南北方向に伸びるが、第1号堀が東方に屈曲する部分で第2号堀は終わる。北側は、調査区外に伸び犬丸川との関係は第1号堀と同様であろうと考えられるが、不明である。なお、第2号堀は小字境(小字「城内」と「田中」)の排水路のため、一部については調査できていない。

第2号堀と館との関係は、第1号堀との位置関係、堀の終息する地点、そして何より、第1号堀は、館が機能していた段階で埋められ、さらに掘り返され耕作や土器の廃棄がなされるなど、堀としての役割がある段階以降失っていたことなどから、この第2号堀がある段階以降の館を画する堀であった可能性が高い。おそらく、当初は2重堀であったのが、内堀(第1号堀)が埋められ、外堀(第2号堀)のみが残されたものであろう。

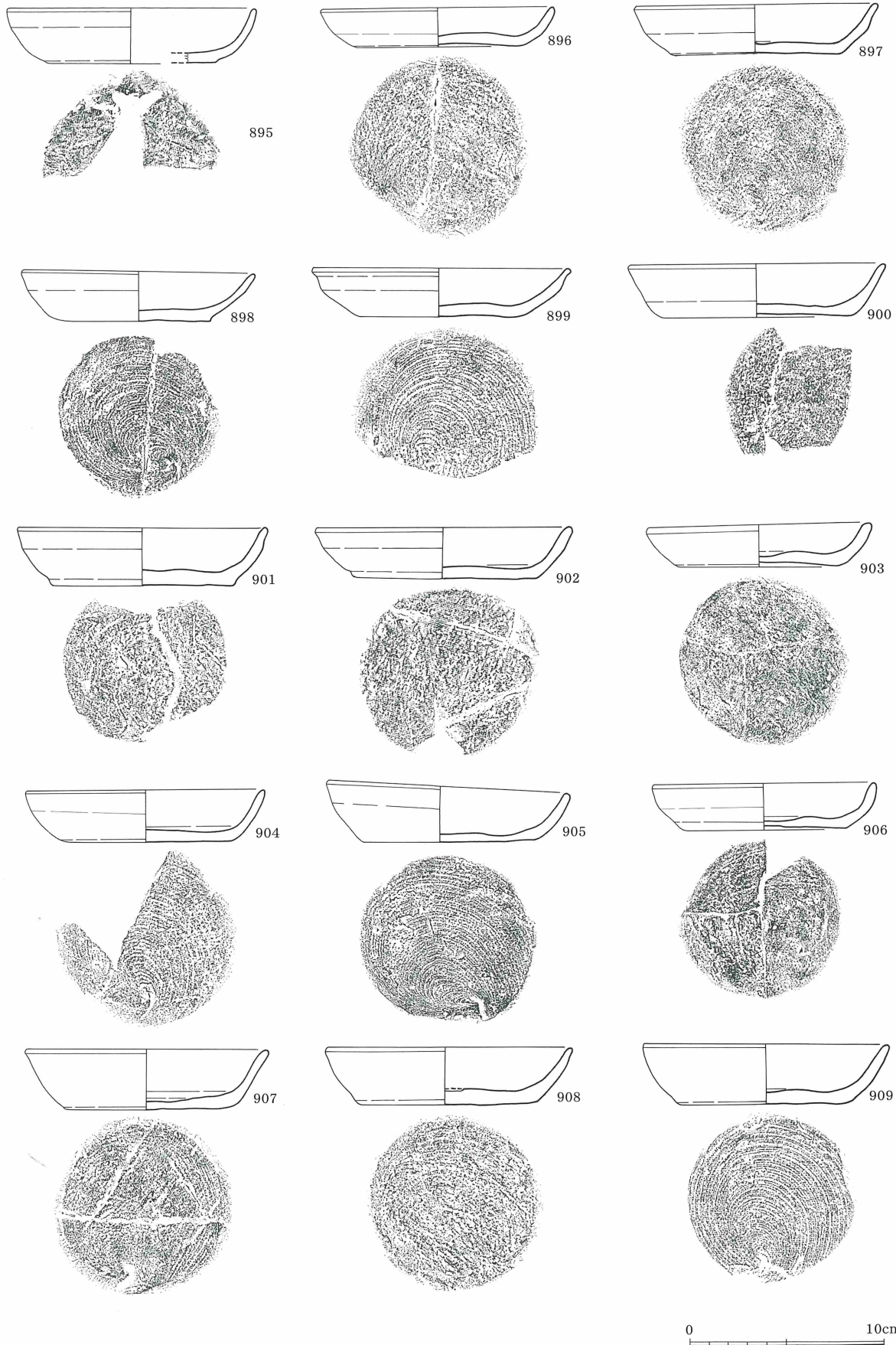
堀の幅は最大5m、深さは0.8mで、底面はほぼ平らで箱堀をなす。遺物は、床面には少なく、やや埋没した段階で、館内側から流れ込んだ状態で出土している。堆積状況から見て、自然に埋まっている。

遺物

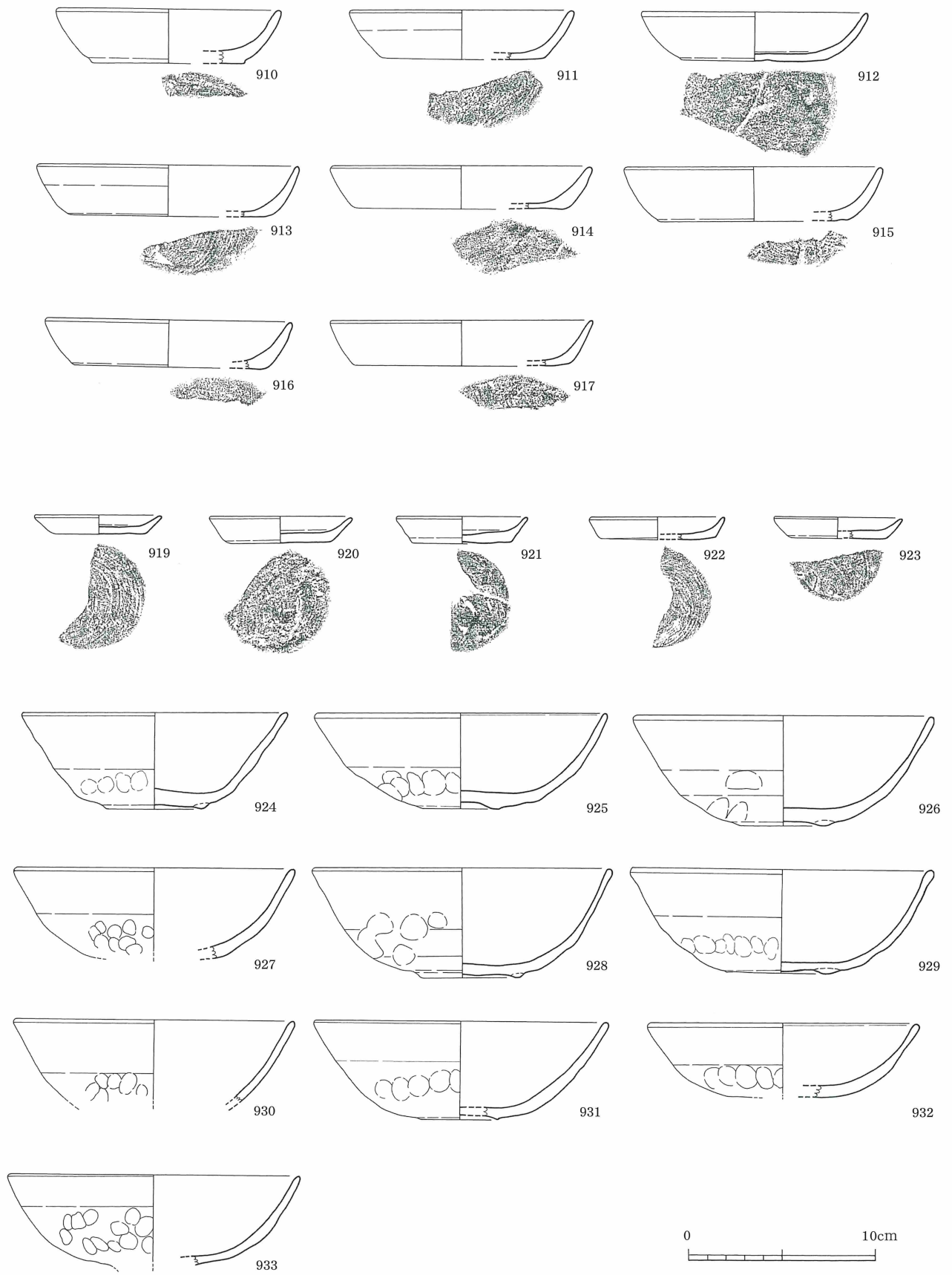
第79図895から938が出土遺物である。895から918は土師器坏で、図化の可能なものはすべて坏B形式であった。919から923は土師器小皿で、口径は平均で7.1cmである。924から933は瓦器琿で、体部下半には指頭圧痕が残り、磨きはない。高台は低い痕跡程度のもので、932は高台が消滅している可能性がある。934から936は瓦質の甕で、934と935には外面には格子状のタタキがある。937と938は土師質で、937は直立する口縁部を持つ壺、938は内面に折り返す口を持つ鍋か。坏B形式(45頁参照)で占められるということは、この外堀は、内堀(第1号堀)埋没後、土器の大量廃棄があった時期の後に埋まったことになる。



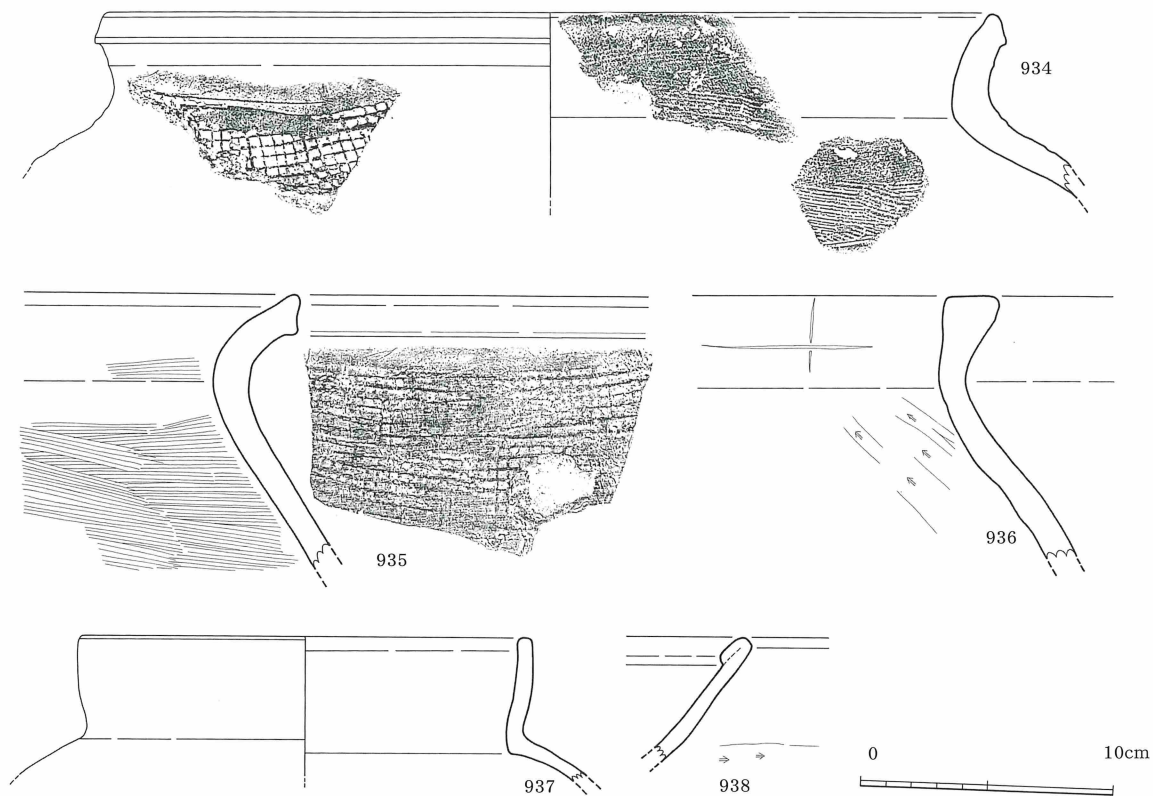
第78図 A区第2号堀実測図 (1/200)



第79図 A区第2号堀出土遺物 (1) (1/3)



第80図 A区第2号掘出土遺物 (2) (1/3)

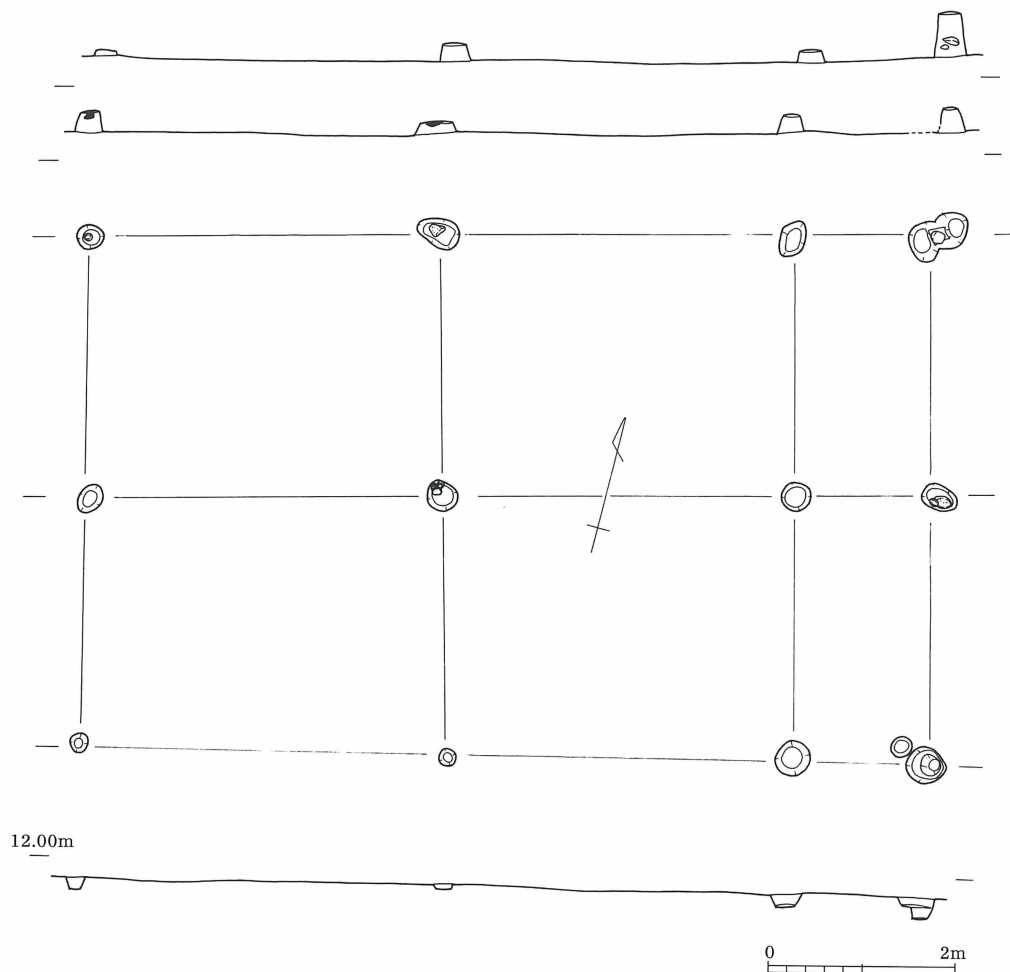


第81图 A区第2号掘出土遺物 (3) (1/3)

第1号掘立柱建物(第82図)

館内部の南西隅部にあたる部分にある。第1号堀に平行して建てられており、南北方向の堀からは約1.5m、東西方向の堀からは8m離れている。柱間は2間×2間(庇まで含めて9.0m×5.6m)で東側に庇を持つ。また東西方向の柱間が約3.8mと広く、建物の棟方向は東西である。

遺物の出土はなかった。

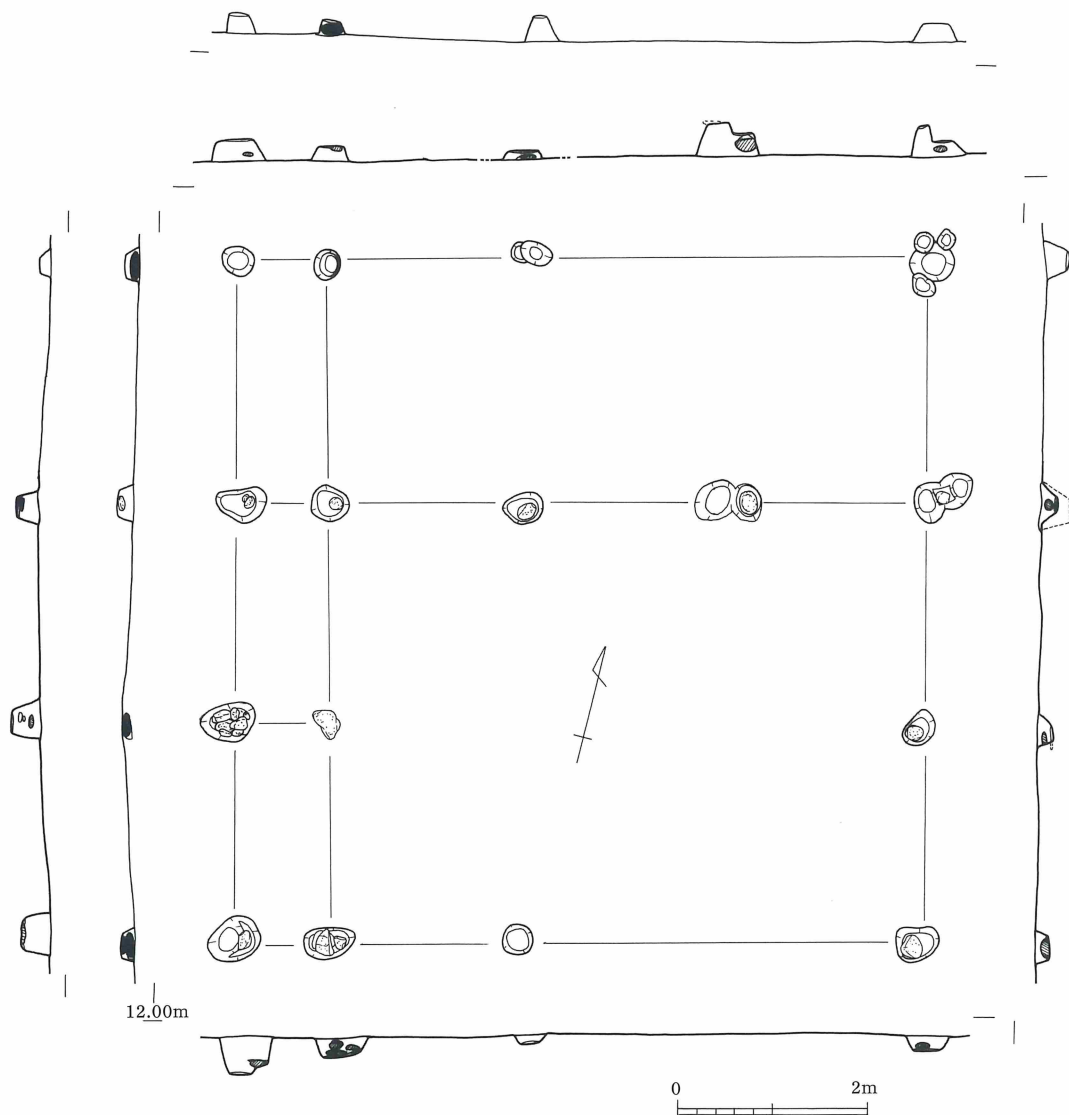


第82図 A区第1号掘立柱建物実測図(1/80)

第2号掘立柱建物(第83図)

第1号建物に重なって検出された。ほとんどの柱穴には内部に礎盤の石が据えられている。柱穴配置はやや変則的で南北方向に3間、東西方向に3間あるが、東西方向の最も西側列は巾の狭い庇であり、本来の身舎は2間×3間(7.2m×6.4m)である。しかし、東西方向の柱間が広いので、平面形状は庇部分も入れるとほぼ正方形を呈する。

柱穴からの遺物の出土はない。



第83図 A区第2号掘立柱建物実測図 (1/80)

第3号掘立柱建物(第84図)

第1、2号掘立柱建物の東に建つ小型の建物である。やや変則的なすき間の狭い2間×3間(4.5m×4.5m)のほぼ正方形の建物で、北側の1列には間に柱がない。

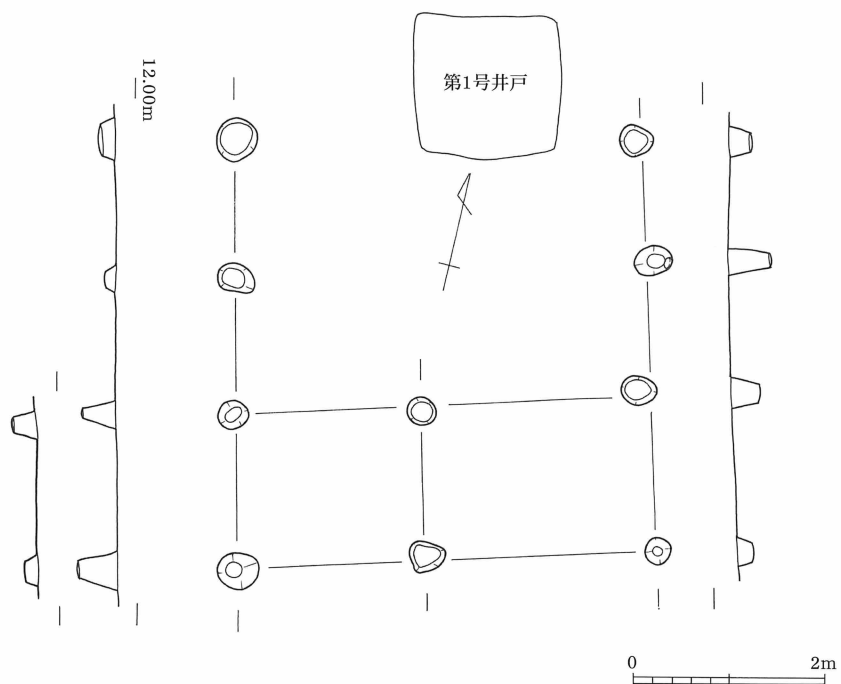
柱穴からの遺物の出土はない。

第4号掘立柱建物(第85図)

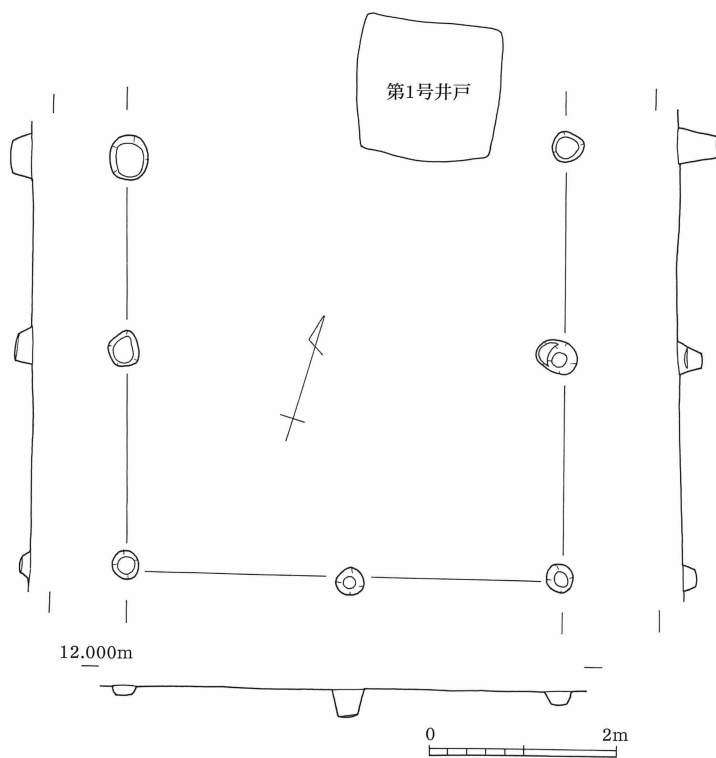
第3号掘立柱建物に重なって検出された2間×2間(4.6m×4.4m)のほぼ正方形の建物で、北側の1列には間に柱がない。

柱穴からの遺物の出土はない。

以上の1号から4号の掘立柱建物は、配置から見て1号と3号、2号と4号が同時期に存在した可能性が高い。さらに、後述する第1号井戸(S-164)の存在と第1号堀に大量の土器が捨てられた廃棄土坑との位置関係から見て、厨(台所)に関わる施設であった可能性が高い。



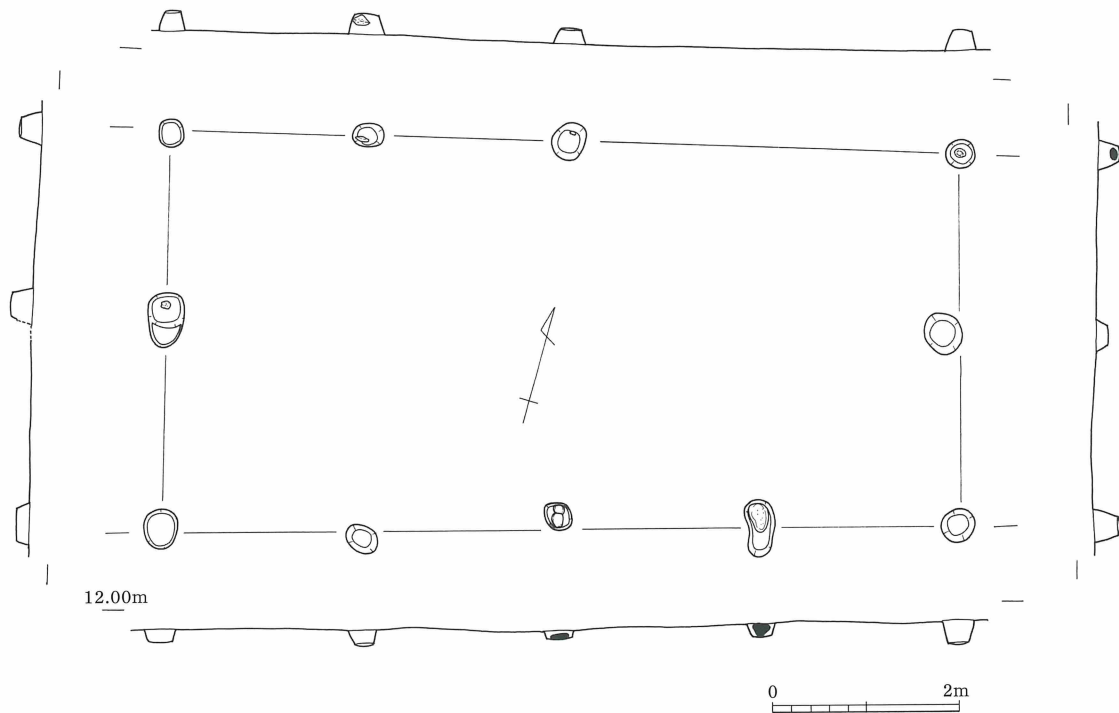
第84図 A区第3号掘立柱建物実測図 (1/80)



第85図 A区第4号掘立柱建物実測図 (1/80)

第5号掘立柱建物(第86図)

第1号から4号掘立柱建物の北側に位置する2間×4間(4.0m×8.5m)の掘立柱建物である。主軸方向は東西で、立て替えは無い。柱穴からの遺物の出土はなかった。



第86図 A区第5号掘立柱建物実測図(1/80)

第6号掘立柱建物(第87図)

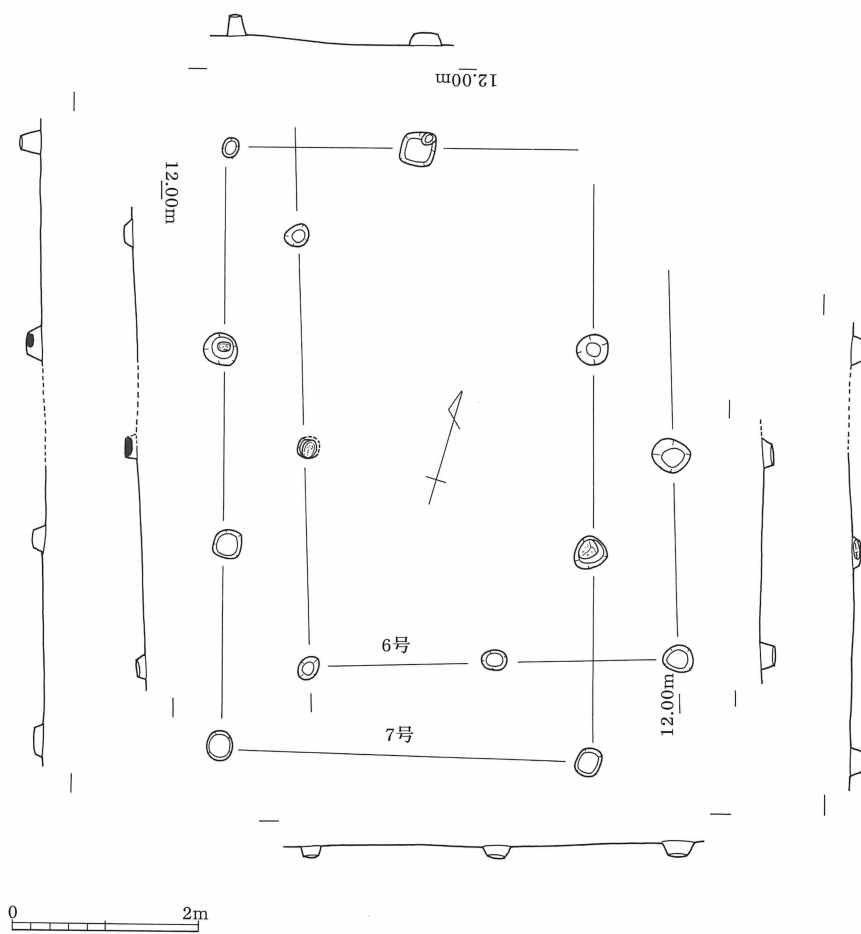
調査区北東部で検出された掘立柱建物である。2間×2+ α 間(4.0m×4.5+ α m)で、第7号掘立柱建物と重なり、同位置での立て替えと考えられる。

遺物の出土はなかった。

第7号掘立柱建物(第87図)

調査区北東部で検出された掘立柱建物である。2間×3間(4.0m×6.4m)で、第6号掘立柱建物と重なり、同位置での立て替えと考えられるが、切り合いはなく、先後関係は不明である。

遺物の出土はなかった。

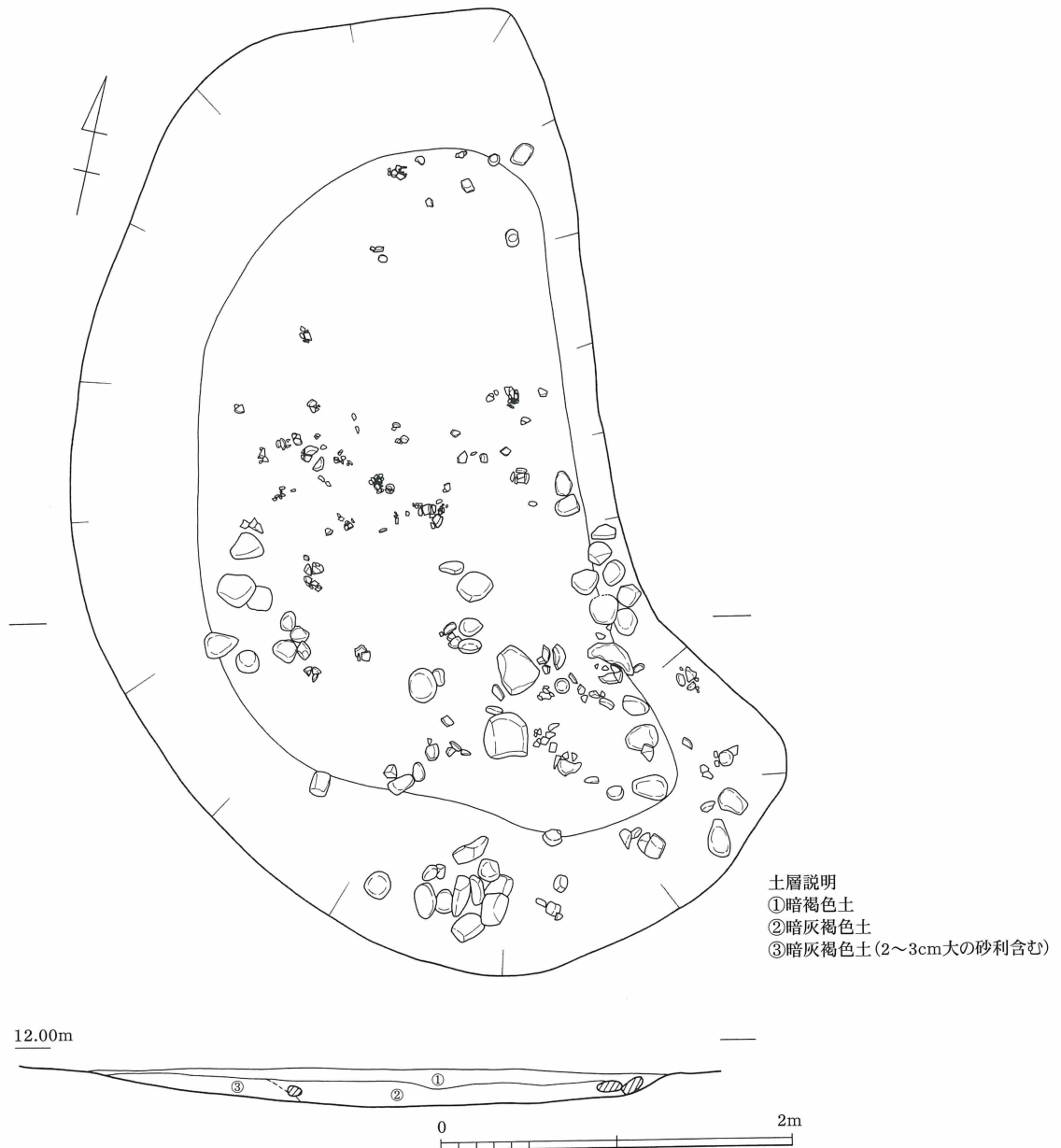


第87図 A区第6,7号掘立柱建物実測図 (1/80)

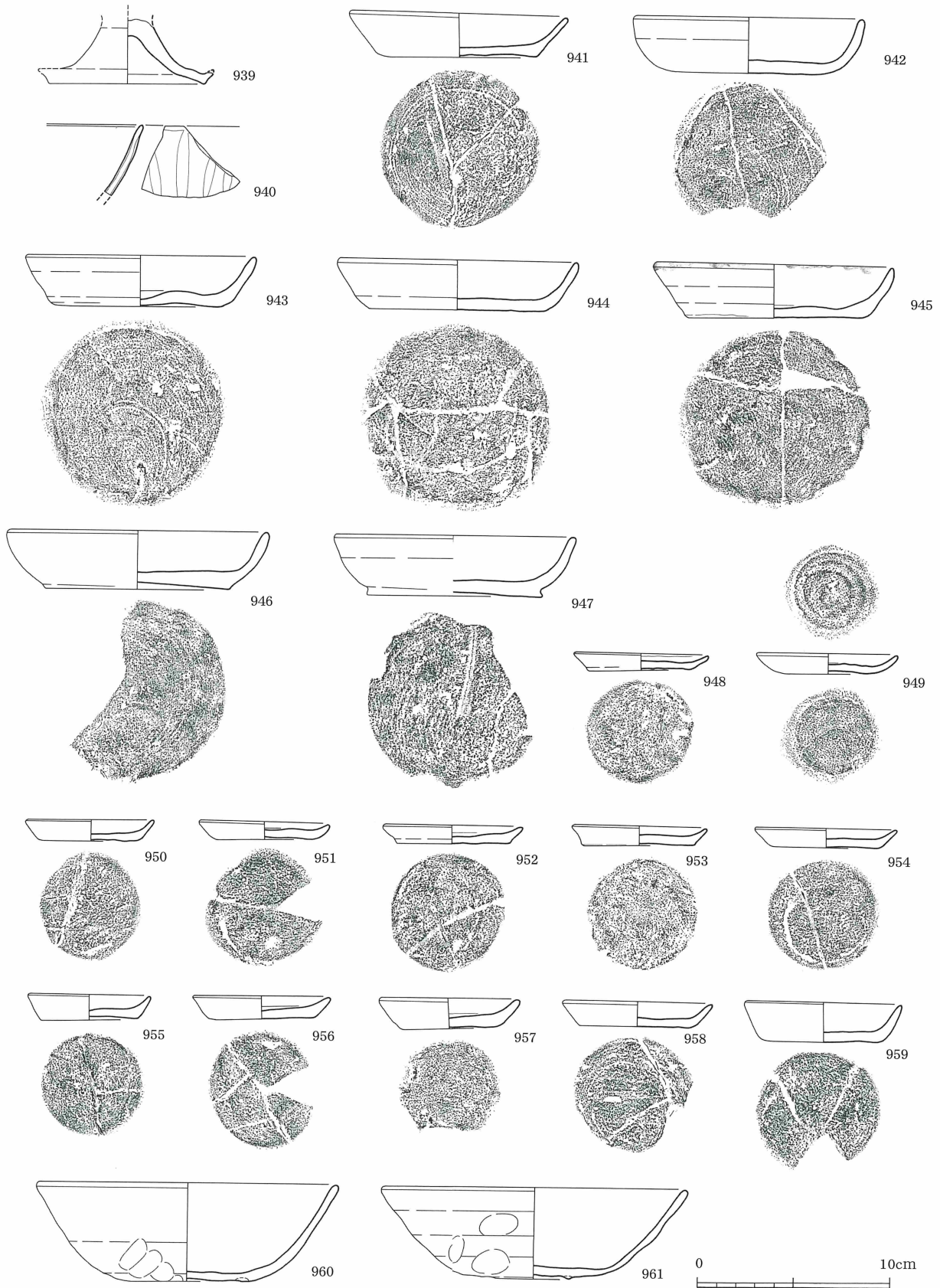
第1号土坑(SK-1) (第88図)

唯一、館内部で確認された土坑である。館内部での位置は、丁度建物の無い北西部の隅付近ということになる。南北5.5m、東西3.1m、深さは0.2mで皿状を呈する。遺物はまとまりを有することなく、ほぼ満遍なく出土している。

第89図939から961が出土遺物である。939は須恵器高杯の脚部。940は青磁碗で、外面に錦蓮弁文が施される。941から947は土師器杯で、すべてB形式(45頁参照)である。948から959は土師器小皿で、959はやや大振りで深い。960と961は瓦器碗である。体部下半に指頭圧痕を残し、痕跡程度の高台を有する。



第88図 A区第1号土坑実測図(1/40)

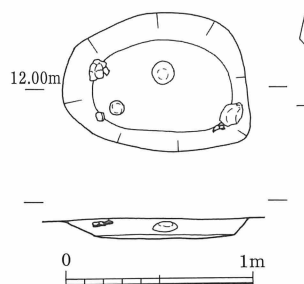


第89図 A区第1号土坑出土遺物 (1/3)

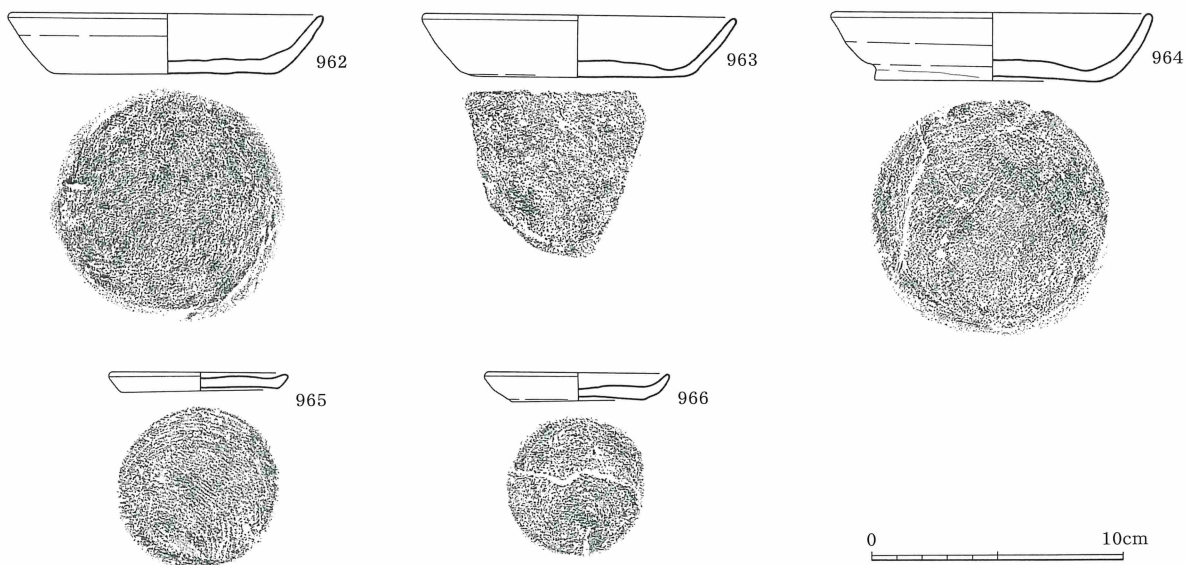
第2号土坑(SK-2) (第90図)

第1号土坑の南側にある、東西1.0m、南北7.5mの土坑である。深さは10cmで、第4号溝を切っている。

遺物は第91図の962から966である。962から964は土師器坏で、965と966は土師器小皿である。坏は、45頁で触れた浅いタイプの坏Bである。



第90図 A区第2号土坑実測図 (1/40)

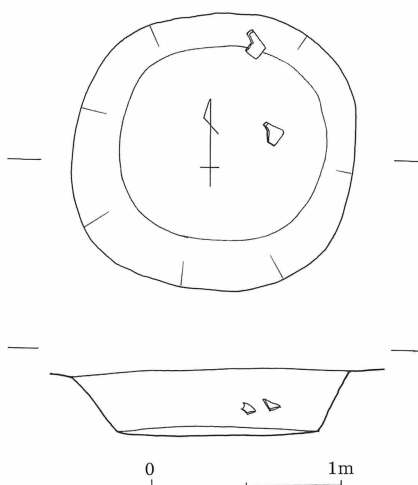


第91図 A区第2号土坑出土遺物 (1/3)

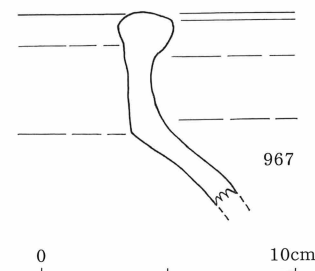
第3号土坑(S-321) (第92図)

後述する第7号溝の延長線上で確認された土坑で、直径1.5m、深さ35cmの円形である。

出土遺物は第93図967で、瓦質の甕口縁部である。15世紀～16世紀のものであり、館とは直接的な関係はない。



第92図 A区第3号土坑実測図(1/40)



第93図 A区第3号土坑出土遺物 (1/3)

第1号井戸(S-164)(第94図)

第3号、4号掘立柱建物の北側にある井戸である。今回の調査で確認された4基の井戸の中で、唯一木組みのある方形の井戸である。上部がやや崩れているが、復元すると一辺0.8mの方形となり、現状の深さは1.1mである。井筒は確認できなかった。四隅には支柱があり、その下部には横棧が渡され、縦板を押さえている。方形縦板組横棧型の井戸と考えられる。

遺物は、図化できない土師器の小片以外出土はなかった。

第2号井戸(S-380)

第1号堀と第2号堀の間で検出された井戸である。直径1.4mの円形の素掘りの井戸であるが、調査中壁が崩壊したため、深さは不明である。

遺物の出土はなかった。

溝(第95、96、98、100図)

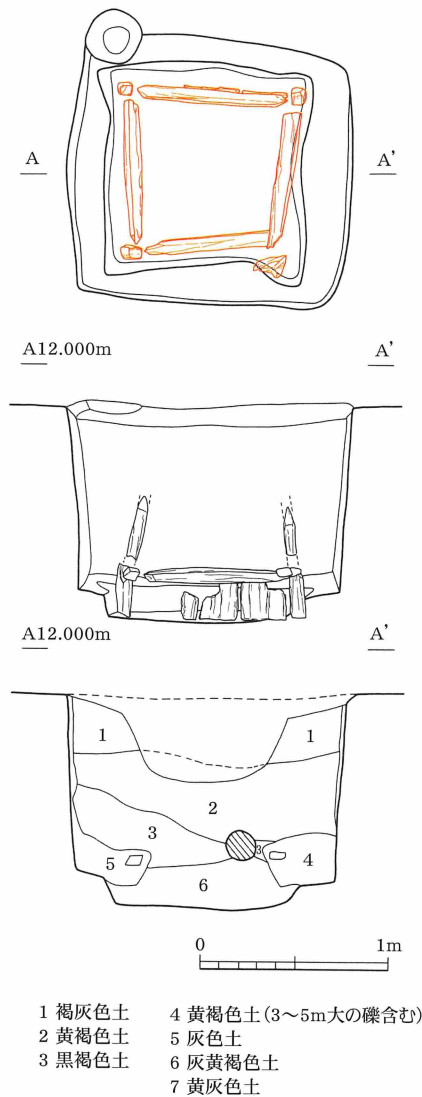
館内部では、中世の館に直接関わるかは不明であるが、溝が複数条確認されている。

第3号溝(SD-1)は、調査区北側で検出された幅最大1.8mで深さ0.15mの溝で、西側は浅くなって消えている。本来は、後述のB区の第10号溝につながっていた可能性が考えられる。第6号掘立柱建物に切られている。

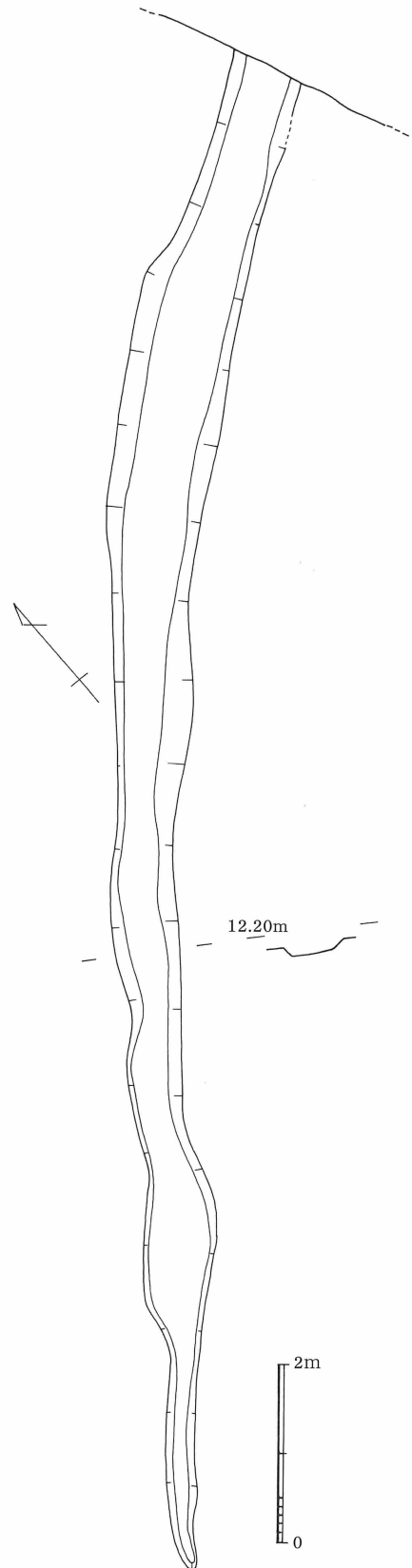
第4号溝(SD-3)と5号溝(SD-4)は平行しており、途中不明瞭な箇所があるが、館を東西に貫いている。

第6号溝(SD-2)は調査区東端で確認されたもので、南北に延びる溝である。周囲には浅い落ち込みも広がり、館のこの位置が、本来低湿地となり、排水施設として作られた溝であった可能性も考えられる。幅は2.5mで深さは0.25mである。

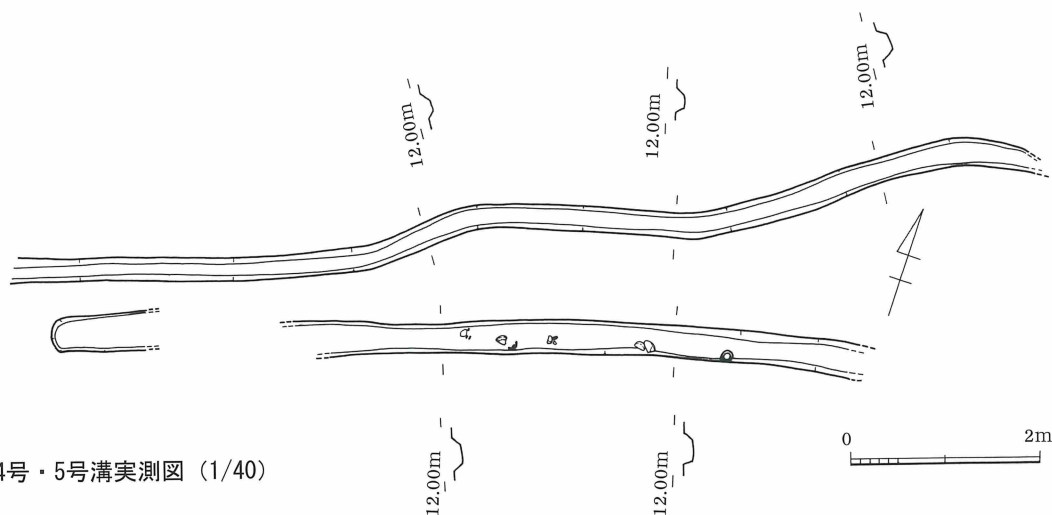
第7号溝(S-166)は、第1号堀を切っており、直接館に伴うものではない。周囲には同じ方向の溝が数条確認されており、館廃絶後の水田に係わる溝と考えられる。



第94図 A区第1号井戸実測図(1/40)



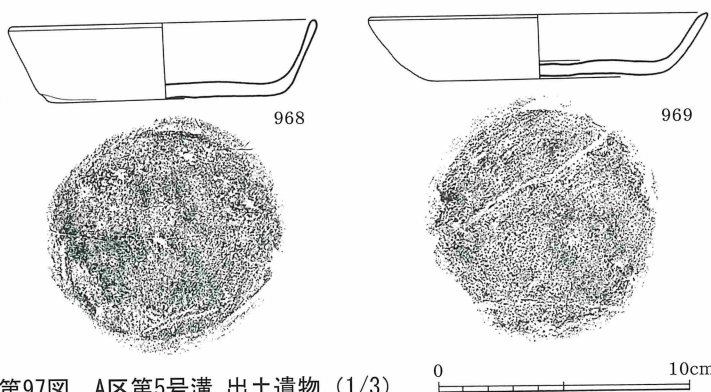
第95図 A区第3号溝実測図(1/80)



第96図 A区第4号・5号溝実測図 (1/40)

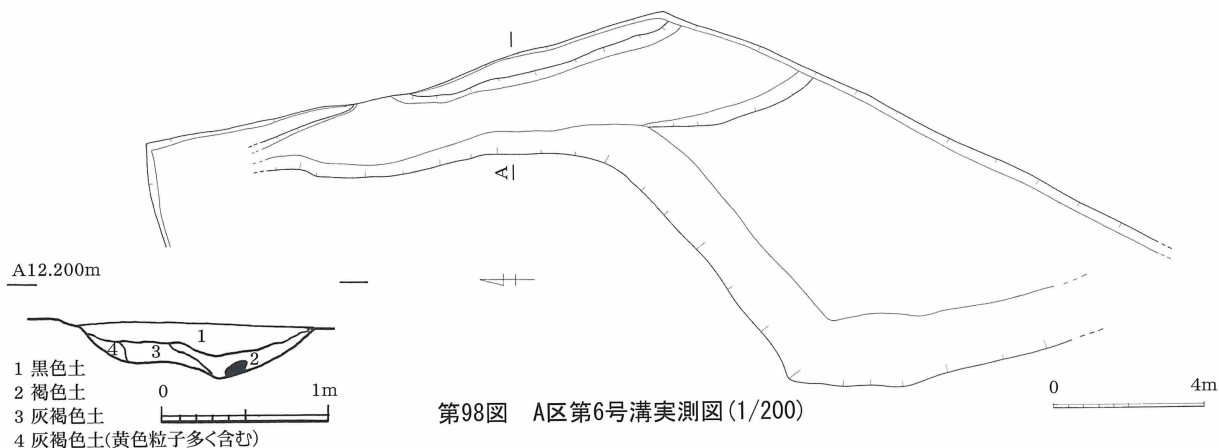
遺物は第5号溝、第6号、第7号で出土している。

第5号溝の遺物(第97図)968と967は坏で、口径の違いはあるが、いずれも坏B形式である。第6号溝からは第99図970から972が出土している。970は鑄蓮弁文の青磁碗、971は瀬戸焼の碗、972は瓦質土器火鉢で、菊花文のスタンプがある。970は13世紀であるが、972から見て、この溝の時期は15世紀代と考えられる。

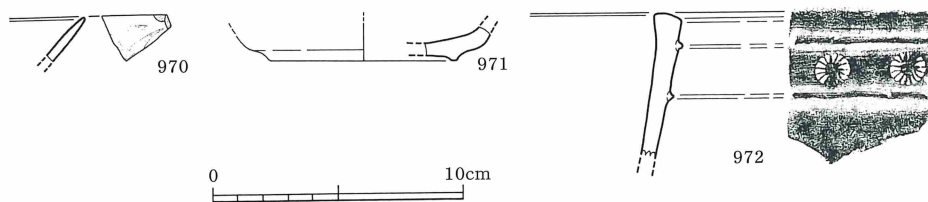


第97図 A区第5号溝 出土遺物 (1/3)

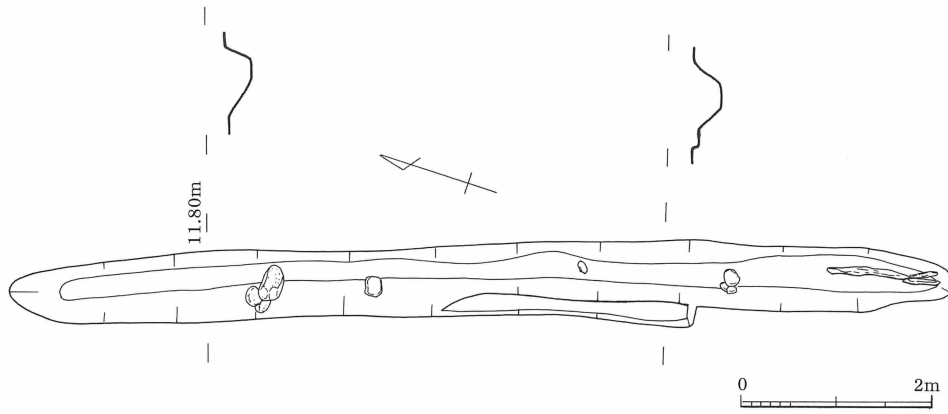
第7号溝からは第101図973の常滑焼甕が出土している。



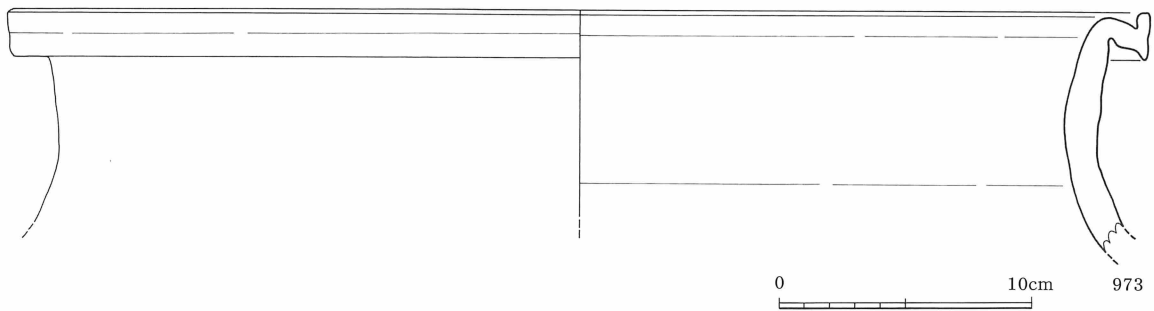
第98図 A区第6号溝実測図 (1/200)



第99図 A区第6号溝 出土遺物 (1/3)



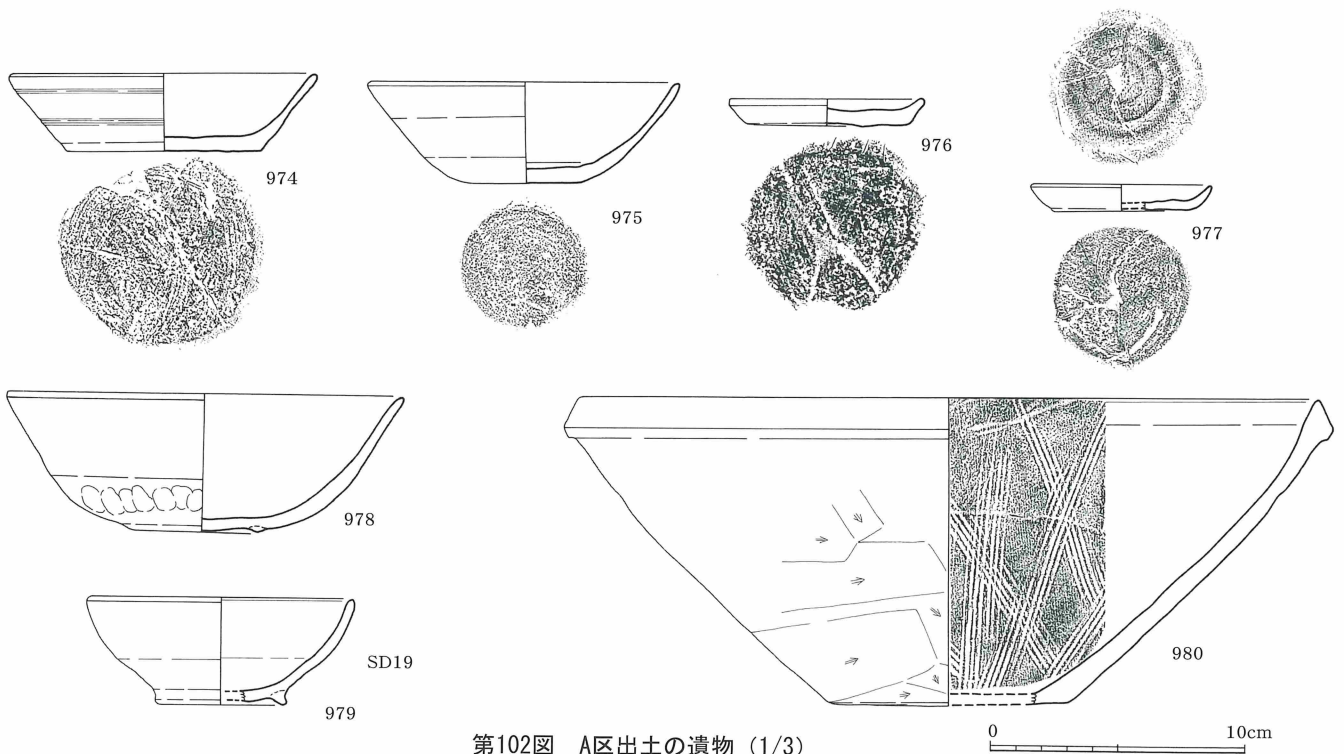
第100図 A区第7号溝実測図 (1/80)



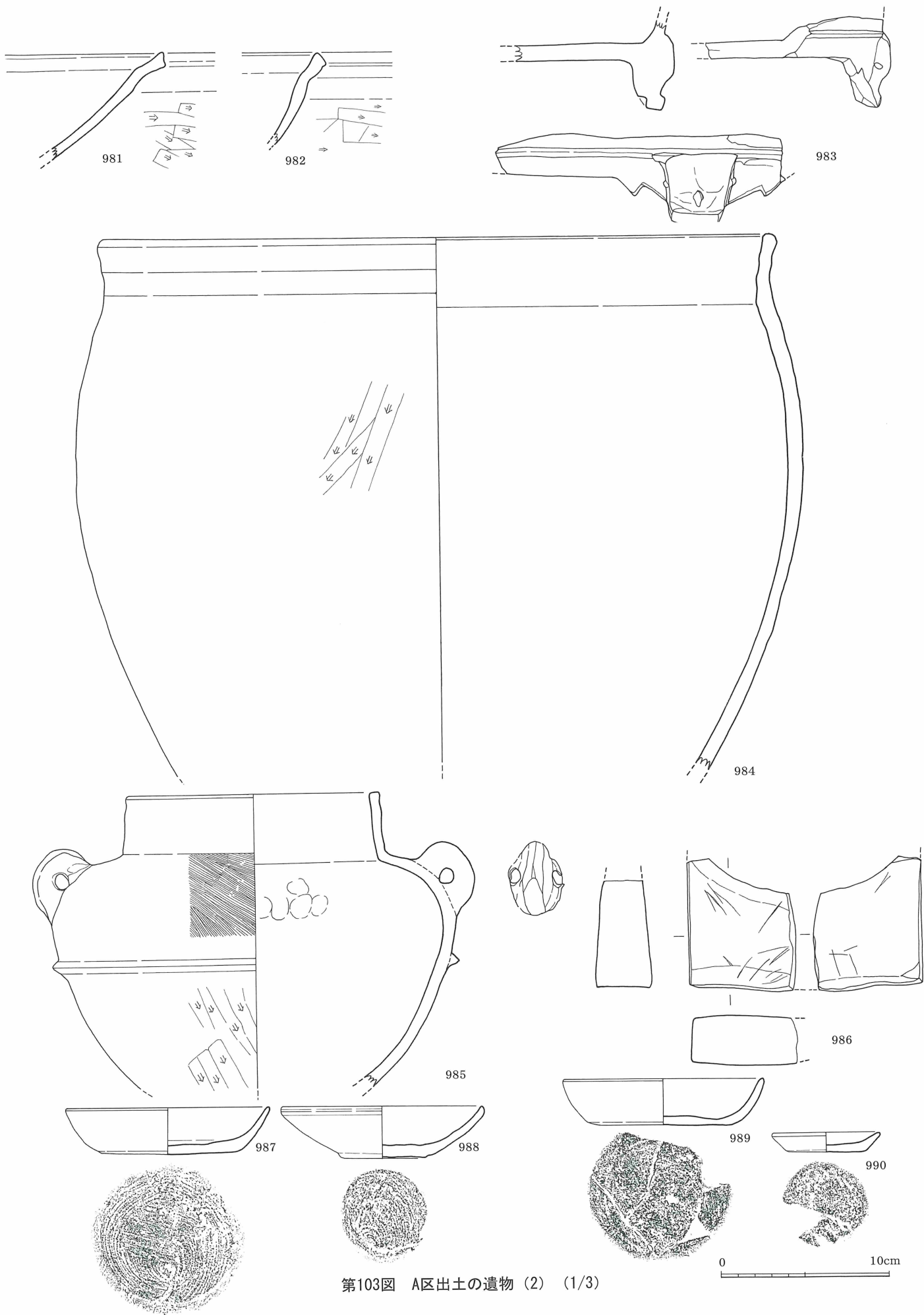
第101図 A区第7号溝 出土遺物 (1/3)

その他の出土遺物

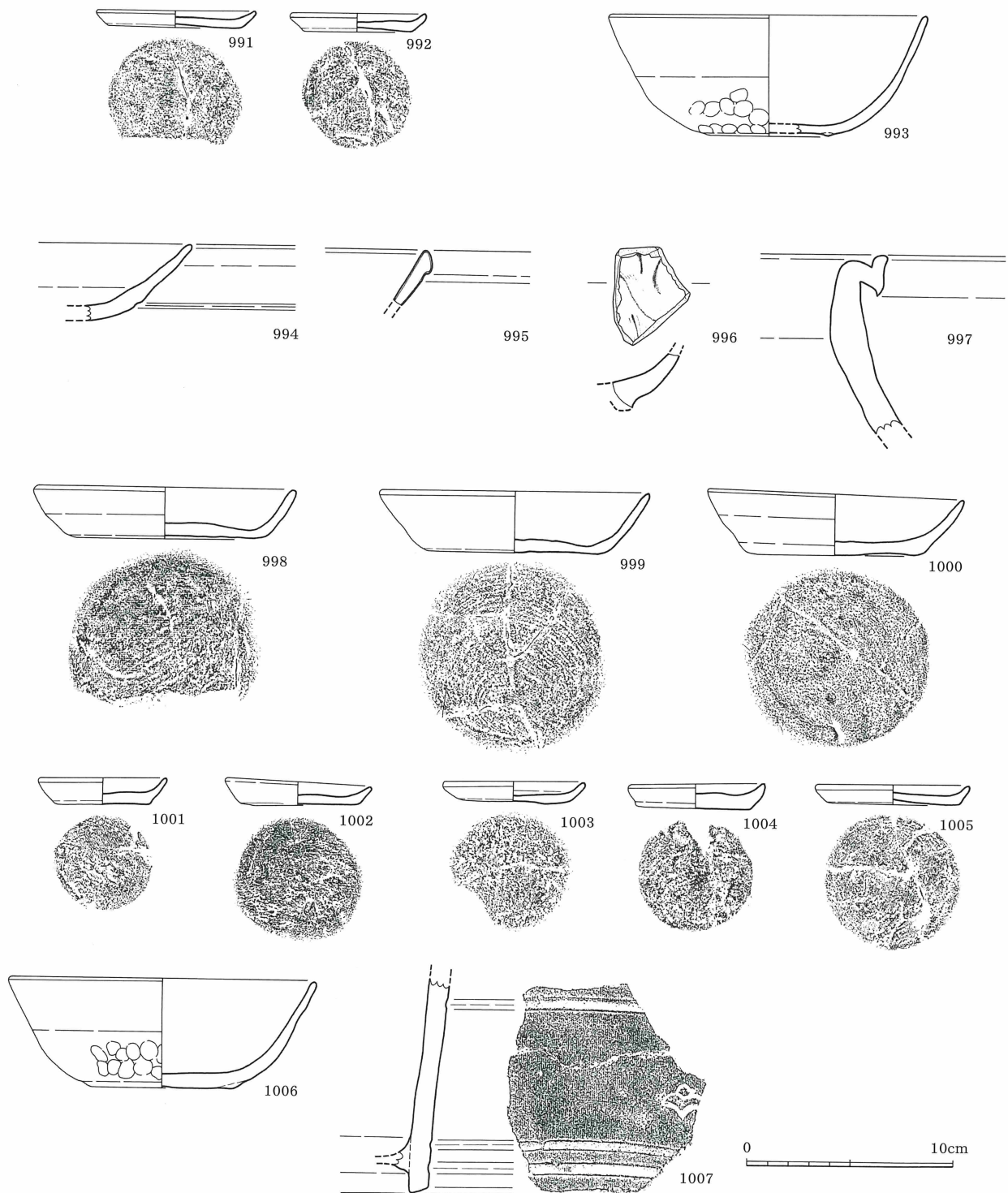
建物を形成しないピットや表土中から遺物が出土しているので、代表的なものを掲載する(第102～104図)。974から993はピット出土、994から1007は表土及び土層中からの出土。



第102図 A区出土の遺物 (1/3)



第103図 A区出土の遺物 (2) (1/3)



第104図 A区出土の遺物(3) (1/3)

974 と 975、987～989、999～1000 は土師器杯。976、977、990、1001～1005 は土師器小皿。978、993、1006 は瓦器碗。これらは館の時期である 13 世紀後半代のものである。一方、979 の瓦質の碗、980 の播鉢、981、982 の鍋、983、1007 の火鉢、985 の釜などは、15～16 世紀のもので、館廃絶後の何らかの活動の跡を示す遺物である。

b 集落跡

B区、C区、D区において、屋敷区画が確認された。また、F区では掘立柱建物跡が1棟検出されている。これらを一体のものとして集落跡として扱う。B区ではA区との境に第8号溝(SD-3)と第11号溝(SD-1)という2本の溝状遺構がある。第8号溝は、北側の調査区外から伸びていて、南端の屈曲部で溜井状の深まりを作りながら西側に折れ、浅くなって消滅する。近代の溝(S-1001)に破壊された可能性もある。第11号溝は、浅い溝状遺構でB区の区画に沿って曲がるが、古代の溝(第1号溝)に切られて消滅している。

一方D区との境には第9号溝(S-010)があるが、南北端とも浅くなって消滅しており、どのように屈曲するか不明であるが、南側では東側に折れる段落ちを形成しており、前記した第8号溝につながって南側を画す溝を形成していた可能性が高い。よって、このB区で確認された屋敷区画は、東西幅65m、南北幅 $65\text{m} + \alpha$ の大きさに復元できる。

内部からはその区画の南西部を中心として柱穴が密集しており、掘立柱建物が複数建っていた可能性があったが、2棟しか復元できなかった。実際にはさらに多くの建物が建っていたと考えられる。また、溝が三条確認されたが、屋敷区画に伴うものかどうかは確認できなかった。

C区は、東西65m、南北40～50mの長方形に浅い溝が巡っている。ただし、北西角部と北東角部は陸橋を形成しており、南東部は攪乱によって不分明になっている。内部からは、掘立柱建物1棟が確認されたが、他に明確に屋敷区画に伴う遺構は確認できなかった。

D区は、屋敷区画の南東角部のみが調査対象地であったため全形は不詳であるが、南辺から東辺には第9号溝で、B区と境をなす。内部には柱穴があるものの、調査範囲内では建物の復元はできなかった。

以上の3区画は、それぞれが巡らせる区画溝はお互いに共有せず、その間には空閑地が存在する。その部分は現状でも道路ないしは畦として利用されており、中世段階でも道として機能した空間であったのではなかろうか。

第151図の土層断面図は、D区とE区の間道の状況がわかるものである。道の部分(幅 $2.2\text{m} + \alpha$ ・・・現在の水路によって南側は不明)のみD区とE区より10cm近く高くなっている。一度、近世と考えられる第8層の水田により2m近く覆われるが、その後再び石を積んで道を形成している。

F区は、A区からD区の集落跡とは、E区とG区で確認された水田跡(谷水田)を挟んで対岸に位置する。広がり等は不明であるが、同一の集落を形成していたと考えられる。

< B区 >

溝で囲まれた、南北約18+αm、東西約15mの区画である。北側（川側）は調査区外となる。

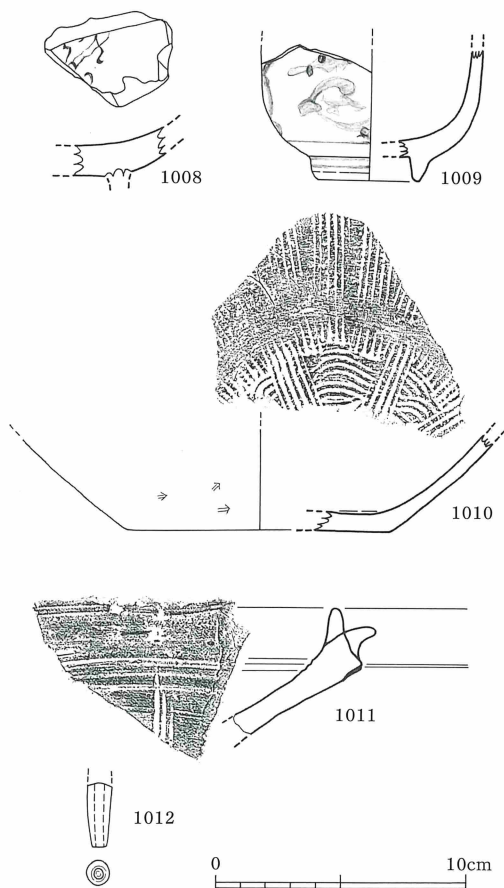
遺構

第8号溝 (SD-3、SD-6)

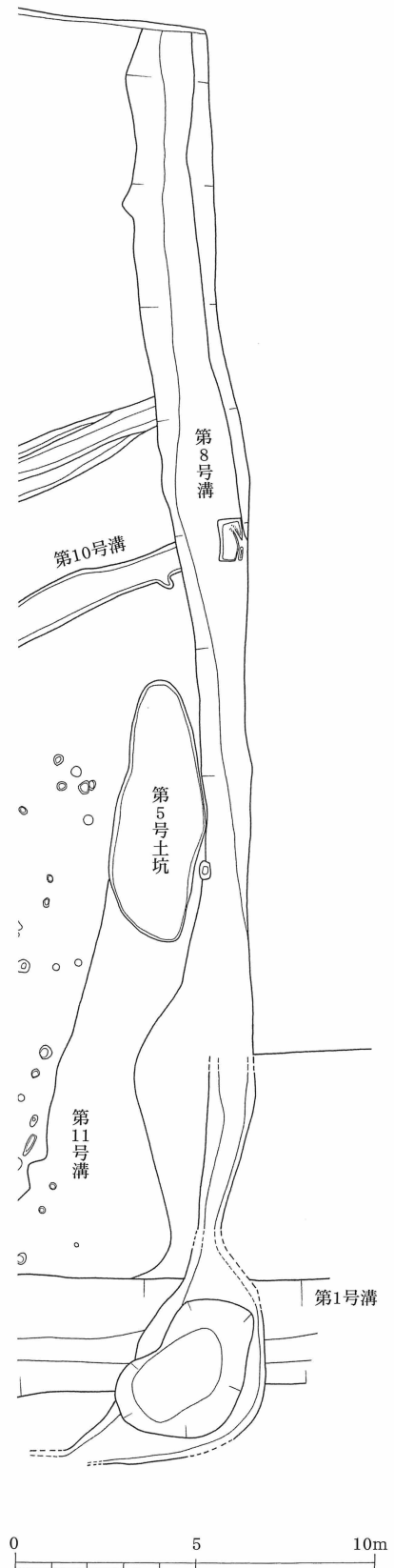
A区との境に南北に延びる溝で、古代の溝第1号溝に重なる部分で溜井状となり西に曲がるが、東西に延びる部分は浅くなっており検出できなかった。南東角部の溜井と同様の落ち込みが、第1号溝の中にあリ (S-009)、これも第8号溝の一部と想定される。しかし、D区との境である第2号溝との繋がりは不明である。第148図の土層断面図を見ると、複数回の掘り直しが確認できる。

出土遺物は第106図1008から1012である。1009は陶胎染付、1008は龍泉窯青磁碗で、見込に花文を描く。1011は備前焼の播鉢。1010は瓦質の播鉢で、底面に花文状のスリ目を施す。1012は素焼きの土錘。

上層から出土した1009は、埋没の過程で埋まったものである。機能していた時期は1010の存在から15~16世紀と考えられる。



第106図 B区第8号溝出土遺物 (1/3)



第105図 B区第8号溝実測図 (1/200)
土層断面図については第148図参照

第9号溝(S-010) (第107図)

D区との境を区切る溝である。南北方向に伸び、南端で東へ曲がる。しかし、浅くなり東西方向の検出はできなかった。幅は1.4m、深さは最大で0.1mである。

出土遺物は第103図1013である。灰釉の陶器皿。

第10号溝(SD-1) (第109図)

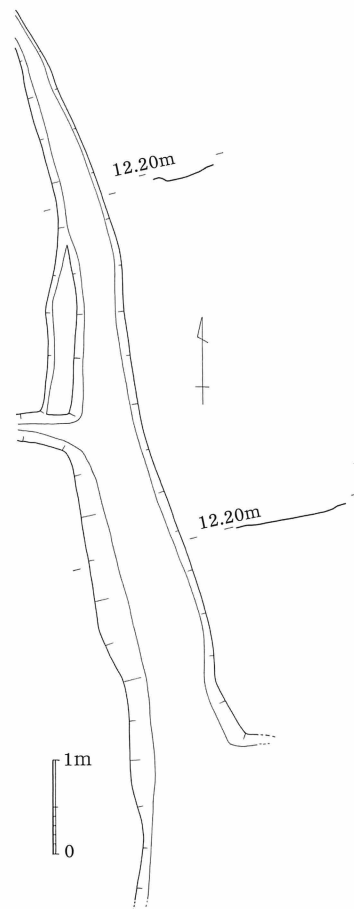
B区を北東から南西に伸びる溝で、東側は第8号溝に切られており、西側はB区中央部で浅くなって消えている。幅1.3m、深さは最大で0.2mである。図示できる遺物の出土は無かった。

第11号溝(SD-4)

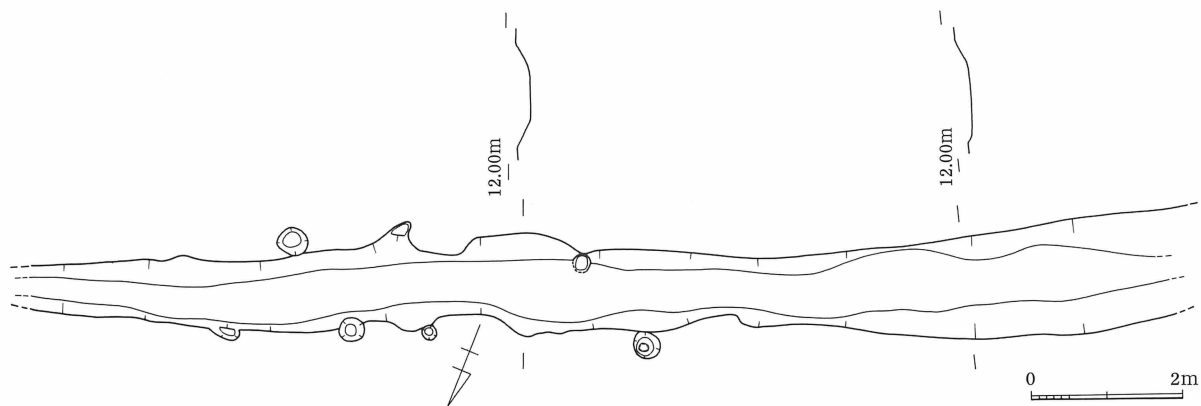
B区の東側から南側にかけて、第8号溝の内側に沿うように屈曲して伸びる浅い溝である。

第8図では、第8号溝に重なるように幅広く、浅く掘られているのがわかる。調査では、古代の第1号溝の掘削を先行したために、第11号溝のプランは平面的には十分把握できなかった。

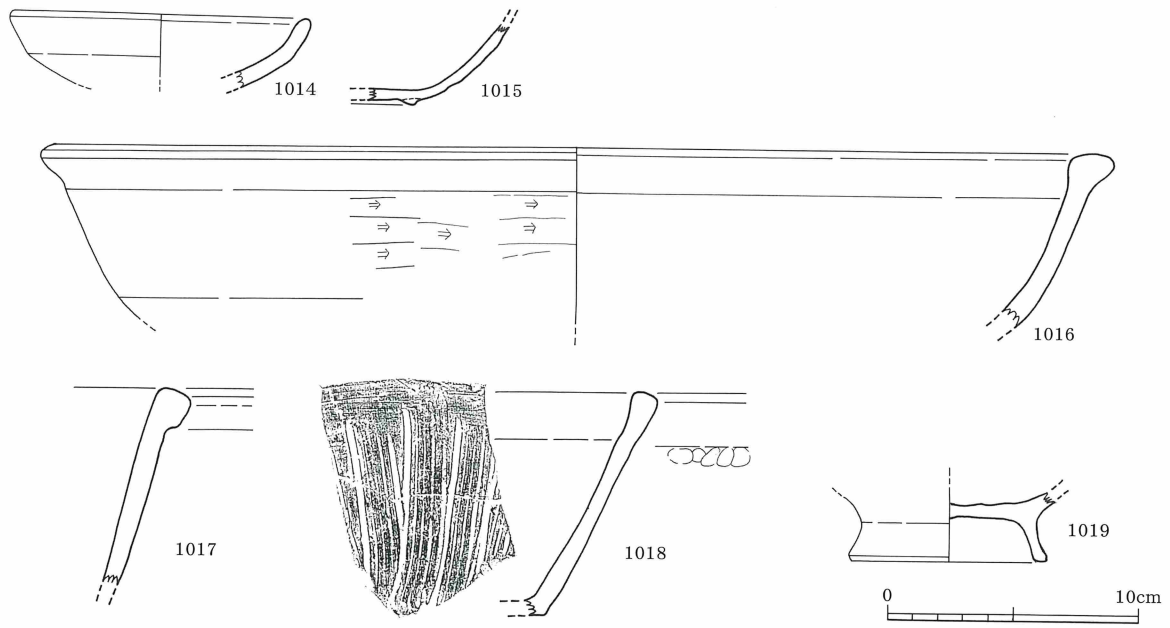
出土遺物は第110図1014から1019である。1014は瓦質の碗、1015は瓦器碗である。1016と1017は瓦質の鉢、1018は瓦質のすり鉢である。1019は土師質の高台付きの坏である。1016から1018は15世紀後半～16世紀、1019は10世紀のものである。



第108図 B区第9号溝出土遺物 (1/3) 第107図 B区第9号溝実測図 (1/80)



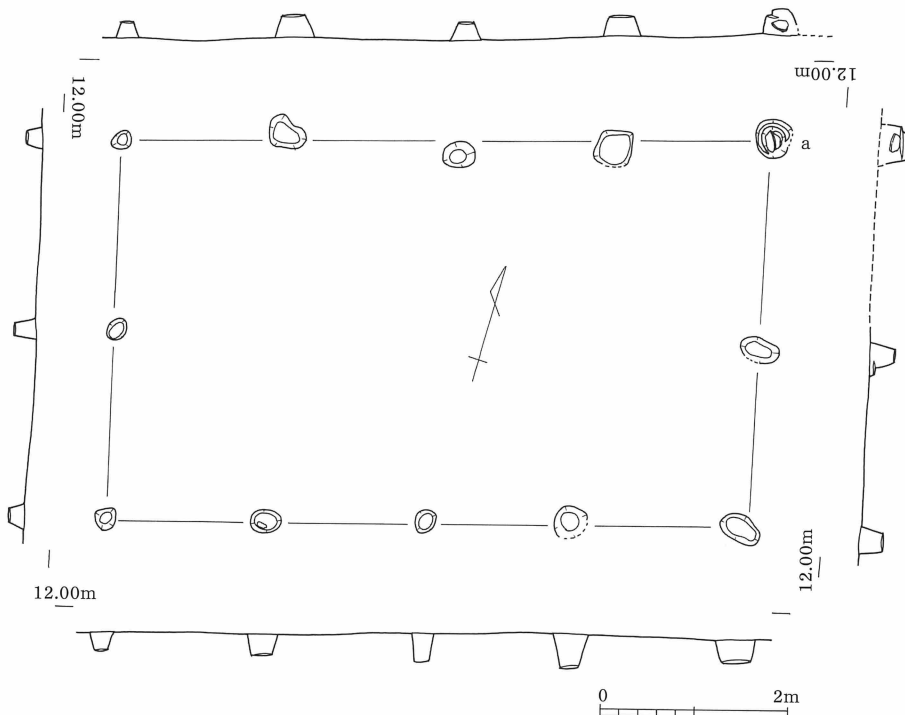
第109図 B区第10号溝実測図 (1/100)



第110図 B区第11号溝出土遺物(1/3)

第8号掘立柱建物

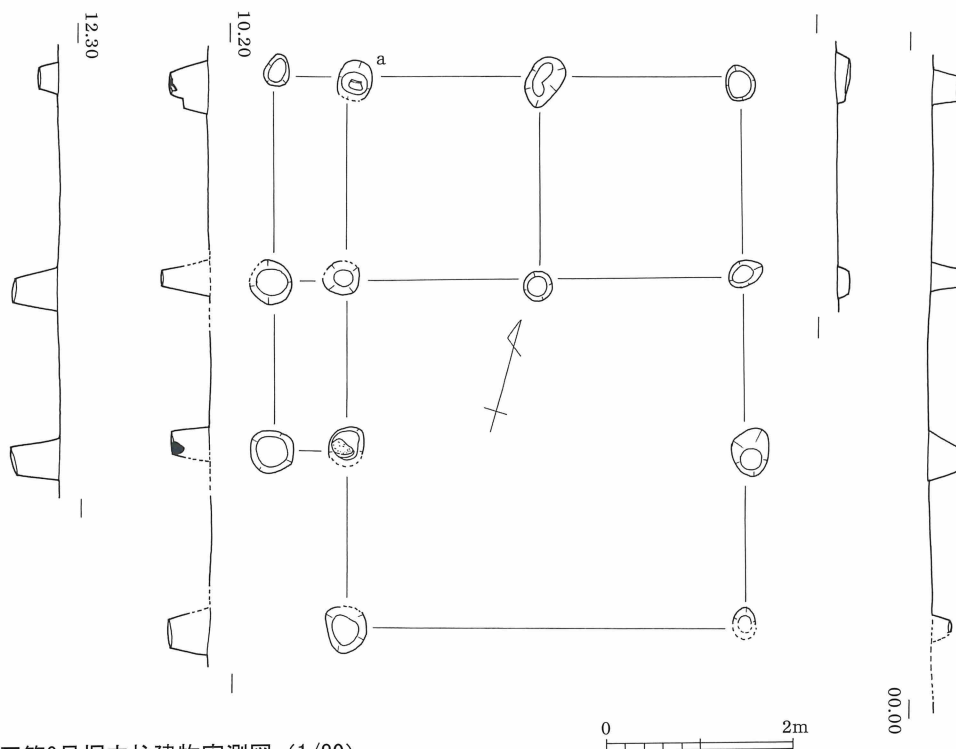
B区中央よりやや西側に位置する2間×4間(4.0m×6.8m)の掘立柱建物である。西側から2列目には束柱と思われる柱穴がある。出土遺物はaのピットから出土した第120図1041の瓦質の釜である。体部中位に最大径を持つ。



第111図 B区第8号掘立柱建物実測図(1/80)

第9号掘立柱建物

B区のほぼ中央、第8号掘立柱建物の東側に建つ2間×3間(4.2m×5.8m)の掘立柱建物で、西側には庇を有する。内部には束柱を示す柱穴がある。第8号掘立柱建物との間で柱通りがそろっており、同一時期の所産であることを示している。出土遺物はaのピット底部から出土した第119図1039の瓦質の釜である。

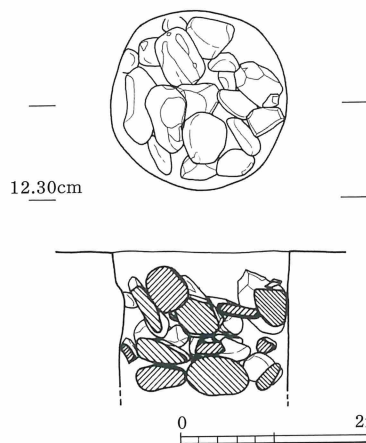


第112図 B区第9号掘立柱建物実測図(1/80)

第3号井戸(S-011)

B区の北西部で確認された直径1.8mの素掘りの井戸で、内部には人頭大の礫が堆積していた。調査では危険なため、底までの掘り下げは行わなかった。

出土遺物は細片のみで図示できるものは無いが、中世の遺物が出土している。



第113図 B区第3号井戸実測図(1/80)

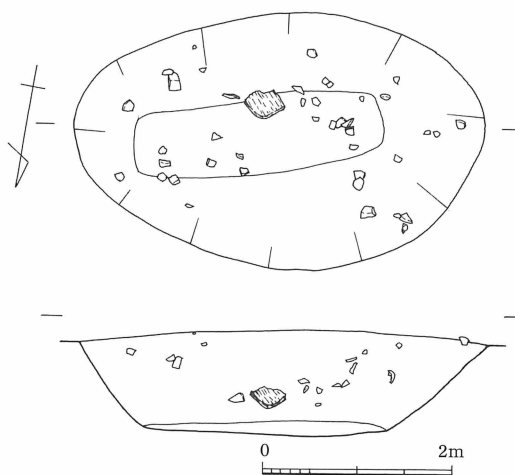
第4号土坑(S-009)(第114図)

古代の水路(第1号溝)中に掘られた土坑であるが、堀形は明瞭ではない。また、第8号溝又は9号溝との関係を有すると考えられるが確証は得られなかったが、溜井である可能性が高い。

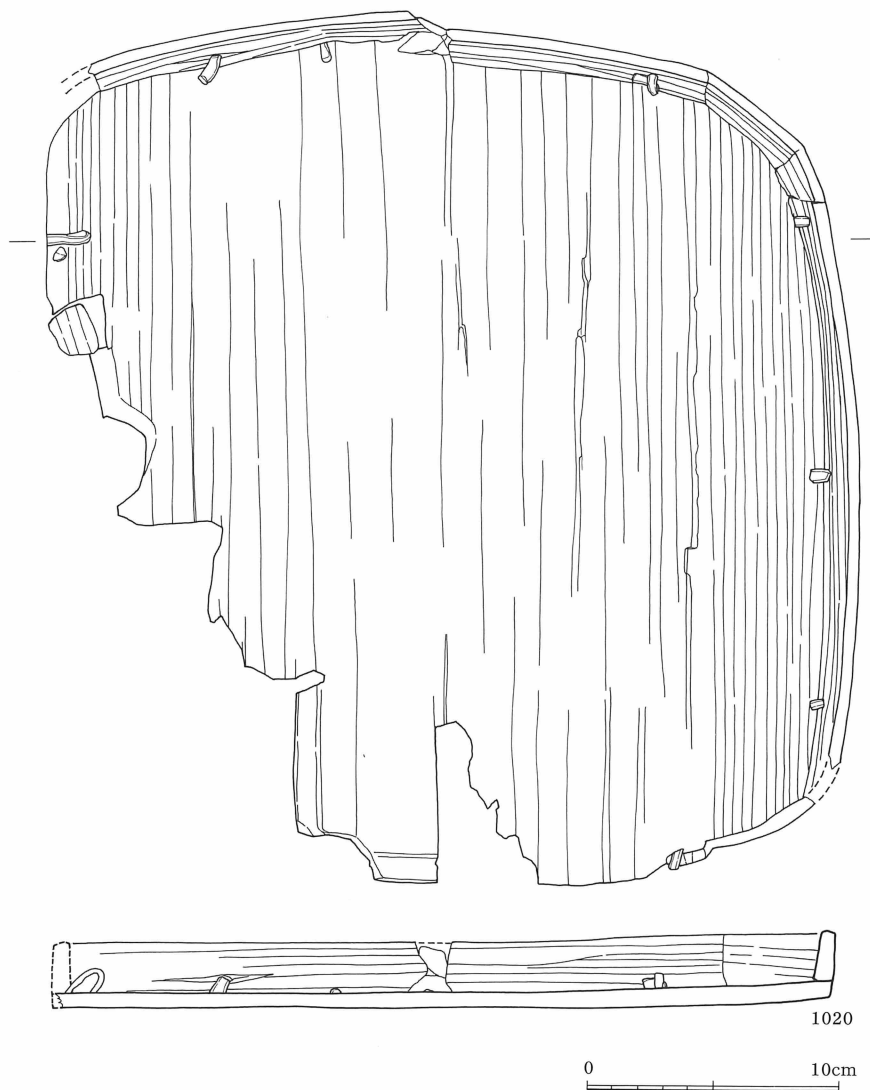
土坑は長軸4.4m、短軸2.8mで、深さ1.2mほどである。内部からは、瓦質土器とともに完形の折敷や漆塗りの椀(小破片)が出土している。

第115図1020から第116図1032が出土遺物である。1021と1022は龍泉窯青磁碗で、見込に花文を施す。1023から1032は瓦質土器で、1023は火鉢、1024から1027は播鉢、1028と1031はコネ鉢、1030は鍋、1032は茶釜、1029は器種不明である。これらは15世紀後半を中心とする時期のものである。

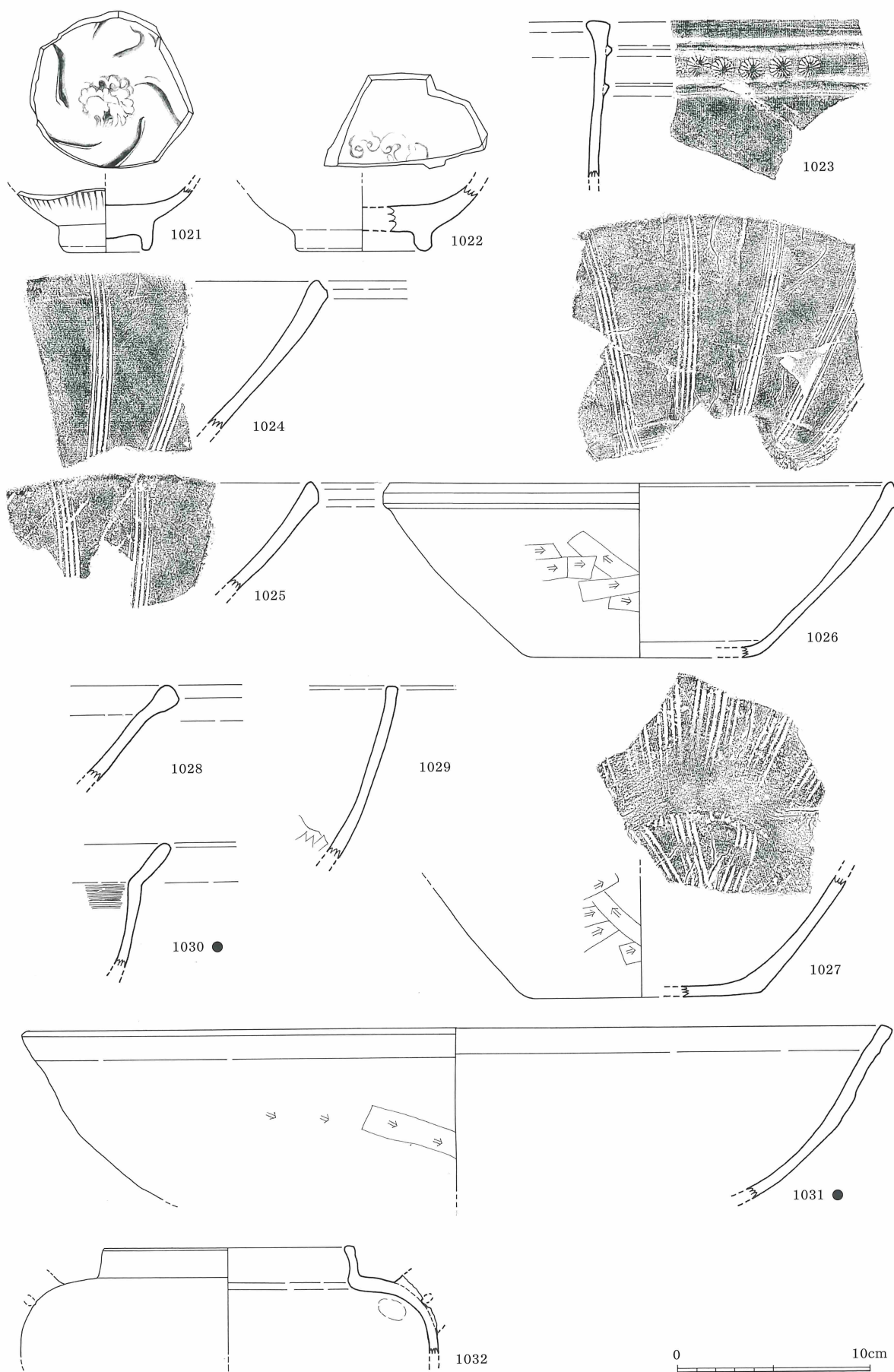
第 115 図 1020 の折敷は出土時にはほぼ完形で、高さ 2.5cm の縁を巡らせる。一辺 32～35cm のもので、四隅は丸く収める。底板と縁は幅 5mm ほどの皮と思われる紐で一辺に 3 箇所ずつ結びつけられている。底板の厚さは 0.6cm である。



第114図 B区第4号土坑実測図 (1/80)



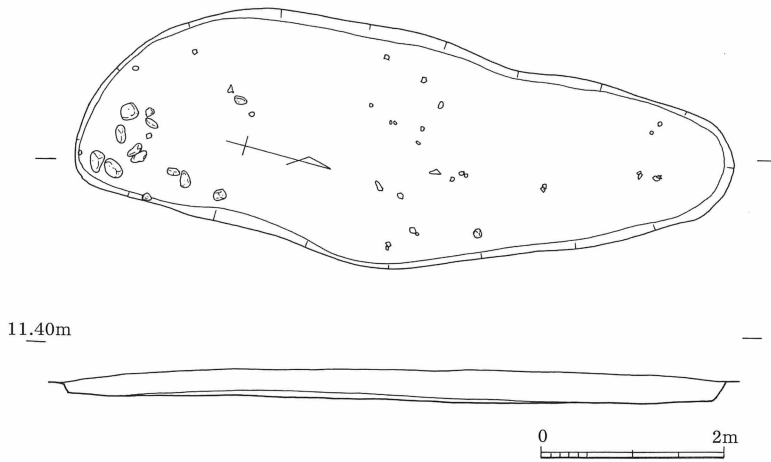
第115図 B区第4号土坑 出土遺物 (1) (1/3)



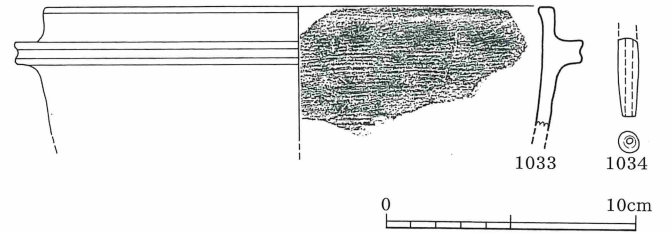
第116图 B区第4号土坑出土遺物(2) (1/3)

第5号土坑 (SX1) (第124図)

第11号溝に切られて確認された土坑で、南北7.0m、東西2.6mの長楕円形を呈する。出土遺物は第118図1033と1034である。1033は土師質の羽釜で、口縁下に鏝が巡る。1034は素焼きの土錘。1033は13世紀前後のものである。



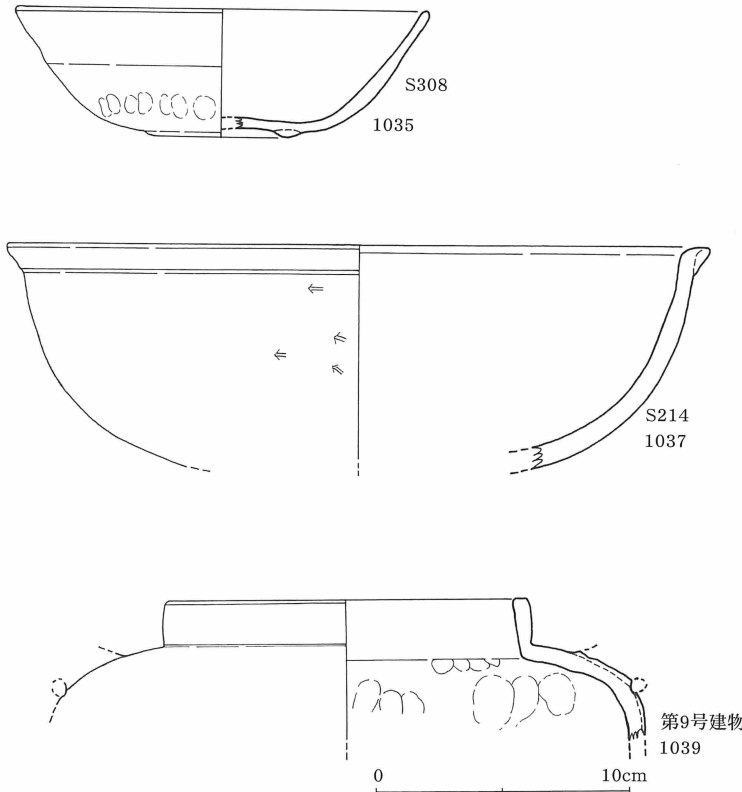
第117図 B区第5号土坑実測図 (1/80)



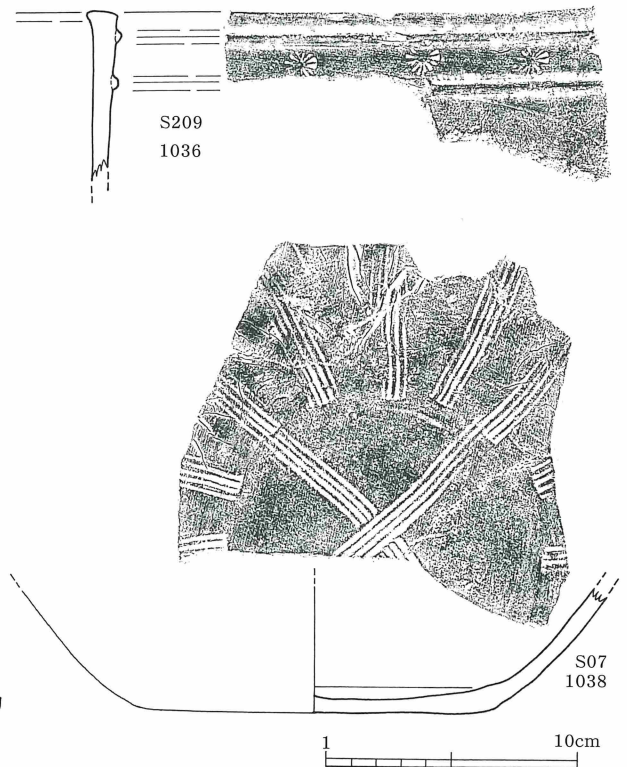
第118図 B区第5号土坑出土遺物 (1/3)

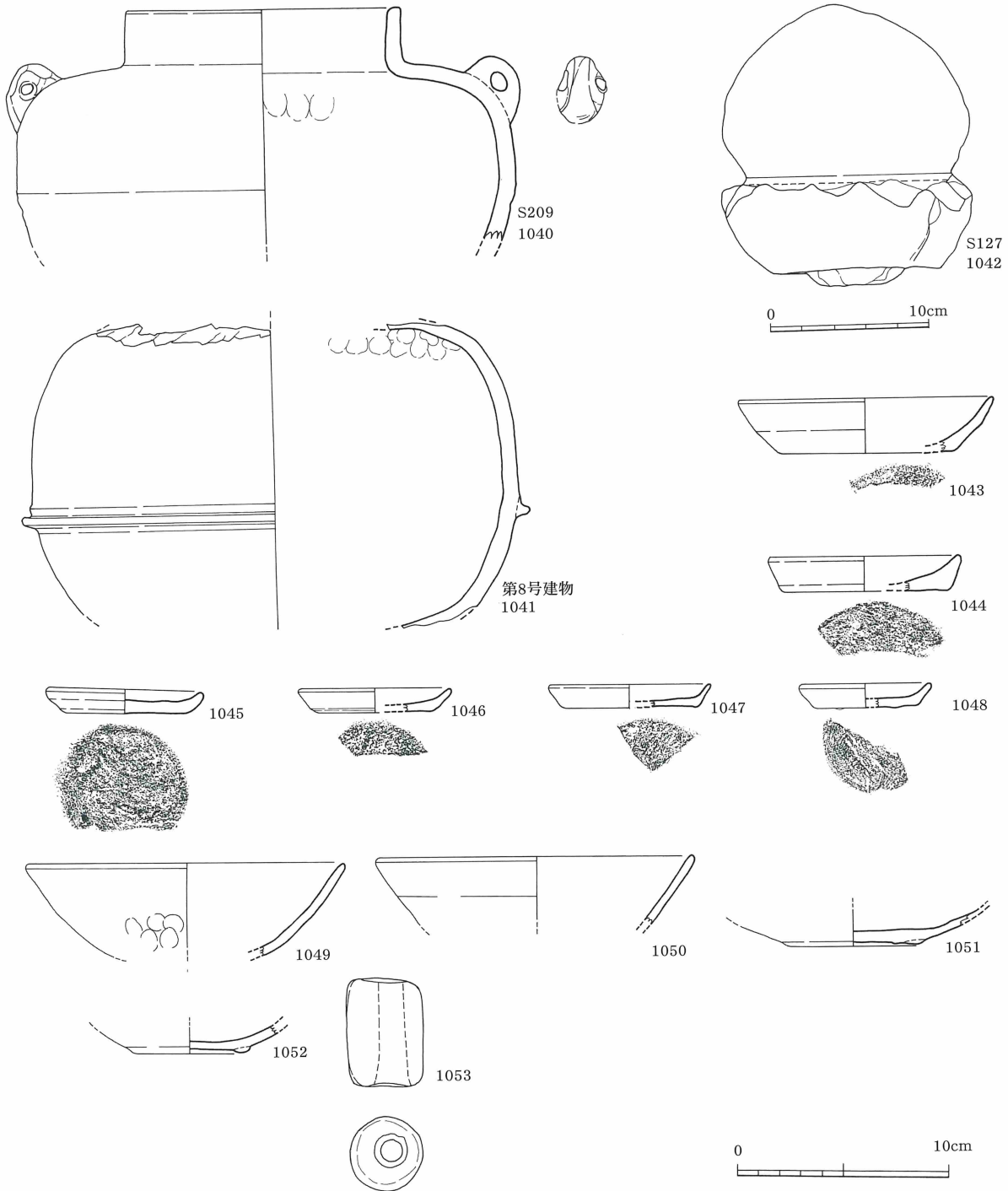
その他の遺物

B区は多くのピットが検出された。それらのピットから遺物が出土しているので、ここで表採資料と合わせて説明する。第119図1035から第120図1053のうち、1039は第9号掘立柱建物、1041は第8号掘立柱建物の柱穴から出土している。S番号を付しているもの以外は表土等からの出土である。



第119図 B区その他の出土遺物 (1) (1/3)





第120図 B区その他の出土遺物 (2) (1/3)

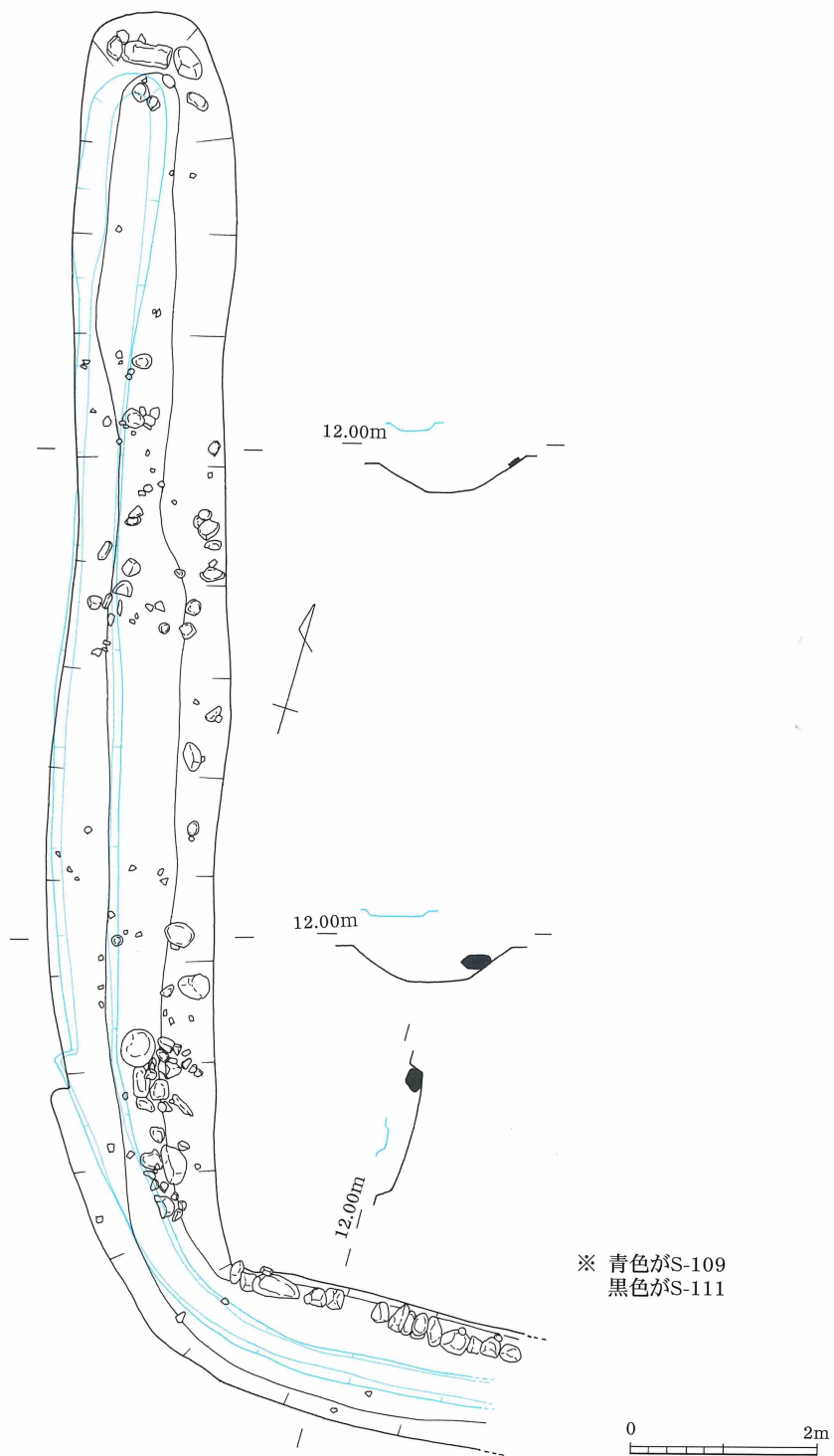
< C区 >

浅い溝で囲まれた、南北約 25m、東西約 40m の区画である。南東部が一部攪乱により不明確となっている他は、おおむね全体が把握できている。

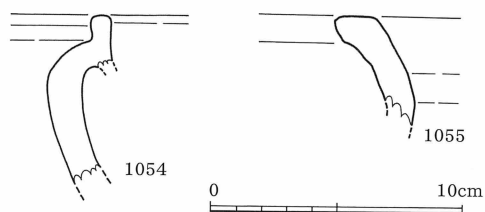
第 12 号溝 (S-109, 101)

C 区の西側から南側を巡る溝である。南北方向に伸びる部分 (E 区との境) については、後世の水田造成により深く削られており、幅 1.5m で深さは 0.2m しか残っていなかった。本来はさらに 0.5m ほど深かったと考えられる。溝の内側には人頭大の礫が並べられていた。北側は溝が途切れるので、ここに入り口が存在した可能性がある。東西に延びる部分は、溝跡が拡幅して水田に利用されており本来の溝幅は不明であるが、下端に残された本来の溝からして、幅 2.0m で深さは 0.7m ほどであったことが推測される。

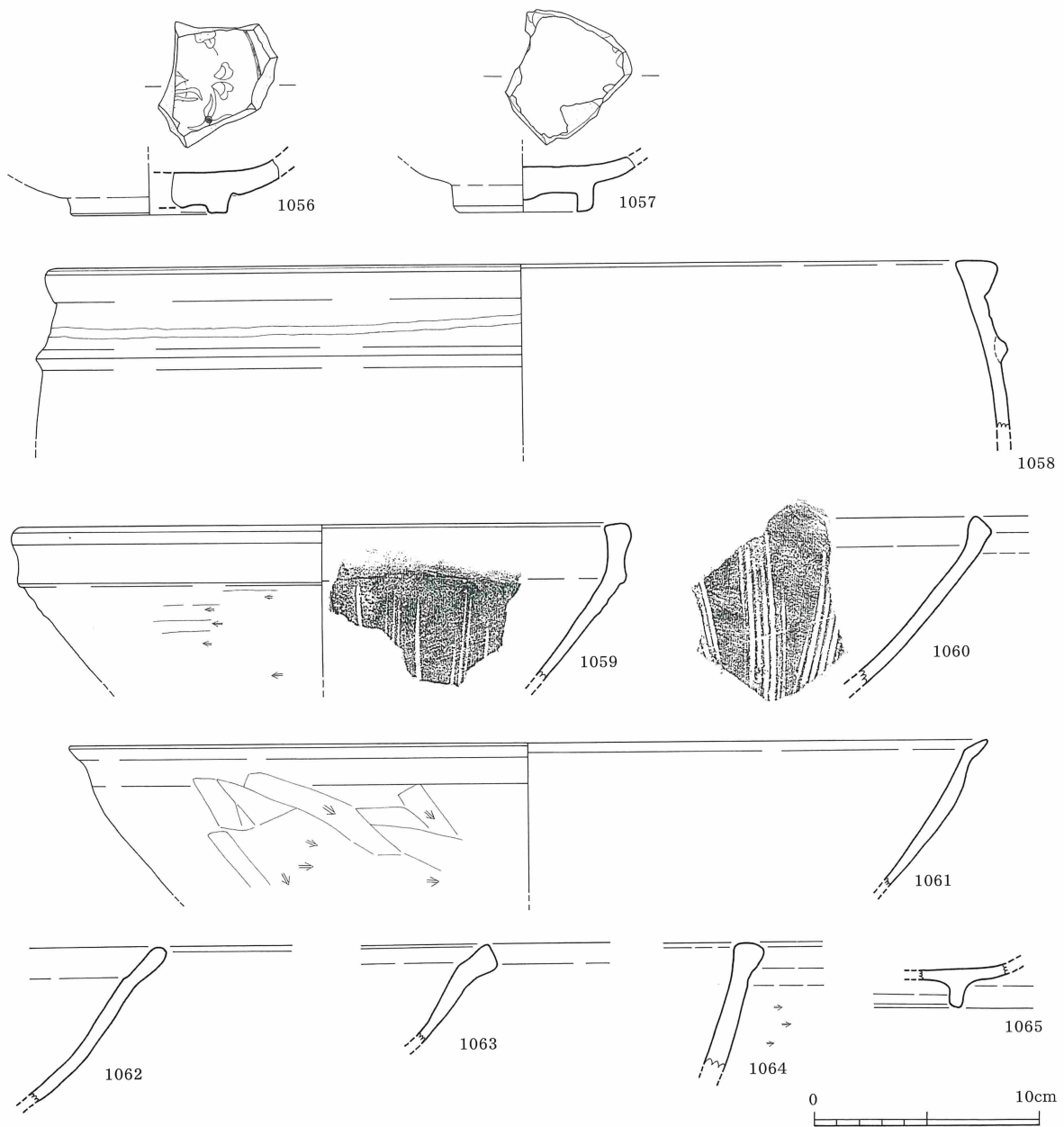
出土遺物は第 122 図 1054 から第 123 図 1065 である。



第121図 C区第12号溝 (S-109 S-111) 実測図 (1/80)



第122図 C区第12号溝 (S-109) 出土遺物 (1) (1/3)

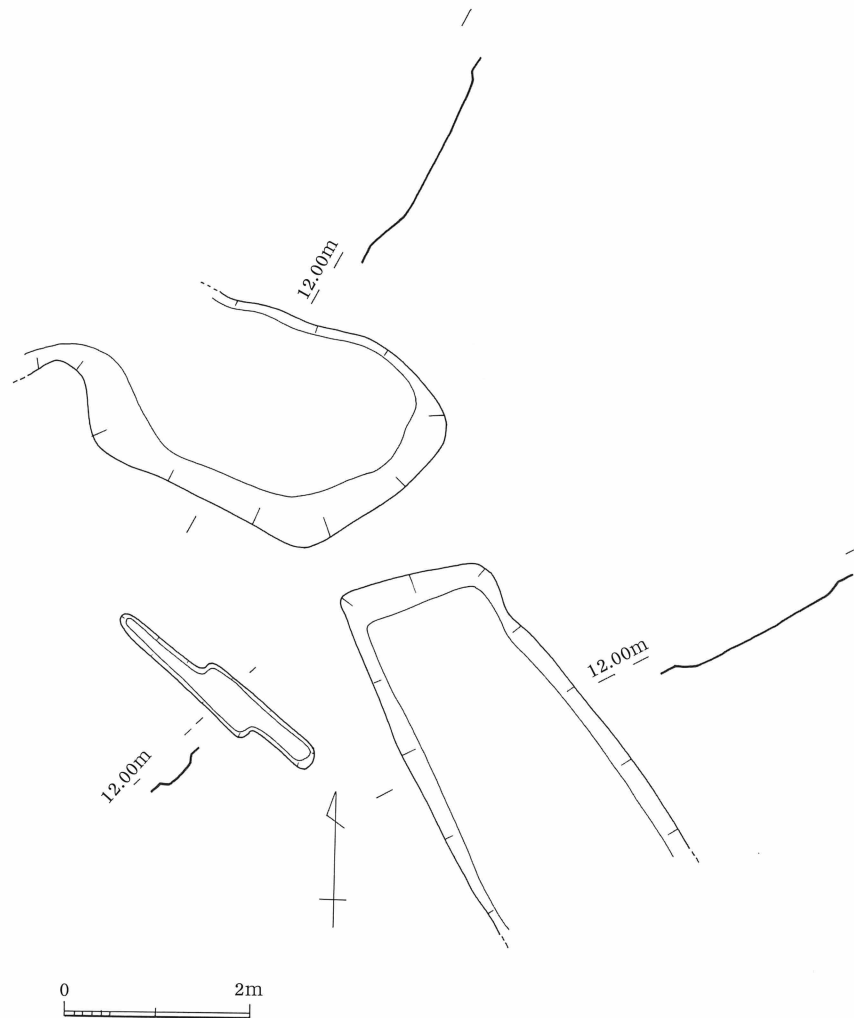


第123図 C区第12号溝(S-111)出土遺物(2) (1/3)

1056 と 1057 は龍泉窯青磁碗、1058 から 1065 は瓦質土器で、1058 は火鉢、1059 と 1060 は播鉢、1061 から 1064 は鍋である。1065 は鉢の底部か。これらは 15 世紀後半を中心とする時期のものである。

第13号溝

C区の北側から東側を巡る溝で、本来は第12号溝と一体となって、C区を巡っていたと考えられるものである。北東角部に陸橋部が認められ、ここに入りの一つがあったことがわかる。溝は、南北方向の部分では幅1.7mで深さは0.2mあるが、東西に延びる部分では、近代～現代の溝(第1002号溝)によって北側が削られており、本来の幅はわからない。また、北西部の状況も水田造成に伴う掘削によって不明となっている。



第124図 C区第13号溝(部分)実測図(1/80)

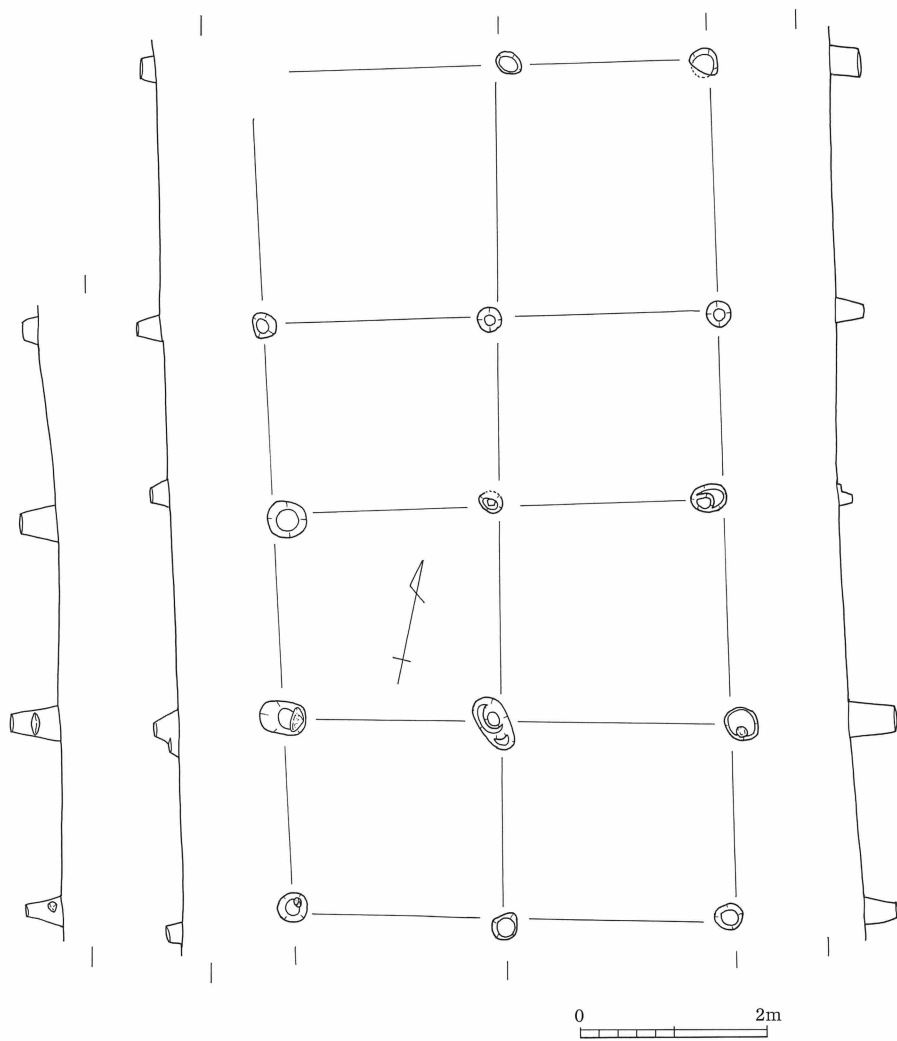
第10号掘立柱建物

C区では唯一確認された掘立柱建物である。2間×3間(4.8m×9.0m)で、柱は総柱となる。また、北側にもう1間伸びる可能性もある。

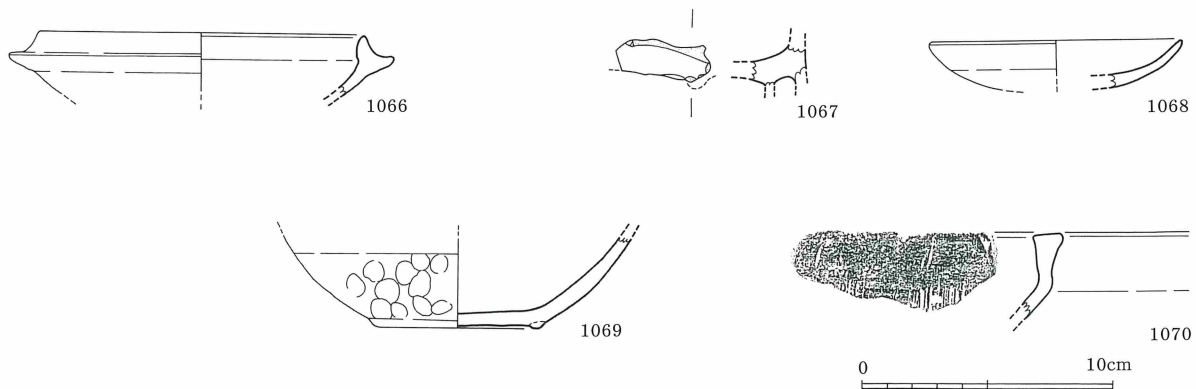
遺物の出土はない。

その他の遺物

建物を構成しないピットなどから遺物が出土しているのでここで取り上げる。第126図1066から1070がそうである。1066は須恵器坏身、1067は青磁の香炉か。1068は白磁の皿。1069は瓦器碗。1070は瓦質の播鉢である。



第125图 C区第10号掘立柱建物实测图 (1/80)



第126图 C区柱穴等出土遺物 (1/3)

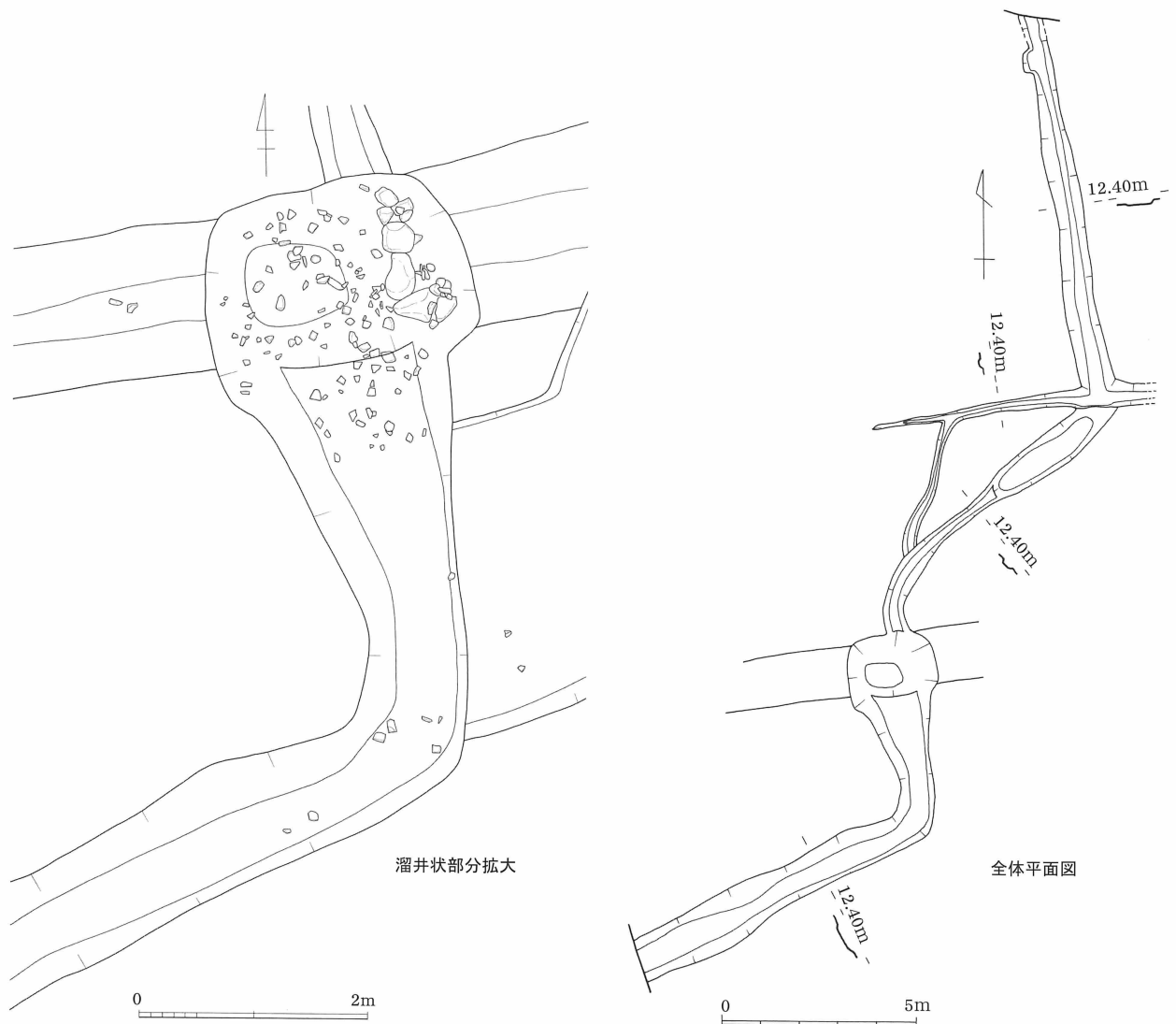
<D区>

D区は想定される区画の約20%しか調査が及んでおらず、調査した部分は区画の南東隅部にあたる。この南東隅部には、複数の溝が錯綜しており、水田に排水するための水路と考えられる。それらの溝の内側、すなわち北側はピットや土坑があり、居住域であったことを推測させるが、建物の検出には至らなかった。

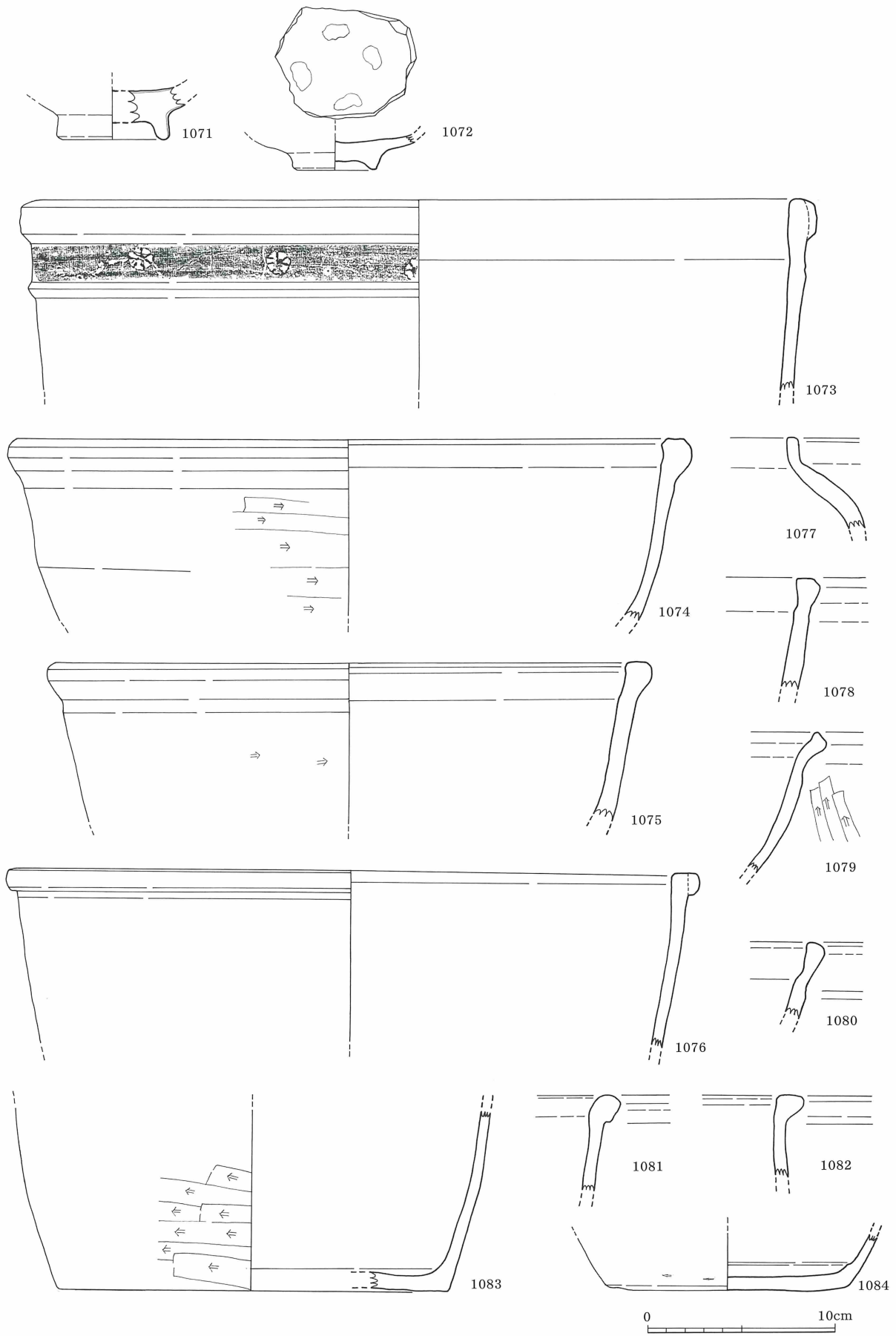
第14号溝 (S-005)

調査区の西側から東進し、途中で北向きに方向を変え、一度クランクして北進する溝で、古代の溝第1号溝と重なる部分で溜井状に深くなる。平均幅1.0mで深さは約5cmである。遺物は主に溜井状になった部分から出土している。

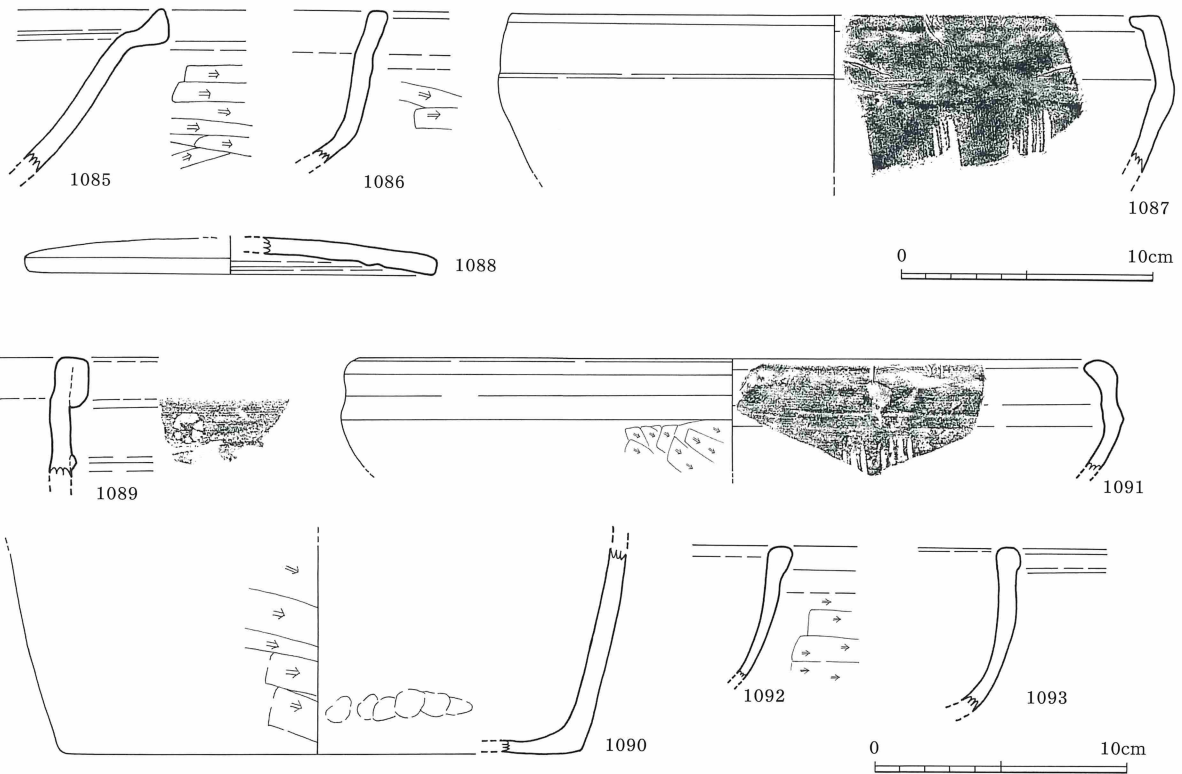
出土遺物は第128図1071から第129図1093である。1071は青磁碗、1072は見込に4箇所砂目を有する陶器碗。1073から1093は瓦質土器である。1073から1084は鉢類で、1073や1076は深鉢、1079や1080はコネ鉢になると思われる。1085は口縁部が折れ、端部をつまみ上げる鍋類。1087はすり鉢、1088は蓋である。1089と1090は火鉢、1091は播鉢、1092と1093は鉢。



第127図 D区第14号溝実測図(1/60)



第128図 D区第14号溝出土遺物(1)(1/3)



第129図 D区第14号溝出土遺物(2) (1/3)

第15号溝 (S-107)

第14号溝に切られる形で検出された溝で、幅1.2m、深さは約5cmである。古代の第1号溝を切って北に延びるが、浅くなって終わる。

遺物は第132図1096で、瓦質土器の火鉢である。

第16号溝 (S-006)

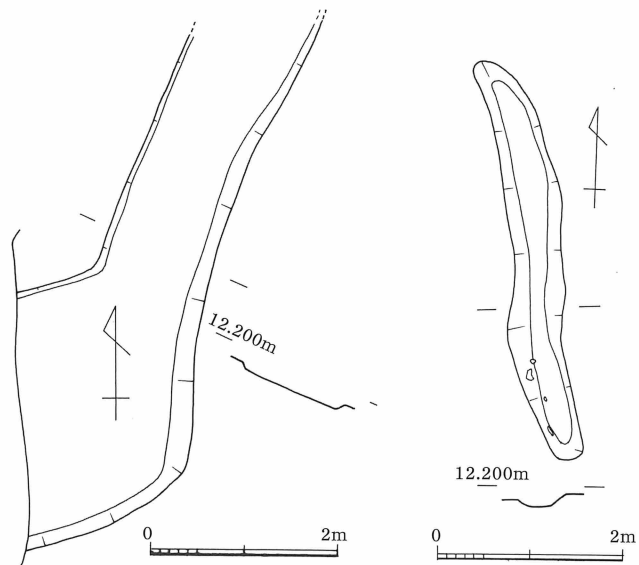
D区の南東部にある南北に延びる溝である。幅0.5mで深さは0.2mである。

遺物の出土は無い。

第17号溝 (S-001)

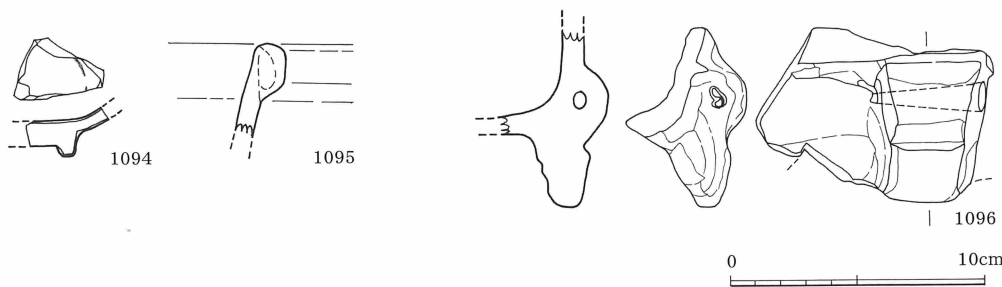
D区の南端を東西に延びる幅0.5m、深さ0.2mの溝である。第151図の土層断面で確認できる。平面的には残りが悪く、図示していない。

遺物は第132図1091で、瓦質土器の火鉢の脚部である。



第130図 D区第15号溝実測図 (1/80)

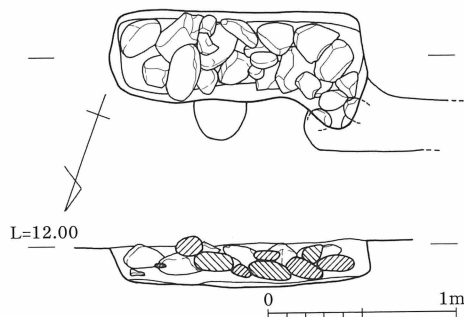
第131図 D区第16号溝実測図 (1/80)



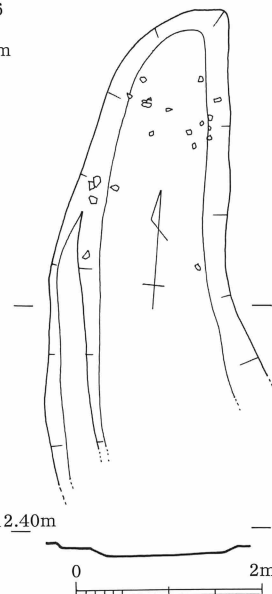
第132図 D区第15号, 17号溝出土遺物 (1/3)

第6号土坑 (S-125)

居住域の中で確認された土坑で、長軸 1.4m、短軸 0.4m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。出土遺物は無かった。



第133図 D区第6号土坑実測図 (1/40)

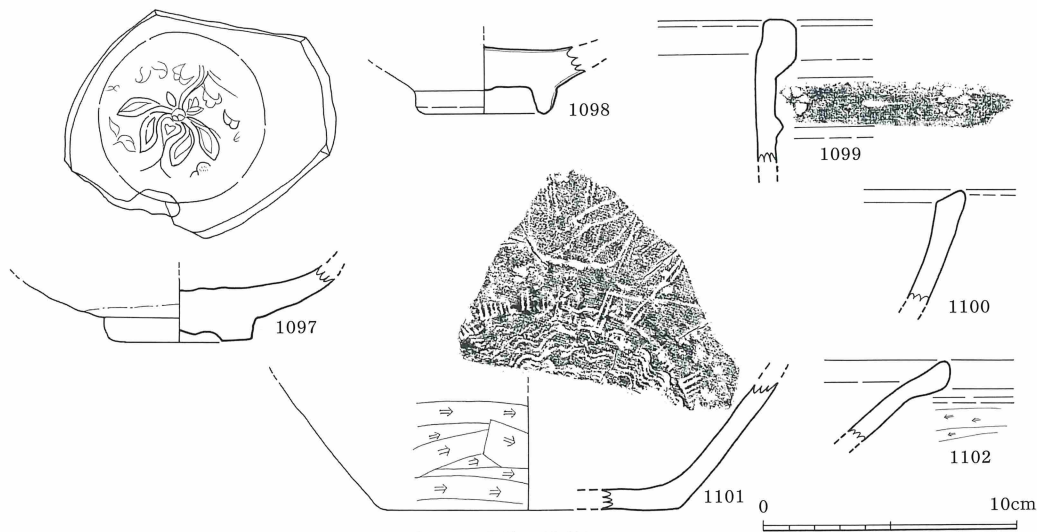


第134図 D区第7号土坑実測図 (1/80)

第7号土坑 (S-004)

第16号溝に沿うように南北方向に伸びる土坑。ただし、南側は溝に切られており全形は不明である。

出土遺物は、第135図 1097 から 1102 である。1097 は白磁碗、1098 は青磁碗である。1099 から 1102 はいずれも瓦質土器で、16世紀代の遺物である。



第135図 D区第7土坑出土遺物 (1/3)

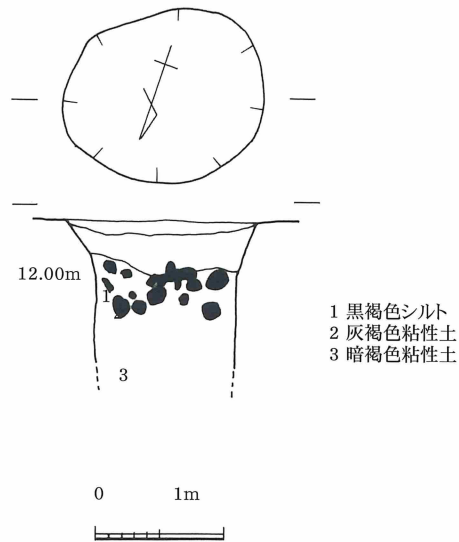
第4号井戸 (S-106)

D区の南端にある井戸である。調査前は道になっていた部分の下に当たる。直径 1.3m の素掘りの円形の井戸である。内部には礫が堆積しており、危険なため底まで掘っていない。

出土遺物は第137図 1101 から 1105 である。1101 は須恵器坏蓋。

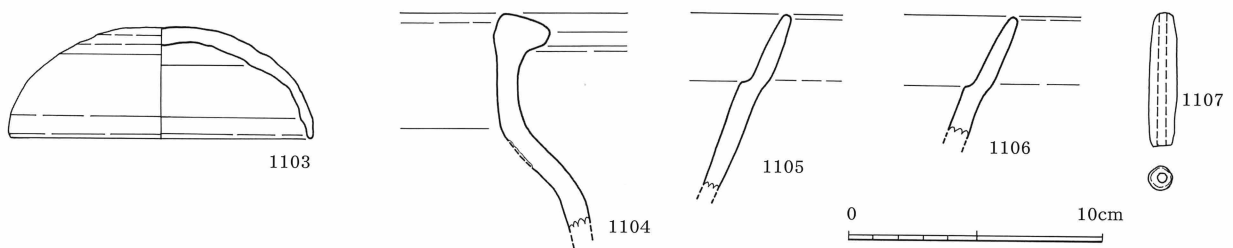
その他の出土遺物

第138図 1108 から 1110 はその他のピット等から出土した遺物である。1108 は瓦質の火鉢、1109 は土師質の鍋、1110 は瓦質の鉢である。

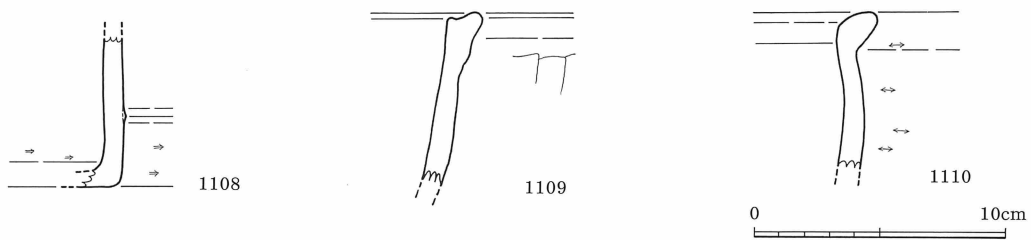


第136図 D区第4号井戸実測図 (1/60)

その他の遺物



第137図 D区第4号井戸出土遺物



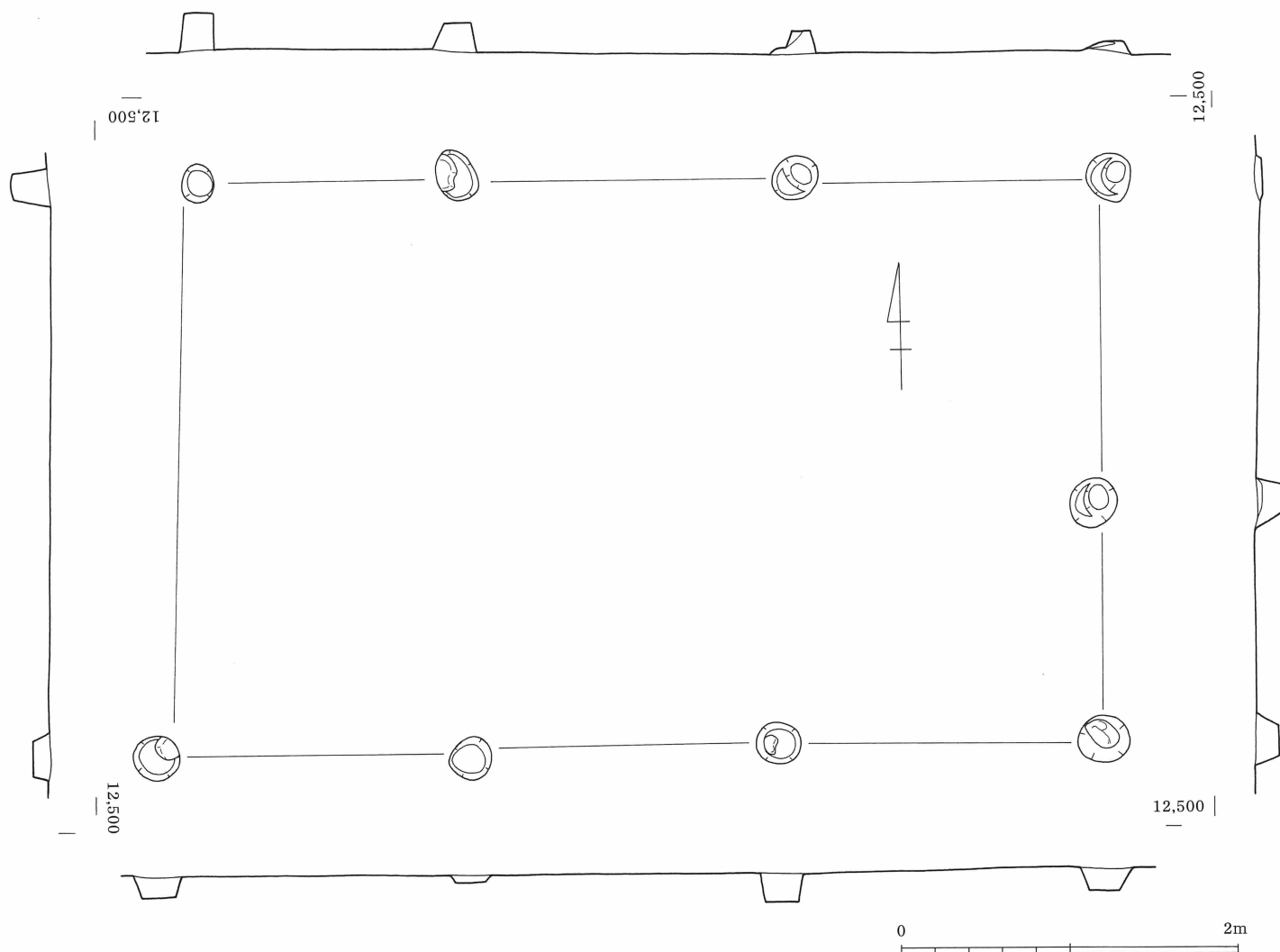
第138図 D区出土の遺物 (1/3)

< F区 >

掘立柱建物 1 棟と土坑が 4 基確認された。

第 11 号掘立柱建物(SB-1) (第 139 図)

調査区中央部において検出された。2×3 間の規模で、長軸 5.5m、短軸 3.4m を測る。規模は、梁行 5.75m、桁行 3.6m、柱間は 1.6 ～ 1.9m を測る。長軸方向はほぼ東西に向く。なお、短軸東側部分においては、柱穴が検出されなかったが、全体に削平を受けているために、消失した可能性が高い。柱穴内より遺物の出土はなかった。



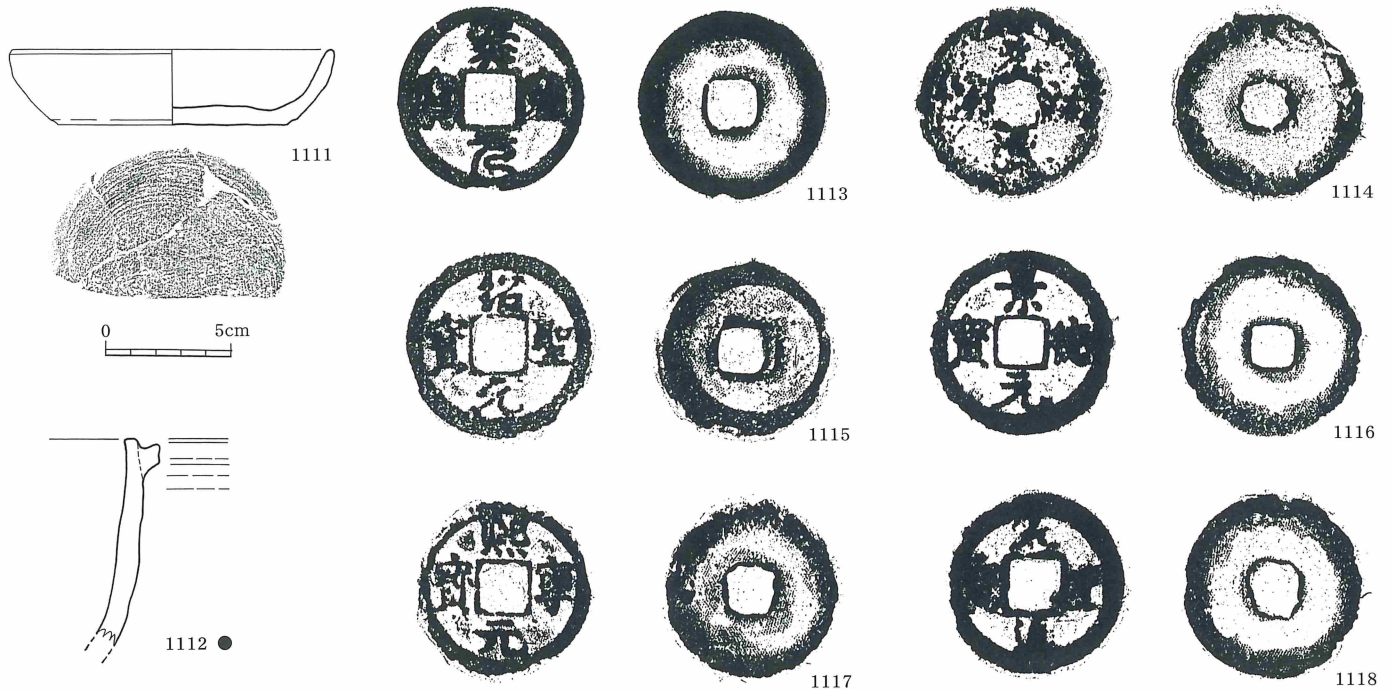
第139図 F区第11号掘立柱建物実測図

第8号土坑(SK-5) (第140図)

調査区南部分で検出された。長軸 2.5m、短軸 2.0m、深さ 15 cm の不定形な土坑である。埋土中に焼土及び炭化物が多く含まれていた。出土遺物は、大半が土師器の細片であったが、東側隅部分において、土師器の坏とともに 6 枚の中国製の銅銭が出土した。遺構の床面や壁面等に加熱を受けた状況は確認されなかったことから、火葬墓に伴う何らかの施設の可能性がある。

遺物(第141図)

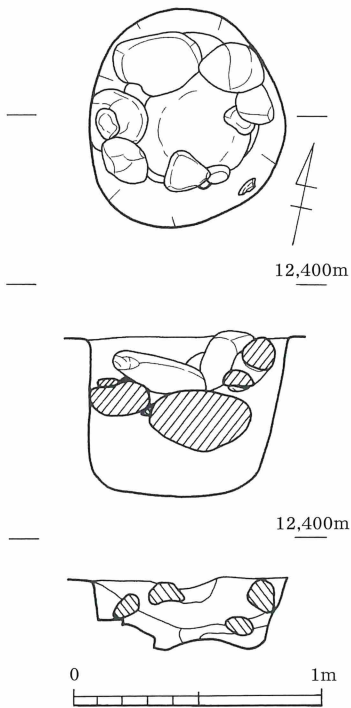
1111 は、土師器の坏で、口径 12.8 cm、器高 3.0 cm、底径 9 cm を測る。回転糸切り底である。2 は、瓦質土器の鍋で口唇部に貼り付けられた突帯状の張り出し部の上端部分に凹線を巡らしている。外面には多量のススが附着していたことから年代測定分析を行い 13 世紀後半の年代が得られている。1113 ~ 1118 は中国製の輸入銭である。すべて北宋銭で大量にもたらされたものである。1113、1114 は、熙寧元寶(初鑄年 1068 年)である。1113 は書体が隸書で描かれたもので直径 2.5 cm、重量 3.1g、1114 は書体が楷書で描かれたもので直径 2.3 cm、重量 2.3g である。書体に違いがあるが時期的には同時期のものである。1115 は、紹聖元寶(初鑄年 1094 年)で、直径 2.4 cm、重量 3.1g である。1116 は、元祐通寶(初鑄年 1086 年)で、直径 2.4 cm、重量 2.9g である。1117 は、景德元寶(初鑄年 1004 年)で、直径 2.4 cm、重量 2.8g である。1118 は、元符通寶(初鑄年 1098 年)で、直径 2.5 cm、重量 2.1g である。



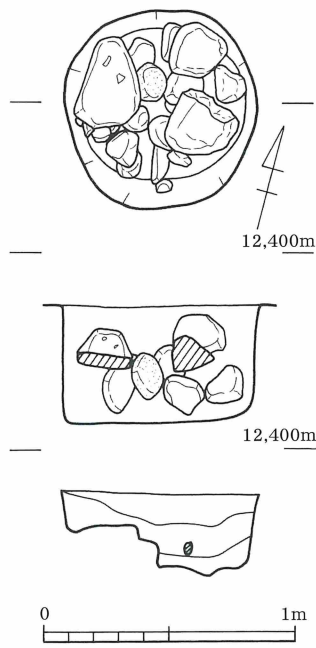
第141図 F区第8号土坑 (SK5) 出土遺物(1/3. 1/1)

第9～11号土坑(SK-6-SK-8) (第142～144図)

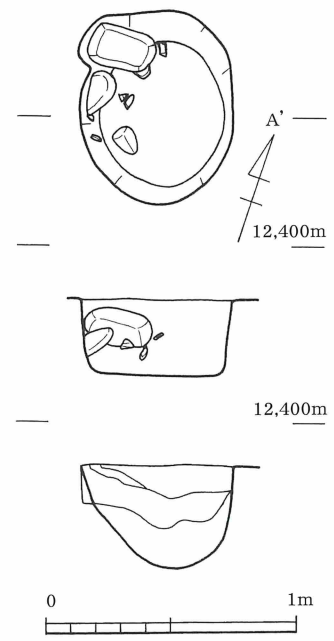
調査区南西隅部にSD-2と平行するようにほぼ等間隔で3基検出された。このうち第9号土坑は、第19号溝(128頁)を切る形で掘られている。平面観は、径が80×90cm、深さ60cmを測る。内部には、土師器の小皿と



第142図 F区第9号土坑実測図 (1/30)



第143図 F区第10号土坑実測図 (1/30)



第144図 F区第11号土坑 実測図 (1/30)

ともに、拳～人頭大の円礫が浮いた状態で確認された。SK-7は、ほぼ円形の平面観で径は78×80cm、深さ48cmを測る。土器の細片がわずかに出土し、SK-6と同様礫が確認された。SK-8は径75×60cmで深さは30～40cmを測る。土器の細片と礫が混じるが、礫の量は3基の土坑の中で最も少ない。

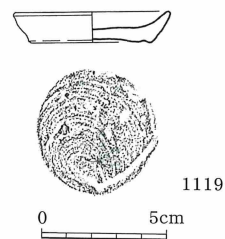
第9～11号土坑については、意図的な配置状況が想定されたが、土坑内部の遺物や礫の出土状況から遺構の性格を推し量ることはできなかった。なお、これらの土坑はSK-6から出土した土師器の小皿から、北東側に展開していたB区で検出された遺構とほぼ同時期のものであると考えられる。

第12号土坑(SK9)(第146図)

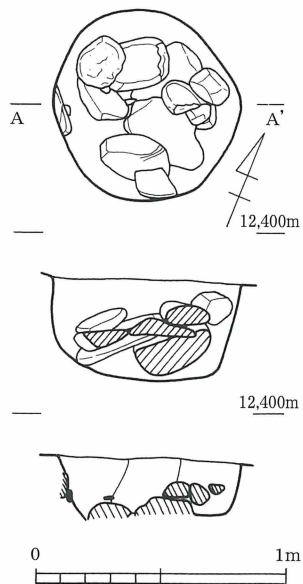
SK-9は、SB-1の約1.5m東側で検出された。75×80cmのほぼ円形の平面観を持ち、深さは40cmを測る。土坑内部には、遺物とともに拳～人頭大の円礫や扁平な礫が入り込んでいた。この状況は、第9～11号土坑の礫の出土状況と酷似している。

遺物

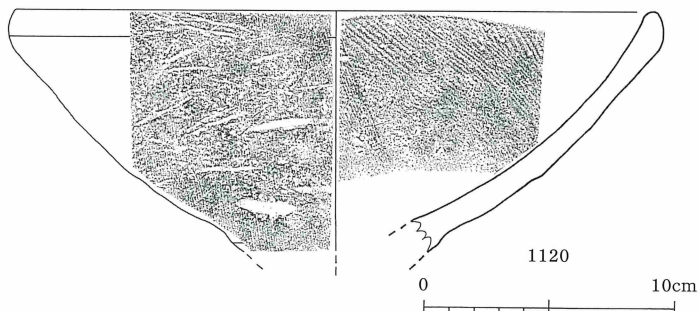
瓦質土器の鉢である。復元口径26cmである。口縁部はわずかに肥厚する。底部にいくに従って器壁の厚みが増す。外面はナデ調整、内面にはハケ目が明瞭に観察される。



第145図 F区第9号土坑出土遺物(1/3)



第146図 F区第12号土坑実測図(1/30)



第147図 F区第12号土坑出土遺物(1/3)

c 水路・水田跡

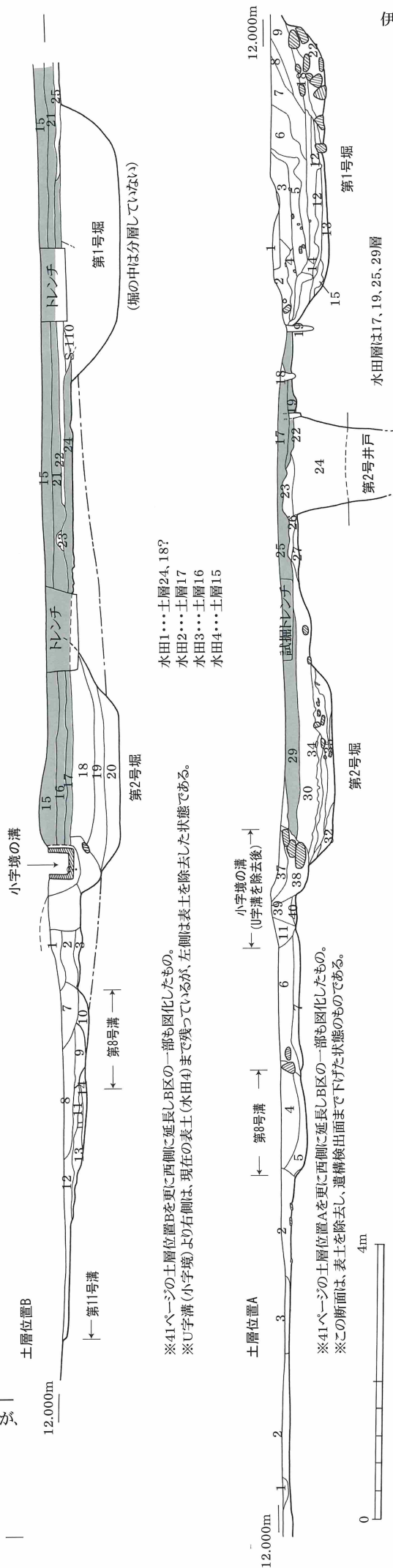
< A区 >

A区では、平面的に水田を確認することはほとんど出来なかったが、いくつかの土層断面で水田層が確認されている。このことから、館以前には水田は無かったこと、そして館廃絶後あまり時を置かずに水田になったことがわかった。土層図(第148図土層位置B)によりながら説明する。

図中には、館に係る第1号堀と第2号堀の断面が現れるが、いずれも堀堆積のすぐ上面は水田層である。第2号堀の部分では水田1から水田4まで、第1号堀の部分では、水田2から水田4が認められる。この内水田4は現在の水田で、調査区全面に見られるが、水田3以下はA区の中で終息する*。それらは、下層の水田ほどより西側に終結しており、時期を追って水田が徐々に東側に広がっていった様子を窺うことができる。

では、これらの水田の時期は何時だろうか。遺物からの直接的な手がかりはないが、第148図土層位置Aに見るように、第1号堀のすぐ横まで水田層(第19層)が迫っており、むしろ第1号堀を意識して築いたとも言える。丁度杭痕により切り合い関係は不明であるが、水田→第1号堀という切り合いは考えにくいので、第1号堀が意識されていた時期に、つまり耕作や廃棄土坑が掘られていた時期、あるいはその後あまり間を置かない時期に水田が作られたと考えられる。この水田の平面的な広がりにはほとんど及んでおらず、第1号堀や第2号堀に沿う形で南北方向に細長く伸び、A区の南側に展開していたものと考えられる。また、第1号堀の曲がるやや北側(S-1002や第1号溝のあたり)から南寄りには、粘質の強い灰褐色土層が地山となっており、この部分が本来谷地形であったことを窺わせる。このことと、調査区の東側には細長い水田が第1号堀に被さるように伸びることを考え合わせると、第1号堀に重なるように水田も屈曲して東側に展開していたものかもしれない。

*もちろん、水田の終結した外側に、一段高い水田が築かれていたとは想定できるが、微高地の下流側に向かって高い水田が築かれていたとは想定しづらい。

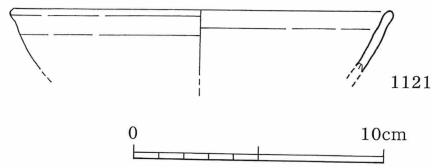


第148図 A区土層断面図(1/80)

< E 区 >

E 区は、調査前には家屋が建っていたが、その家屋を造るときに盛ったと思われる土砂の下は、水田層と非水田部分(水路と思われる溝以外には遺構は確認されていない)とに分かれていた。この内、中世に遡る溝は第 17 号溝 (S-001) で、この溝から南側には水田が広がっていたと考えられる。第 151 図の土層を見ると、第 10 層が水田層に該当する。第 17 号溝(第 6, 7 層)との間には、わずかな高まり(第 9 層)があり、畦畔があったことがわかる。第 17 号溝から地側(図の右側)は、水田部に比べて若干地山が高く、同時期には水田は作られていなかったと思われる。溝からは第 150 図の瓦器塚(1121)が出土している。比較的丁寧な作りであるが 13 世紀後半代のものであろう。

その他の溝は、基本的に北西から南東に向けて延びている。これは、中世の基幹水路が E 区の南側の現道部分を通っていたと考えられるのに対し、後述する様に近世以降の S1001 が E 区の北側に付け替えられたことが理由と考えられる。



第150図 E区第17号溝出土遺物

< F 区 >

F 区では中世の水田層の存在は確認できなかったが、調査区以北の水田に水を供給したと考えられる溝 3 条が検出されている。

第 18 号溝 (SD-2)

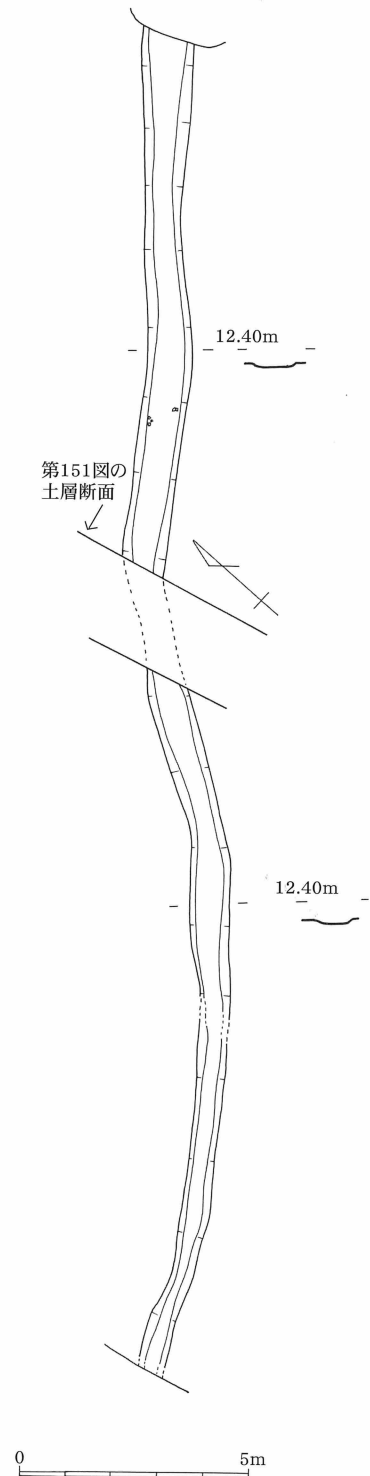
南東方向に調査区を横断するように走る。長さは約 25m、幅は、幅 35 cm、深さ 30 cm で、断面形状は、台形状であるが、部分的に南側の壁がほぼ直立するように立ち上がる箇所が見られる。

第 19 号溝 (SD-3)

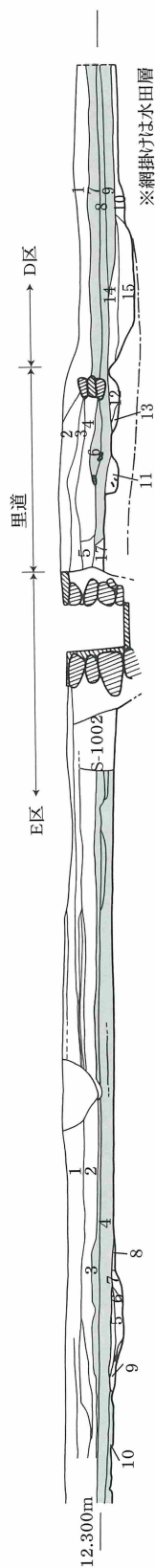
調査区南側において検出された溝で、南東方向に走る。SD-4 とほぼ並行して走る。溝の長さは約 13m、幅 35 cm、深さ 10 cm 程度の浅い溝である。断面形状は、蒲鉾状である。なお、遺物は出土しなかった。

第 20 号溝 (SD-4)

SD-3 と並行して走る溝で、長さ 10m、幅 30 cm、深さ 20 cm である。断面形状は、両方の壁がほぼ直立に立ち上がる箱堀状の形状を呈する。屋敷田遺跡で、類似した溝 (SD-9) が検出されている。遺物は出土していない。



第149図 E区第17号溝 (S001) 実測図 (1/3)



第151図 D-E区横断土層断面図 (1/80)

E区土層説明

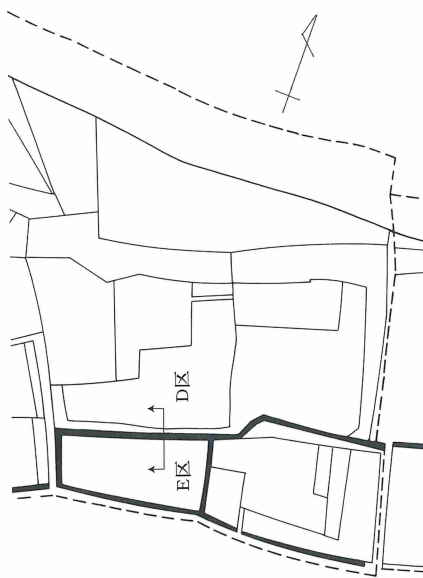
- 1 小砂利混入黒褐色土(2~3枚の表土層が形成)
- 2 暗褐色粘質土(宅地造成のための盛土層…明治21年以前)
- 3 黒褐色土(水田層…明治21年以前)
- 4 にぶい褐色土(複数枚の水田層により形成)
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 灰オリーブ砂質土 } 第17号溝埋土
- 8 暗褐色土
- 9 褐灰色土(10層の水田に伴う畦畔)
- 10 黒褐色土(水田,第17号溝に伴うもの)

D区土層説明

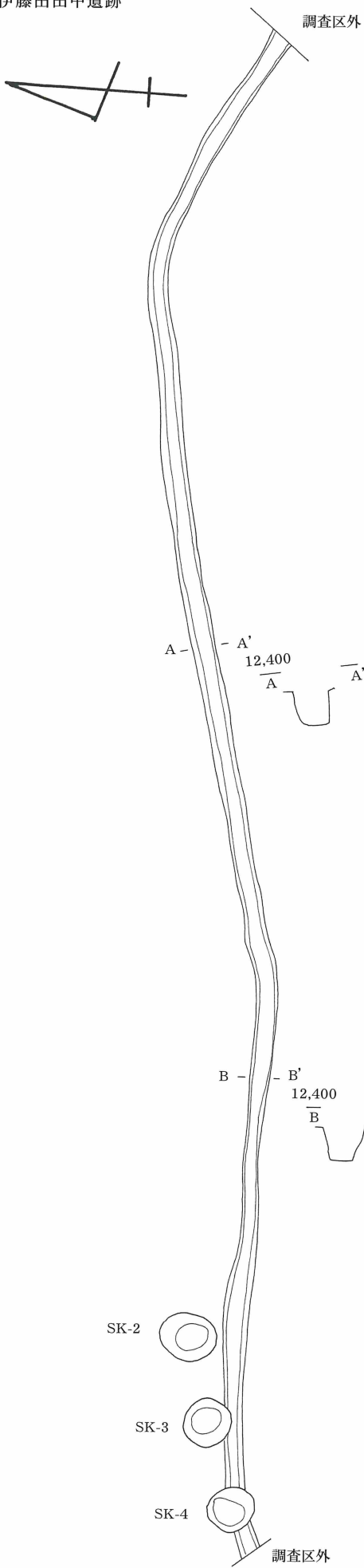
- 1 黒褐色土(現在の耕作土)
- 2 小礫多く含む黒褐色土 } 複数枚の道路面
- 3 炭化物・小礫含む黒褐色土
- 4 暗褐色土(石積みに伴う埋土)
- 5 暗赤褐色土(盛土)
- 6 褐灰色土(水田層か)
- 7 黒褐色土(水田層,明治旧字図の水田か)
- 8 灰褐色土(水田層)
- 9 黒褐色土(水田層)
- 10 褐灰色土(7.5YR 5/1)
- 11 褐灰色土(7.5YR 4/1) (第17号溝)
- 12 褐灰色土(7.5YR 5/1) } (溝)
- 13 にぶい褐色土
- 14 灰褐色土 } 第14号溝
- 15 褐灰色土

※第151図の土層断面図は、第152図に示した道を抜んだ二つの筆、即ち今回の調査でD区とE区に該当する部分を横断する形で図化したものである。

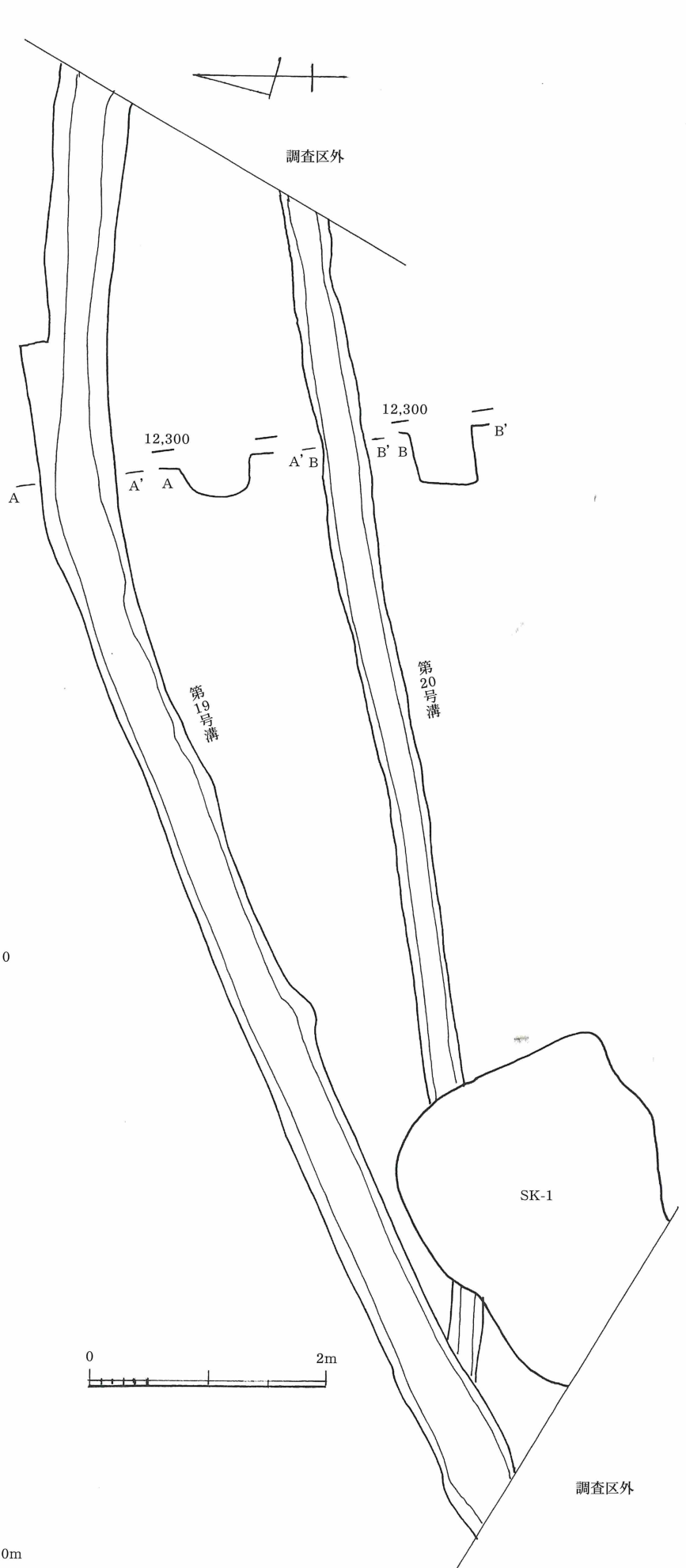
調査前は石積み溝(用水路)が南側につく道路(D区土層2,3)があった。この用水路の前身は明治21年の旧字図にもあるS-1002である。水田の形成はE区が先行する。即ち、第1号溝とそれに伴う水田(E区土層10)である。溝と水田の間には畦畔(E区土層9)がある。一方D区では土層10が水田かどうか判断できなかったが、土層9は水田である。この水田が覆う第14号溝からは15~16世紀の遺物が出土している。土層9は近世以降の可能性が高い。つまり、D区が水田化されたのは、かなり新しいと考えられる。道は、数枚の水田層を埋めて造られているので、更に新しいことが分かる。



第152図 D-E区横断土層位置図



第153図 F区第18号溝実測図 (1/100)



第154図 F区第19、20号溝実測図 (1/200)

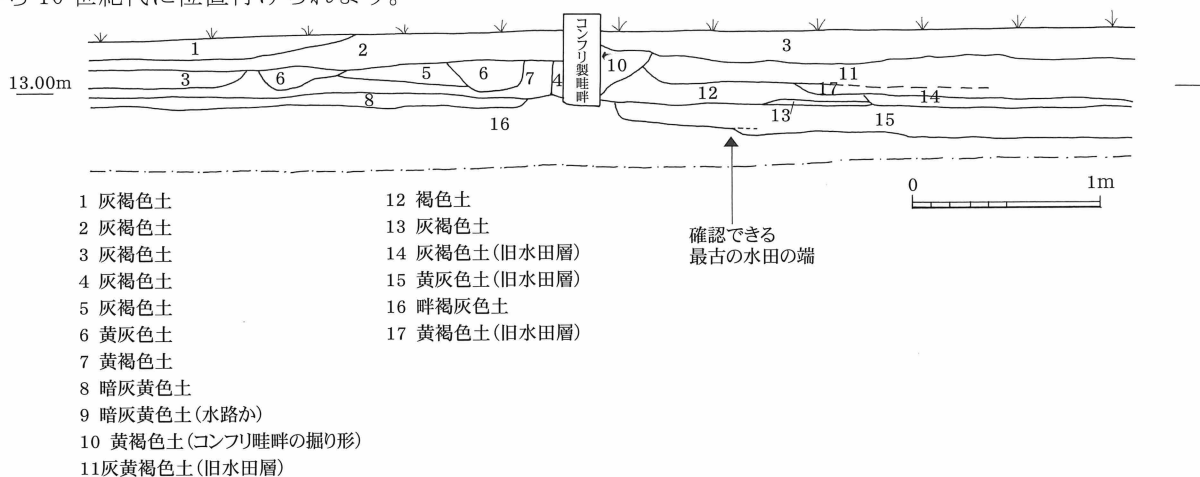
< G区 >

第155図の土層断面図を見るとわかるように、調査前までの水田の境(コンクリートの畦畔)のところから北側(右側)では、古い水田層(第15層)がある。しかし、詳細に見ると図の▲のところで落ちがあり、第15層の水田により壊されたより古い水田が▲より北側に存在した可能性が高い。これらは、第55図の断面図の第5層に相当することから、後述する第21号溝(S-003)の埋没後に水田化したことがわかる。

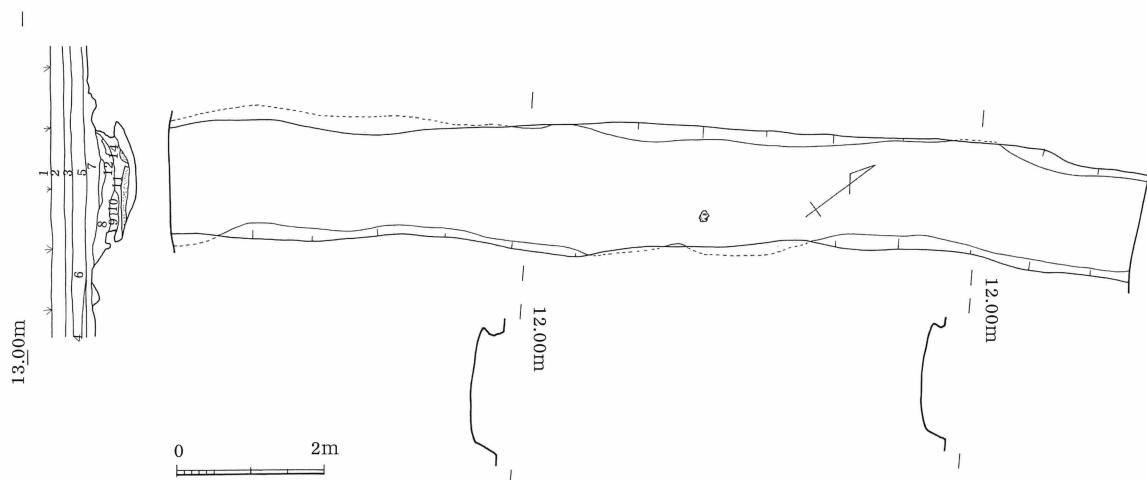
なお、第15層の水田は、第8層の水田とも同一時期であった可能性もある。この点は、この地点が旧地形にみるように旧河道であったことから、その両側が高く、旧河道の中央部に向かって水田が段をなしていたことは十分考えられることである。この点は、十分検証できなかった。

水田層の下から検出された第21号溝(S-003)は、第156図の土層断面図からわかるように、旧河道の砂層を掘削しているためにオーバーハングしており、旧状は窺い知れない。しかし、砂層が中程に堆積しているなど、流水があったことは確かで、そのためオーバーハングがより進んだのであろう。この溝(S-003)は、県道を挟んで西側の屋敷田遺跡A区からB区に渡って確認された溝(SD-1)と同一のものと考えられる。底面の標高から、この溝は西側から東側に向かって流れているのがわかる。そして、E区やC区ではこの溝の続きは確認されなかったことから、現在の道の下を通過して東に向かっていたと考えられる(195頁の第194図参照)。

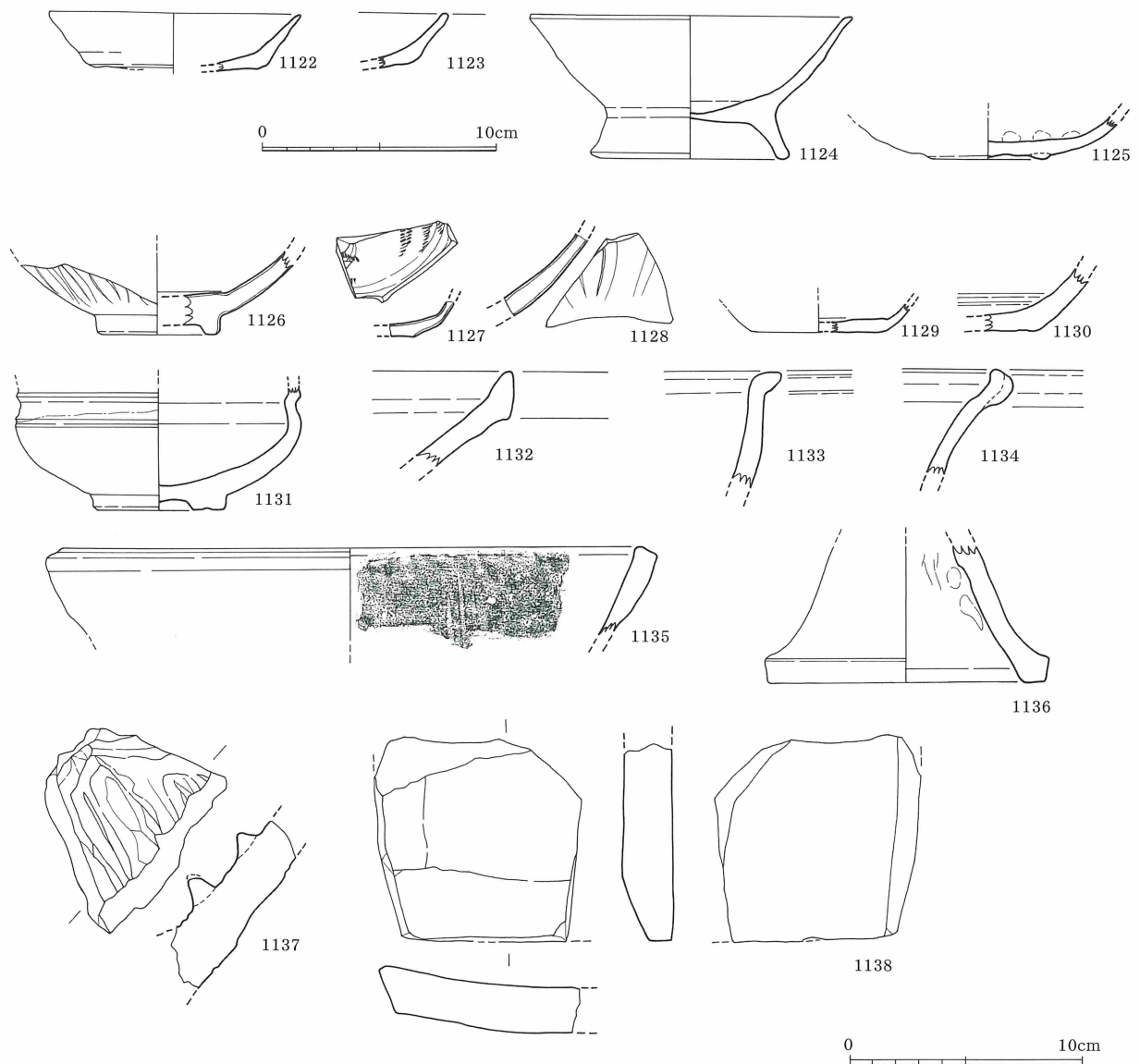
溝からは第157図1122から1125が出土している。この内1125は上層の出土で、溝が機能していた時期を示す遺物は1122から1124である。1122と1123は底部ヘラ切り離しの土師器坏である。外面は摩耗のため、ミガキの有無は不明である。1124は長く伸びた高台を持つ土師器碗で、外面のミガキ等は不明である。形態から10世紀代に位置付けられよう。



第155図 G区南壁土層断面図(1/40)



第156図 G区第21号溝実測図(1/100)



第157図 G区出土遺物実測図(1/3)

第157図 1126 から 1138 は第155図に示した15層(水田層)から出土した遺物である。1126 から 1128 は青磁、1129 は白磁である。1130 は緑釉陶器、1131 は陶器、1132 は須恵器、1133 から 1136 は瓦質土器である。1137 は瓦塔、1138 は平瓦である。時期は古代の瓦塔を除くと、13世紀から15～16世紀と時期幅のある遺物である。15層が本来2時期の水田からなることも考慮すると、水田の営まれた幅を示すものと考えられる。

以上のように、各区で中世に属する水路や水田が確認されたが、水田については面で追うことができなかったために、その広がりを押さえることは難しい。しかし、水路のあり方から考えて、この地が水田化する前と後の画期を想定することは可能である。それらをⅠからⅢ期としてまとめておきたい。

Ⅰ期 条里水田に供給する水路が、後の田中集落の真ん中を通して東流していた時期で、この段階では条里より西側、すなわち道(古代官道)から山側には水田が無かった段階(8～9世紀?)

Ⅱ期 条里水田に供給する水路が、後の田中集落が乗る微高地の南側にある旧河道の中に作られ、現道に沿って東流していた時期で、Ⅰ期同様官道から西側には水田が無かった段階(10～12世紀?)